第64回日米学生会議
日本側報告書

The 64th Japan-America Student Conference

衝突から生まれる新たな意思

～未来を構築する力へ～

Share in the Present, Connect for the Future

: Strengthen Ties to Inspire Change

第６４回日米学生会議　日本側報告書

目次

序　章　日米学生会議概要……5

第１章　第64回日米学生会議概要……7
第64回日米学生会議概要……8
日本側参加者名簿……10
米国側参加者名簿……11
メディアへの掲載……12

第２章　事前活動……14

第３章　本会議・サイト活動……27
テキサスサイト……28
マディソンサイト……32
バークレー／サンフランシスコサイト……36
シアトルサイト……39

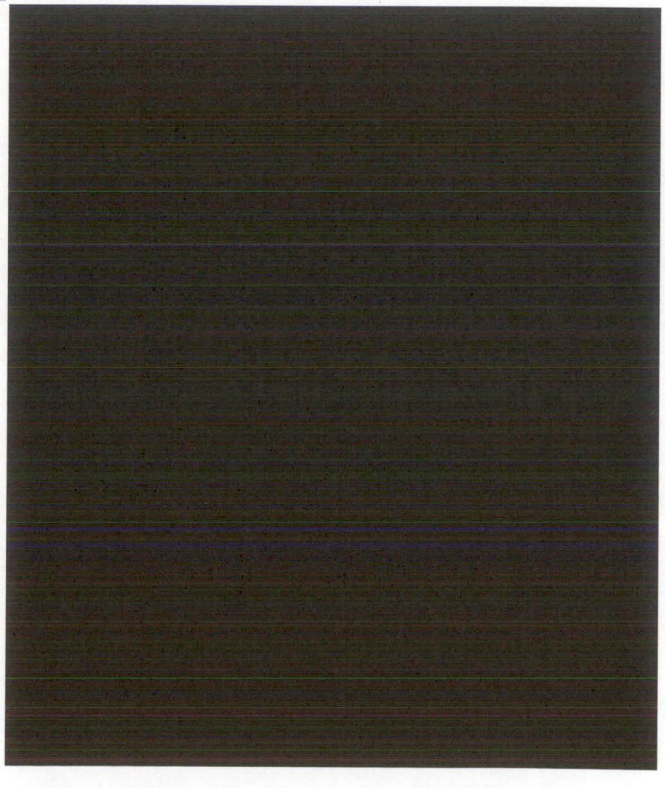
第４章　分科会活動……44
現代社会における企業活動と倫理……50
環境と科学技術……57
パーソナル/ナショナルアイデンティティ……64
復興と社会の再構築……71
人権問題と我々の責務……77
安全保障と日米……83
グローバル化における文化芸術……88

第５章　参加者の声……90

第６章　日米学生会議にご協力いただいた方々……107

序　章

日米学生会議概要



第64回日米学生会議実行委員長挨拶

第64回日米学生会議実行委員長
山下 祐里奈

2012年は、アメリカを始め、世界各国で大統領選挙や政権交代が行われ、国際社会における大きな変化の年であった。技術の進歩に伴ってグローバライゼーションが進み、国家間の結びつきがますます強固になる中、このような各国における政治的な変動は、日本にも多大な影響を及ぼすだろう。では、目まぐるしく移り変わる世界を前に、学生である私たちは、日本のため、そして世界のために何ができるだろうか。このような疑問を出発点に、参加学生が社会の一員として世界の問題や日本の問題に真摯に向き合い、考え抜き、自身の果たすべき役割を見出すきっかけとなるような会議を目指し、第64回日米学生会議を創り上げてきた。

そのような会議にするためには、掲げたテーマにある「衝突と理解」がまさに不可欠であった。多様なバックグラウンドを持つ日米の学生が、特定の利害に縛られることのない率直な意見を交わし合う中、時に衝突が生まれた。しかし、そこからさらに一歩踏み込んで考えることで、互いの価値観や意見を尊重し合い、相互理解を深め合うことができた。一人一人の参加者が、衝突と理解を繰り返しながら、社会の抱える様々な問題を自らの問題として捉え、徹底的に議論し、自身のなすべき課題を模索した。

また、今年は東日本大震災から一年が経ち、「復興元年」と言われる年でもあった。本会議では、分科会の1つとして災害復興を取り上げたが、分科会にとどまらず、日米両国の参加者全員で日本の未来を考えた。震災直後に行われた「トモダチ作戦」からもわかるように、日本社会の再構築には、アメリカを始め他国からの協力は不可欠である。だからこそ、未来を担う日米両国の学生が共に東日本大震災について議論をしたことには、大きな意味があっただろう。

なぜ、「日米」なのか。グローバル化が進む中、この問いを投げかけられることは避けられない。日本とアメリカは、安全保障条約を中心に政治的、経済的に強い結びつきを保ってきた。しかし、新興国の台頭と先進国経済の低迷により、世界的パワーシフトが起こり、日米関係の希薄化が懸念されている。だからこそ、私たちは今、日米関係を再評価し、両国が直面する様々な課題にともに立ち向かう必要がある。日米学生会議では、両国の将来を担う学生が一堂に会し、1ヵ月をかけて信頼関係を築き上げた。このような学生個々の絆は、未来の日米関係の根幹をなすはずだ。参加者が本会議を通して得た経験が、日米関係、ひいては国際社会にとって、「未来を構築する力」となっていくだろう。

第64回会議は、「自分と向き合う時間だった」と語る学生が多かった。本会議では、共同生活や議論において、文化の違いからくる価値観の相違や言語の壁など、一人一人がそれぞれの課題に直面した。苦労や葛藤を繰り返しながら、自らの限界に対峙し、向き合った。そして、学生が互いに手を差し伸べつつ、自分たちの力で立ちはだかる壁に挑み乗り越えることで、会議全体が活気づき、内容の密度も質も向上した。このような個々の挑戦や成長も、日米学生会議ならではの大きな醍醐味、意義であることを実感した。

最後になりましたが、第64回日米学生会議開催に際し、多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、準備段階並びに本会議でご協力賜わりました講師の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、ISCの皆様、そして現役学生の活動を支えて下さった会議OB・OGの皆様、その他様々な形でご支援、ご協力をいただいた全ての皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934 年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（日本国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4 名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢 99 名（うち 22 名は大学教授、およびその夫人でオブザーバー）の米国側代表を伴って帰国した。こうして第 1 回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第 2 回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以降 1940 年の第 7 回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第 3 回（1936 年）早稲田大学。第 4 回（1937 年）スタンフォード大学。第 5 回（1938 年）慶應義塾大学。第 6 回（1939 年）南カリフォルニア大学。第 7 回（1940 年）津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は 1947 年に再開し、第 8 回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953 年の第 14 回会議まで日本で開催された。翌 1954 年、第 14 回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第 15 回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15 名のみの日本側参加者が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2 国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく 1954 年、アジア地域の学生との会議を主目的に、第 1 回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954 年を以って、再び中断されることとなった。

1963 年に至り、翌 1964 年が第 1 回会議創立の 30 周年に当たることもあり、日米相互開催の形で会議再開を望む声が高まった。これを受け、第 1 回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者として責任を取ることで会議を再開することが決定された。第 1 回及び第 2 回の米国側参加者の努力もあり、1964 年、日本側参加者 77 名と米国側参加者 62 名による、第 16 回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964 年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973 年第 25 回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を 1 ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した 1973 年でもあった。1978 年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第 31 回会議が開催された 1979 年には、米国においても戦前の参加者により JASC, Inc. が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

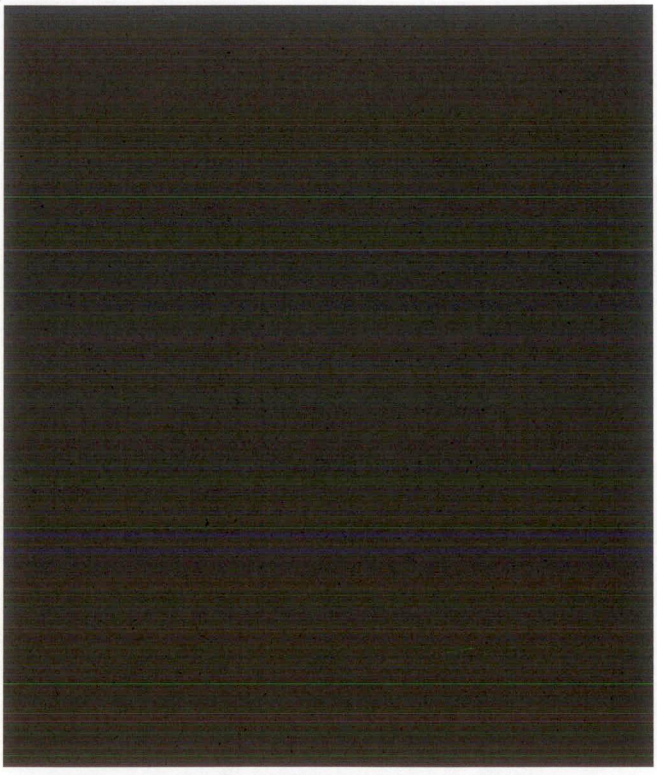
その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC, Inc.の協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態をとる中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側支援団体であるJASC, Inc.はISC, Inc.(International Student Conference)と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

本文中の略語について

JASC(ジャスク)	:日米学生会議(Japan-America Student Conference)の略。
JASCer(ジャスカー)	:日米学生会議参加者を指す。
IEC	:日本側主催団体である国際教育振興会(International Education Center)の略。
ISC, Inc	:アメリカ側主催団体であるInternational Student Conferences , Incの略。
EC	:実行委員会、または実行委員Executive Committeeの略。
AEC	:米国側実行委員会American Executive Committeeの略。
JEC	:日本側実行委員会Japanese Executive Committeeの略。
デリ、デリゲート	:日米学生会議参加者、Delegate。
ジャパデリ	:日本側参加者。
アメデリ	:アメリカ側参加者。
アラムナイ	:日米学生会議の過去の参加者。
サイト	:本会議開催地の意味。
RT	:参加者がいずれかに必ず帰属する分科会のこと。Round Tableの略。
リフレクション	:参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。

第１章

第 64回
日米学生会議概要



第 64 回日米学生会議概要

「衝突から生まれる新たな意志～未来を構築する力へ～」
－Share in the Present, Connect for the Future : Strengthen Ties to Inspire Change－

2012 年は、アメリカを始め、世界各国で選挙や政権交代が行われ、国際政治の転機を迎えるだろう。国際社会における各国間の結び付きがますます強固になる中、この政治的変化は世界に大きな影響を及ぼすはずだ。中国を始めとする新興国の台頭により、国際関係も変動しつつある今、私たちは、日本の立場のみならず、安全保障や経済の面で非常に強い相互依存関係を持つ「日米」の関係について再考する必要がある。

また、2011 年 3 月 11 日に発生した未曾有の大震災とそれによる原発事故は世界に大きなショックを与えた。震災から 1 年を迎え、より具体的な復興政策や各国からの協力が引き続き必要となる。日本は、災害大国そして原発事故発生国として、改めて災害対策を打ち出すとともに、原発を巡るエネルギー政策を見直し、世界に発信していく責任がある。私たちも学生として、長期を要する震災復興に今後どのように関わり、貢献することができるかを考えねばならない。

このような中開催される第 64 回日米学生会議では、日米両国から問題意識の高い学生が集まり、激動する世界においていかに日米が連携し、世界的財政危機や環境問題など両国を取り巻く国際問題に対処していくべきか、1 ヵ月をかけて議論し、考える。特定の利害に縛られない学生だからこそ、自由な意見を発信し合うことができる。多様なバックグラウンドを持つ日米学生の率直な意見は、時に「衝突」を生むだろう。しかし、互いを尊重し合いながら、意見や価値観を「理解」するよう努めていく中で、自身の新たな視点や課題を見出し、未来へ向けた「意志」を育むことを目指す。参加者一人一人が、学生としての目標や課題、同時に国際社会の一員として将来担っていくべき役割を模索し、共に未来を構築するために行動を起こすきっかけになることを期待する。

【主催】
一般財団法人国際教育振興会
【企画・運営】
第 64 回日米学生会議実行委員会
【開催期間】
2012 年 7 月 28 日(土)～2012 年 8 月 20 日(月)
【開催地】
各開催地での滞在期間は約1週間となり、それぞれがサイトテーマの下で運営される。サイトテーマとは、開催地ごとに実行委員の準備するプログラムに共通する「問題意識」を明文化したものである。これにより、参加者が初めて経験する多くのプログラムや体験で混乱しないよう、持つべき問題意識を共有し、その開催地で何を学ぼうとするのかわかりやすく示すことを目的としている。第 64 回日米学生会議では以下の 4 箇所を巡る。

第 1 開催地≪Dallas, Texas≫
第 2 開催地≪Madison, Wisconsin≫
第 3 開催地≪Berkeley/San Francisco, California≫
第 4 開催地≪Seattle, Washington≫

【本会議におけるプログラム】

・分科会(Round Table)

本会議において、活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生（実行委員１名を含む）が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。第64回会議における分科会は以下の通りである。

(1)Business and Ethics in the Modern World
現代社会における企業活動と倫理
(2)Environment and Technology
環境と科学技術
(3)Personal and National Identity
パーソナル/ナショナルアイデンティティ
(4)Post-Crisis Reconstruction
復興と社会の再構築
(5)Human Rights and Responsibility
人権問題と我々の責務
(6)Cooperative Security in the 21st Century
安全保障と日米
(7)Cultural Innovation and the Arts
グローバル化における文化芸術

・Field Trip

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な具体的視点を得るための重要な活動となる。

・Special Topics

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時に、参加者同士のより広い交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

・Conference Wide Reflection

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど様々なことを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことによって、それぞれの中に「共鳴」が生まれ、相互理解のための手助けとなることを期待している。また、他者を理解する場を通して、より充実した会議に向けての姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

・Forum

第64回の各開催地で、サイトテーマに関連する問題や日米両国に深く関わるトピックについて、一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や学生を交えたパネルディスカッションなどを行う。これにより、参加者が各開催地で学んだ知識を深め、新たな問題意識や興味を持つ機会になることを期待する。

・Final Forum

最終開催地において行われるファイナルフォーラムでは、１ヵ月の総まとめを行う。主として分科会における議論の概容を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を、第64回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。

第64回日米学生会議日本側参加者名簿

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
山下　祐里奈＊	名古屋大学法科大学院	法曹養成専攻	1年	—
川邊　拓也	立命館大学	法学部法学科	4年	HR
伊藤　実梨	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年	SEC
櫻井　千浪	東京医科歯科大学	医学部医学科	3年	BE
杉岡　昌太	大阪府立大学	人間社会学部人間科学学科	4年	ET
杉山　和	武蔵野美術大学	造形学部デザイン学科	3年	REC
森田　真弓	東京大学	経済学部経済科	4年	CIA
八木澤　龍大	明治大学大学院	文学部文学研究科	1年	ID

＊日本側実行委員長

日本側参加者	大学	学部・専攻	学年	RT
浅原　光貴	東京大学	教育学部比較教育社会学コース	3年	BE
飯島　千咲	国際基督教大学	教養学部アーツ・サイエンス学科	2年	ID
市毛　裕史	国際基督教大学	教養学部アーツ・サイエンス学科	2年	BE
大多和　祐介	早稲田大学	政治経済学部国際政治経済学科	1年	CIA
小田垣　彩花	滋賀医科大学	医学部医学科	2年	CIA
片山　恵理	弘前大学	医学部医学科	2年	HR
鹿山　ゆかり	国際基督教大学	教養学部アーツ・サイエンス学科	3年	SEC
川野　さりあ	順天堂大学	医学部医学科	3年	SEC
キム　ヘジン	東京大学	教養学部総合社会科学科	3年	HR
木村　光太郎	横浜国立大学	工学部知能物理工学科	3年	ET
山東　典晃	筑波大学	医学部医学類	4年	ET
竹内　正人	武蔵野大学	環境学部環境学科	4年	CIA
中野　舜一郎	東京大学	法学部第二類	4年	HR
中道　洋司	早稲田大学	政治経済学部政治学科	3年	HR
西村　優希	大阪大学	外国語学部外国語学科	3年	ID
野口　ゆかり	慶應義塾大学	法学部法律学科	2年	REC
野地　洋平	一橋大学大学院	経済学研究科	1年	REC
廣野　允威	立命館大学	政策科学学部政策科学科	3年	REC
ヴー　ホアン　ミン	東海大学	教養学部国際学科	3年	ID
藤川　健太郎	東京大学大学院	法学政治学研究科	1年	SEC
藤田　耕己	東海大学	医学部医学科	2年	SEC
松浦　理咲子	東京大学	法学部第二類	4年	BE
三浦　愛	慶応義塾大学	法学部政治学科	2年	BE
森田　修弘	慶応義塾大学	法学部法律学科	2年	ID
横田　真彩	筑波大学	社会・国際学群国際総合学類	2年	ET
饒平名　玲美	慶応義塾大学	総合政策学部土屋研究会	3年	ET
林　真希　チェルシー	慶応義塾大学	法学部政治学科	2年	CIA
渡部　寛史	岡山大学	医学部医学科	3年	REC

分科会の略称　BE:現代社会における企業活動と倫理, ET:環境と科学技術, ID:パーソナル／ナショナルアイデンティティ, REC:災害復興と社会の再構築, HR:人権と我々の責務, SEC:安全保障と日米,CIA:グローバル化における文化芸術

第 64 回日米学生会議アメリカ側参加者

American Executive Committee

Name	University	Major	Year	RT
Jillian Anderson＊	Colgate University	International Relations & Japanese	4	—
Zachary Callaghan	Cornell University	Linguistics	2	SEC
Rachel Horton	Villanova University	Mathematics	4	HR
Kimberly Julien	Villanova University	English	2	ID
Jose Lamazares	Duke University	Asian & Middle Eastern Studies	3	BE
Andrew Leistensnider	Baylor University	Economics	3	REC
Danielle Wilson	Tufts University	Environmental Engineering	4	ET
Stephen Zellmer	Univ. of Wisconsin-Madison	Japanese	2	CIA

＊American Executive Committee Chairperson

American Delegates

Name	University	Major	Year	RT
Kei Aizawa	George Fox University	Graphic Design	3	HR
Cruz Arroyo	Haverford College	English	1	BE
Matthew Bassett	University of Idaho	Virtual Technology & Design	Grad	CIA
Margaret Beneville	Columbia University	East Asian Languages& Culture	3	REC
Jessica Brooks	Earlham College	International Studies	3	CIA
Chris Brown	Univ. of Wisconsin-Eau Claire	Spanish and Business	4	ET
Jun-Yong Choi	Ohio State University	Finance and Economics	2	BE
Santiago Cruz	Cornell University	Government	2	SEC
Autumn Ding	Bryn Mawr College	Undeclared	1	BE
Sabine Etinne	American University	International Communications	Grad	SEC
Jonathan Geider	Rutgers University	Criminal Justice & Political Science	3	HR
Channing Harris	Roosevelt University	Human Resources	4	BE
Caitlin Jordan	Smith College	East Asian Studies	4	SEC
Katherine Jordan	Wellesley College	French and Japanese	1	ID
Keiko Kato	University of Illinois	Material Science & Engineering	2	ET
Mari Kobayashi	University of London	Politics & International Relations	3	REC
Shintaro Kono	University of Illinois	Leisure Behavior	Grad	REC
Nobuko Masuno	Univ. of California-Berkeley	Psycology	2	SEC
Alithea MacFarlane	Bowdoin College	Religion	2	ET
Madison Mears	Univ. of Wisconsin-Madison	Pre-Business & Japanese	1	HR
Patrick Meuer	Edgewood College	History	4	ID
Akifumi Nagano	Univ. of Arkansas-Fayetteville	Communications	Grad	CIA
So Nakayama	Macalester College	International & Asian Studies	1	ID
Takuya Naruse	Binghamton University	Undeclared	1	CIA
Aiko Norita	Univ. of California-LA	International Studies	3	ID
Ariel Strenger	University of Louisville	Economics	4	HR
Manabu Taketani	Calvin College	History	1	REC
Paul Yarabe	Harvard College	Molecular & Cellular Biology	3	ET

メディアへの掲載

■学内雑誌等

2012年1月30日　Ritsumeikan Style（立命館大学）

2012年2月1日　明治大学広報第640号（明治大学）「日米学生会議に明大生が参加」

2012年8月31日　News Letter Vol.33(大阪日米協会)

■ 動画配信

2012年8月17日　NicoNico Inc.「第64回日米学生会議ファイナルフォーラム日米生放送」

第 2 章

事前活動

第 64 回日米学生会議事前活動

■春合宿

日程：5 月 5 日(土)～5 月 7 日(月)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

概要：

選考により最終決定した 28 名の参加者と 8 名の実行委員が、オリンピックセンターにて行われた 2 泊 3 日の合宿を通して初の顔合わせを行った。本合宿において、参加者は日米学生会議の歴史を学び、英語での講義を通じて日米関係について知り、分科会活動をすることによって「日米学生会議の基礎」を身に付け、8 月の本会議に向けての最初の一歩を踏み出した。

・アラムナイレセプション

春合宿で、“ようこそ先輩”とレセプションを通してアラムナイとお話をさせていただける機会を持つことが出来た。JASC はこれから共に会議を作り上げていく同期の仲間たちだけでなく、こうしたアラムナイの方々とも強固な繋がりが持てることにとても驚いた。私は、このような名刺を交換しお話をさせていただくという経験はほとんどないようなものであった。そのような雰囲気に緊張している中、とても親しみやすく接していただいた。他では中々伺うことの出来ない話をお聞きすることが出来てとても有意義な時間となった。(大多和祐介)

ようこそ先輩での交流の様子

・日米関係勉強会

私は日本人なのに、自分の国の自衛隊について、アメリカ人のAshleyから色々教えてもらっているのがなんか不思議な気分でした。自分の国のことは、自分でもきちんと理解していないといけないなと思い、本会議に向けてもっと勉強していきたいと思います。モチベーションが上がりました。

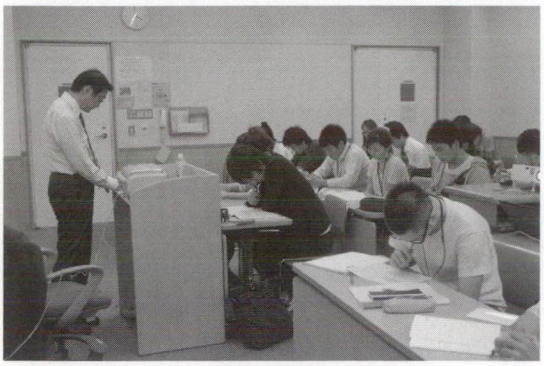
英語の理解に関しては特に問題はありませんでしたが、ところどころ分かっていない人にどうやったら上手く分かりやすく伝えられるように自分がなるのかが重要なのかなと思いました。(野口ゆかり)

第63回アメリカ側実行委員による日米関係についての講演の様子

・東海大学教授綾部功教授によるディベートワークショップ

綾部先生のお話はかなりわかりやすく、競技ディベート等を行なったことがない私にも理解しやすい内容でした。実際に練習を行う中で、先生に教えていただいた方法を使い意見を組み立てることで、相手にうまく自分の意見を伝えることができるなと感じました。

これから、この方法を練習して本会議までに身に付けたいと思います。(渡部寛史)


ディベート講義を受ける参加者達

・春合宿感想文

ありきたりな言葉になってしまうが、とても充実した3日間であった。プログラムの内容はもちろん、何より出会ったメンバーのレベルの高さに刺激を受け、今後お互いに高め合っていくことになることを考えると非常に楽しみになった。また、JASCの歴史や過去に参加した先輩方のお話を伺ったことで、今回日米学生会議に参加することの素晴らしさや重みを感じたので、これからはますます気を引き締めて臨みたいと思う。（浅原光貴）

文字通り、期待と希望が入り交じって参加した初日から、もっと参加者のみんなと話して、最高のJASCを必ず作り上げると決めみんなと分かれた最終日まであっという間の3日間でした。どんな話を振っても正面から投げ返してくれる64thJascer、各方面の最前線で活躍されている先輩方、このようなすばらしい人たちに巡り会えたことは自分の人生にとって必ずプラスになると確信できた春学宿でした。この高揚感やモチベーションを忘れずにいたい、そう思わせてくれる最高のスタートだったと思います。（市毛裕史）

JASCの合格通知をもらってからの最初の一歩。あまり実感も湧かないまま、行くまでの道のりでは不安も期待も特になかったのが本音ですが、実際に行ってみてみんなと顔合わせができて、初めて「この夏自分はJASCに行くんだな」という実感を噛み締め、今までになく充実した夏をこのメンバーで作り上げたいと思える3日間でした。JASCのOBOGと実際にお会いし、いまだに仲良くされている彼らの様子を見て、この36人との縁の貴重さを感じ、自分をこのような恵まれた環境におけた事をとても嬉しく思いました。（キム・ヘジン）

春合宿を終えて、JASCでできそうなこと・行けそうなフィールドトリップが意外にあるなと感じました。OBOGのネットワークなども駆使しつつ、自分に知識もつけて、悔いのない本会議を迎えられるようにしたいです。また、英語に関しては、まだまだ不十分なので、デリのみんなと協力しつつ、本会議までに努力して習得したいと思います。他のメンバーとも、まだあまり話していない人が多いので、これから仲を深めていきたいです。（中野俊一郎）

春合宿は、本当に刺激的だった。会議に参加するメンバーに会って感じたのは、アクティブで、深い知識や思考力、英語力を持っていて、本当に凄いという事だ。そして、そのため、私は自分の至らなさを感じる事が多かった。知識や英語力不足の為に思うように発言できず、悔しい思いをし、会議自体に対する思いが薄かったことから、その様な態度を改めると同時に、様々な面において自分を変えながら頑張らなければいけないと思った。（西村優希）

・春合宿を終えての意気込み

春合宿中に何人かのJASCのOB・OGの方とお話することができた。その際、自分の専門とは異なる分野の分科会で活動することの苦労と楽しさについてお話いただけた。分科会によっては全員が専門外としており、皆が必死に勉強したこともあったという。自分も医学部生であることを言い訳にしてはいられない、JASCは教養を深める最高のきっかけになるのだ、と反省すると共に、これからは「専門外」を決して避けないと決意した。今後の事前準備では心を新たに、取り組んでいきたい。（川野さりあ）

JASCに期待することは、自分の中のハングリー精神を目覚めさせることである。大人になるにつれ行動することよりも考えることに時間をかけてしまう。直感を大事にする私にとって今の自分の状態は、あまりに

も安定志向のフィールドにいるなと感じている。JASCでは、論理的な議論はもちろん重要だと思うがそれ以上に人間交流を積極的に行って行きたい。意気込みはここに書ききれないぐらい持っているが、それは自分の行動で示して行きたい。自分も楽しむと同時にみんなの先頭に立ちこのプログラムを盛りあげていきたい。（竹内正人）

春合宿中に自分の中に生まれた高いモチベーションを維持することがまず目標です。本会議開催までに残されている日数には限りがあり、この期間をいかに有効に使うかで本会議の成否が左右されると思っています。日々の生活でやらなければならないことは多々あり、ともすれば雑事によりJASCへの熱意が摩耗していくこともあるかもしれません。ですがそのようなときにこそ人生に2度はないこの夏の本会議の成功を頭に思い浮かべ、優先順位をつけて準備に励んでいきたいと考えています。そして本会議終了後もお互いの交流が続いていく、そんな意義深い会議を作り上げていけたらなぁと思います。（廣野允威）

まずは自分が本気になってもそれを受け入れてくれる64th JASCerの皆に感謝したい。本気で何かに望むとこっ恥ずかしい上に失敗した時に言い訳できないという気持ちから今まで意識的に掛けていたリミッターを取り外して自由に議論できるというのがこんなに楽しいことだとは思いもしなかった。メンバーの皆はぼくに足りないものを持っていて彼らから沢山のことを学んで自分も成長したいと思ったし、自分の持ってるものは全て提供して皆で一緒に成長していきたいと思った。ぼくは本気でこのメンバーで日本を変えていきたいと思っているし、現にそれが可能なメンバーが集まっていると思う。本会議だけなんて勿体無い、本会議後も本気で話し合えるような関係になって、日本をより良い国にしていきたい。（山東典晃）

春合宿を終えて、私のJASCに対する思いは、「何かをしてもらう、与えてもらう」から「自分に何ができるか」に変わったと思う。会議でディスカッションするだけでなく、一緒に本会議をより良くするために、自分の持っている知識や経験、感性をフル動員して、第64回を史上最高のものにしたい、そんな熱い気持ちが宿った春合宿だった。また自分が院生だということを忘れ、一人の日本人学生として議論や成長ができると思うと、本当にJASCに応募してよかったと感じている。分科会に関しても、ECとともに、自分が引っ張っていくんだという気持ちで、笑いのエッセンスを若干加えつつ、真剣に頑張っていきたい。Cool Head, but warm heart!（野地洋平）

・春合宿総括

5月5日から7日にかけて行われた春合宿を通じて、参加者は初めて互いに顔を合わせることとなった。2泊3日という非常に短い期間ではあったが、会議概要説明、自己紹介、アイスブレーキング、コミュニケーションワークショップ、英語での講義、分科会活動等、非常に密度の濃い時間を共有することができた。

また、本企画は参加者にとっては、初めての顔合わせの機会であると同時に、実行委員にとっては、初めて運営する公式行事であった。企画を運営する難しさや、事前準備の重要さを再認識し、反省点を導き出せたことは、今後会議を運営する上で非常に意義あることであった。不手際が多い中で春合宿を無事に終えることができたのは、レセプションに参加して下さったアラムナイの方々や、講演を快諾して下さった綾部先生をはじめ、非常に多くの方々のご協力なしには成し得なかった。春合宿担当者として、改めて感謝を申し上げ、春合宿総括とさせて頂きます。（川邊拓也）

春合宿での集合写真

■東北事前研修

日程：5 月 26 日（土）～5 月 27 日（日）

場所：宮城県南三陸町、宮城県登米市北方公民館、宮城県石巻市石巻専修大学

概要：

第 64 回日米学生会議では本会議前に、日本が抱える課題である東日本大震災からの震災復興について学ぶため、東北研修を実施した。1 日目の日中は、宮城県南三陸町内でのボランティア活動、被災地域の復興市場や仮設住宅訪問を行った。その後元南三陸町教育長の勝倉彌司夫氏に町内を案内していただいた。26 日夜は登米市北方公民館に宿泊し、日中体験したボランティアや被災地域の訪問視察について参加者内で共有し合った。27 日は石巻専修大学で、石巻市で被災された第 63 回日米学生会議参加者の佐々木いくえ氏から、被災体験を語っていただき、その後南三陸町復興企画課長の三浦清隆氏から地方行政の視点から震災と復興について講演していただいた。講演後は講演者と参加者で意見交換を行った。ランチ後、佐々木氏の厚意で石巻市内を見学し、被災時の様子や復興の進み具合を説明していただいた。帰りのバスの中でリフレクションを行い、東北研修の最後を締めくくった。

・各ボランティアを通じての感想

ボランティアに臨む前、私には「被災地の状況を自分の目で確かめたい」という思いがある一方で「たった 1 日のボランティアが本当に役に立つのだろうか、迷惑になるのではないか」という不安もあった。平然を装いつつも静かに緊張していた。

ビニールハウス内での農業補助作業は湿度が高く蒸し暑い中での活動だった。また、スコップで重い土を掘り起こしてから、しゃがんで石を拾うという動きは腰にも膝にも多少の負担がかかる。しかも想像以上に時間を要す。15 人程度で 1 日かけてもビニールハウス内の面積の半分しか石拾いが終わらない。農地を耕すことの大変さと、「復興」への道のりの長さを思い知った。

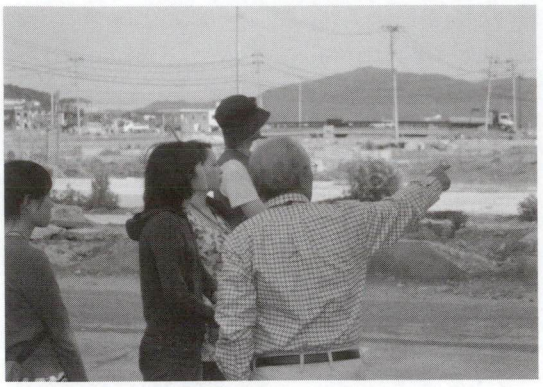
1 日の作業が終了してからスタッフの長谷川氏から、こうした 1 日だけの作業でも町の復興に役立つこと、現地に来られなくても被災地の特産物を買うことが復興への助けになることについてお話頂いた。

自分が今被災地に何ができるのか不安だった私は、長谷川氏の「ありがとうございました、お疲れ様でした」という一言でホッとした。そして被災地への支援には様々な形があることを学ぶことができた。（川野さりあ）

南三陸町ボランティアセンター前で

・町内視察を通じての感想

南三陸町は津波により壊滅的な被害を受けたが、随所にかつての町の美しさを彷彿とさせる面影を目の当たりにした。町内視察では、かの有名な防災庁舎にも足を運んだが、そのあまりにも凄惨な光景と鎮魂のために供えられた数多くの品々をとても直視することが出来なかった。この場に最後まで残られた方は今際の時に一体何を考え、誰のことを想い亡くなられていったのだろうか。死者の無言の遺言に思いをはせるたびに私は胸の中から何かがこみ上げてくるのを感じた。建物や産業の復興ももちろん大事である。しかし大切な人を失った悲しみに打ちひしがれている人に寄り添い、支えていく「心の復興」もまた求められているのではないだろうか。視察中に訪れた小学校の子供たちが、一日も早く元の日常に戻れるようにするためには自分に何が出来るであろうか。学生会議の意義とは何なのか。数多くの問いが頭に浮かび、いまだに私の心を強く引き付ける。目をそむけず真摯に向き合っていきたい。（廣野允威）



南三陸町内視察　勝倉彌司夫氏と

・被災者の声を聴講しての感想

第63回日米学生会議参加者である佐々木いくえさんにお話を伺った。ご自宅は石巻市の沿岸から約２キロのところにあり、３月 11 日に起きてしまった事を、時折詰まりながらも私たちに現在の心境や日米学生会議受験の時の状況などについて、伝えようとしてくださっていて、私は彼女の話にとても引きつけられた。いくえさんのお話の中で特に印象に残っていることは２つあり、「瓦礫」と「あたりまえ」についてであった。震災から１年以上たった今でも瓦礫の撤去は進んでいない。各自治体の瓦礫受け入れが進んでいないと同時に、瓦礫の全体量も把握できていない状況にある。そんな事を事前に調べどうしたらこれらの瓦礫を処理できるのだろうと考えていた私は、いくえさんのお話を聞いて、はっとさせられた。「今は瓦礫となっているこの山は、もとはなんだったと思いますか？もともとは家族の思い出の詰まった家でした。」そのとき、瓦礫を「処理」するなどという言葉を使っていた自分を恥じた。瓦礫を物理的な単なるものとして見ていたことに気付かされた。住民のみなさんは決して失いたくない財産を流され、その結果やむを得ず出てしまったのが瓦礫である。その瓦礫の受け入れ先がなかなか決まらない状況を被災地の方々はどう思うであろうか。被災していない私が想像することすらおこがましいことであるが、心苦しいにちがいあるまい。今後も引き続き考えていくべき問題を再確認した。

また「あたりまえ」についても考えさせられた。井上和清さんの詩『あたりまえ』を紹介していただき、自分が日常周りにある環境に感謝していないことに気付かされた。いくえさんが、生かされた者として恥ずかしくない生き方をしたいとおしゃっていたのが印象的であった。私自身も 20 歳を迎え、これからどのように生きていくのかもっと真剣に考える時がきているのかもしれないと考えた。（藤田耕己）

・三浦清隆氏のご講演を拝聴しての感想

行政の立場から、復興に向けてのお話を聞くことができた。面食らった点が１つある。メディアでは、「行政 vs 地元住民」という単純に捉えられた二項対立で復興への取り組みが進んでいないことの要因と挙げられることがある。しかし、お話を聞いて、実際には地元住民の中でもコンセンサスが取れていない、ということに気づかされた。ただ、一方を悪者に仕立てることは危険であると共に、やはり現場で見聞きすることの大切さを最も大きく痛感した瞬間であった。また、三浦氏をはじめ多くの行政に関わる人々もまた被災民であることを忘れてはならない。彼らが震災直後から精力的に働いてくれたこともあって、現在の復興へ歩み始めたことは事実である。彼らへの尊敬の念を持ちつつ、異なる立場（「行政」と、被災地に暮らす「被災民」、そして私たちのような直接的に被災していない「非被災民」）が、お互いの立場を十分に理解して、これからの復興のあるべき姿を考えていかなければならない。自分自身、将来行政の分野にかかわりたいという気持ちがあり、プログラム全体を通して、非常に有意義な経験であった。（中道洋司）

・東北研修総括

東日本大震災からの復興と将来起こりうる震災に備えることは、次代を担う私達の課題である。今回の被災地訪問は、被災地に赴いたことのない学生が、実感を伴った震災に対する危機感や震災復興について学ぶ絶好の機会であったと思う。参加者はボランティア、視察、講演、議論と昼夜兼行の非常に密度の濃い２日間を過ごした。参加者は、真摯にボランティアに取り組み、視察や講演の際には真剣に質問や意見を出し合った。依然として復興半ばである被災地を、学びを目的として訪問させていただくことには葛藤があった。

だが、微力ながらボランティアをさせていただくこと、被災地で得た学びや経験を今後の生活に活かすことなど、私達が復興のためにできることがあると思い定め、被災地訪問を決めた。その葛藤は参加者の一生懸命な姿勢が吹き飛ばしてくれた。この研修に対し惜しみない協力をして下さった全ての方々に心からの感謝の言葉を述べたいと思う。

三浦清隆氏、佐々木いくえ氏との集合写真

■防衛大学校研修

日程：6 月 15 日（金）

場所：防衛大学校

概要：

防衛大学校研修では、広報専門官の案内の下、資料館や図書館、給水塔、中央広場での課業行進等を見学した。防衛大生と給食後、防衛大で教鞭を執られている教授の講義を受け、活発な質疑応答が行われた。さらに防衛大生計 37 名と分科会ごとに討議を行い、安全保障やその他多様な議題の下、白熱した議論が繰り広げられた。夕食を兼ねた防衛大生との懇親会では、同世代の学生同士熱く語り合い、互いの絆を深めることとなった。

・校内施設見学

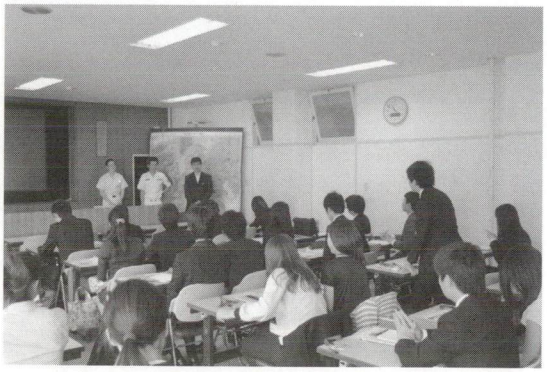
高校時代、卒業後に防衛大学校へ進むという選択肢を全く考えていなかったこともあり、今回訪れた防衛大学校は私にとって未知の世界でした。JASC に参加しなければ、おそらく一生足を踏み入れることはなかった場所だったのではないかと思います。

校内には航空機や戦車のモデルが展示されており、資料館や図書館には防衛大特有の資料や本が置かれ、また学生たちの行進の様子など、普段なかなか目にすることのできないものばかりでとても刺激的でした。（飯島千咲）

校内施設見学の様子

・山口昇教授による講義

防衛大学校の学生でもなかなか直接講義を受ける機会がないという、素晴らしい教授の講義を受けることができ幸せでした。日本とアメリカの置かれている状況をわかりやすく、なおかつとても深く教えていただけて良かったです。やはり現場を経験されている方のお話は説得力があると感じました。（森田修弘）



講演者に質問する参加者

・武藤茂樹空将補による講義

日米協力の重要なシンボルであり、かつ軍事上も重要な「ミサイル防衛システム」について専門家から話を聞くことができてよかった。特にミサイル防衛システムの話題は現在進行形で進んでおり、日米安全保障について最新の状況を知る良い機会である講演におけ

るテーマとしては、ふさわしかったと思う。

現実的な考え方を持った方で、知識に裏付けられた議論は参考になった。（藤川健太郎）

・防衛大学校生との分科会テーマについての討議

「現代社会における企業活動と倫理」

防衛大学校の生徒の知識の多さには圧倒されました。また彼らと私たちの議論の進め方に若干ですが差異がある事に驚きました。彼らは非常に理論ベースの議論の進め方が多く、それは○○主義の考え方なのか？それと○○主義か？といったような、あまり普段の大学生活では見受けられない議論の進め方だったように思い、とても参考になった。（三浦愛）

「環境と科学技術」

環境と科学技術の分科会を希望する防衛大生がいなかったというのは、非常に残念なことでしたが、安全保障との議論で今後の日米関係の上で重要になってくる、憲法９条の今後のあるべき姿について、将来自衛隊として日本を防衛することになる防衛大生と話し会えたことは非常に有意義でした。（饒平名玲美）

「パーソナル／ナショナルアイデンティティ」

私たちは、防衛大学校生のプレゼンテーションの後、質疑応答を含めたディスカッションを行いました。それまで私たちの考えていたアイデンティティについてちがう視点を発表してもらい、勉強になりました。しかし少し一方的になってしまい、私たちもプレゼンテーションなどを準備していればさらに良かったなと思いました。（ヴー・ホアン・ミン）

「復興と社会の再構築」

防衛大の学校生とのディスカッションでは、主に災害救助における自衛隊の役割を議論した。事前に防衛大学校側とメールのやり取りを行い、当日議論する具体的な内容決めていった。主に、今回の震災における自衛隊の役割を議論することができた。防衛大側のみんなが、すごく良く調べていてくれて、本当に参考になった。（野地洋平）

「人権問題と我々の責務」

防衛大学校生の本音を垣間見ることができたことが非常に有意義であったと思う。日々の訓練の成果を国防に役立てたい、すなわちもっと戦争の全線で活躍し他国に認められる国として貢献したいという思いと、自分の命を失う怖さや家族を思う気持ちの間で防衛大大学校生１人１人も揺れていて、悩み葛藤しながら訓練に励んでいるのだということを知った。このような「日本がどのように世界平和に貢献できるだろうか」と真剣に考える学生と交流できたことで刺激を受け、社会情勢の中での日本のあり方について、もっと勉強し意見を持てるようにならなければと思った。（片山恵理）

「安全保障と日米」

事前活動の公式プログラムとして開催された防衛大学校研修は、私たち「安全保障と日米」分科会にとって大変意義深い研修となった。プログラムは防衛大学校施設見学、教授からの安全保障に関する講義、そして防衛大学校生とのディスカッションの３本立てであった。最初の２つについては全体の報告書にて言及されているので割愛し、当分科会日本側５名と防衛大生約10名で行ったディスカッションについて述べたい。

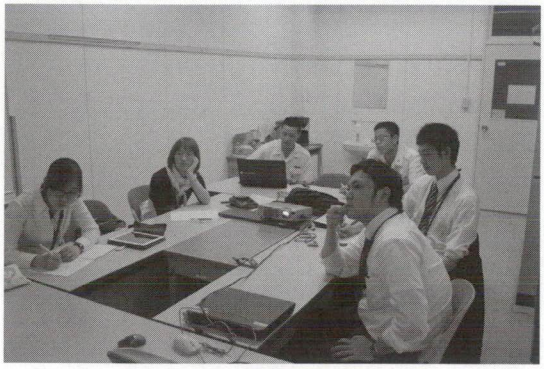
防衛大学生とのディスカッションではまず、当分科会からは当時本会議に向けて議論していた憲法９条に関しての、防衛大学校生からは安全保障戦略に関してのプレゼンテーションを行った。その後、安全保障に関するディスカッションを行った。議論内容はプレゼンテーションに関する質問や意見にとどまらず、安全保障全般、さらには互いの学生生活や将来の夢にまで及んだ。

それまで議論してきた安全保障の実際の現場に立つ学生及び教授からの話を聞くことができたのは非常に有意義であり、本会議に向けてさらにモチベーションを高めることができた。（鹿山ゆかり）

「グローバル化における文化芸術」

防衛大生とのディスカッションの時間が一番印象的です。午前中から安全保障についてのビデオや校内見学、講義を通して彼らの生活を垣間見ているうちに、

防衛大学校生が少し怖く、遠い存在に思えていましたが、分科会事のディスカッションの時間に話してみると、彼らに抱いていた偏見も勝手なイメージも一気になくなりました。皆すごく賢くて、知識も豊富で、自分の意見や思いを相手を傷つけるとこなく正確に伝えることができるように感じました。今まで考えたことがないであろう問いを投げかけてもその場で素直に考えや思いを言ってくれて、こちらにもたくさん質問をしてくれました。そして防衛大学校での生活についても色々話をしてくれ、決して楽ではない防衛大学校生活を選んだ理由などにも真摯に応えてくれました。（林真希チェルシー）



分科会討議の様子

・防衛大学校研修全体感想文

最初防衛大学校生が何を勉強し、どのような一日を過ごすのか、日本人にどのように認識されているのかなどに関してあまりイメージが沸なかった。しかし校内を見学し彼らと話すことで、少しずつそのイメージがつかめた。また、一部の学生の意見ではあるものの憲法 9 条や自衛隊の役割などに関する彼らの素直な意見が聞けたことが有意義だった。憲法 9 条に関して自分なりの考えはあるが改憲の問題は政治家の仕事であり、自分たちのやるべきことは憲法と国家を守ることと言う彼らを見ながらプロ意識のようなものが感じられた。また、分科会毎の討議時間が非常に有益だった。彼らは色々な専門知識に詳しくたくさん考えさられた。最後に、全寮制の彼らの生活を見ながら同じく全寮制だった私の高校時代と韓国の軍隊とを思い出し、親しみが感じられて不思議だった。（キム・ヘジン）

第２次世界大戦での敵国である日米の間に日米安保条約が結ばれていることを考えると、明らかに軍事的な色合いが濃い。そのうえで防衛において将来の日本を担う学生の意見を聞くことができ、日米関係を考える上で非常に参考となる視点を得られたと思う。
また、将来日本の防衛の第一線で活躍する人達へのイメージが、研修前後で全く異なり、偏見を取り除くことができ、それも非常に良かった。
レセプションでは防衛大学校生ととても仲良くなることができ、これからも続く関係を築くことができ、今回の行事だけの関係にとどまらず一生問題について語り合って行けるのではないかと思い、非常に有意義な一日であった。（木村光太郎）

防衛大学校研修は直前合宿前最後の研修であった。そのせいかこれから先、本会議までに自分が何をしなければならないか明確になった気がする。日米の間における政治、歴史、民族に関する問題。これらは日米学生会議の参加者になった以上知らなければならないことであり、1 カ月余りで基礎づくりをしていきたいと思う。また、防衛大学生とのディスカッションを通じて議論する楽しさ、新鮮な気持ちを覚えた。これからも連絡を取り、自身が所属する分科会で日本の文化、アメリカの文化について深く議論したいと感じた。（竹内正人）

研修を通して、1 つの反省がある。それは、自衛官（および将来自衛官となる防衛大学校生）を「特別」な存在と思い込んでいたことである。確かに、国防に従事する専門家である。自衛隊の文民統制であるにもかかわらず、私たち市民は自衛隊についての現実をあまり知らないと感じた。私たちが自衛隊のあり方を決める以上、一人ひとりが現状についてしっかりと認識する必要があると痛感した。

専門家の方々による防衛の一端を触れることができたのは非常に刺激的であった。安全保障の観点から日本はどのように振舞うべきか、また国際社会における自衛隊の位置づけについて改めて考えさせられた。自衛隊幹部候補生である防大学校生と交流できたことで、

今後、安全保障を考えるうえで重要な論点を得ることができた過言ではない。(中道洋司)

日本の将来の防衛を担う同年代の学生と交流できたことは、同年代だからこそ余計に感じるものも多く、本当に有意義だった。

ディスカッションでは現実的な側面から自衛隊としての意見を提示してくれ、安全保障に関する話もJASC側参加者だけでは到達しない方向に話が進み勉強になったし、それだけではなくレセプションで気兼ねなく話せたことがとても楽しく、今後もこの繋がりを大切にしていきたいと感じた。

先生方からも興味深いお話を伺うことができ他の大学では学べないような専門的なところまで勉強することができた。また、私たちの質問に対してもとても丁寧に答えてくだり大変有り難かった。

日本の将来の国防を担う意識を持つ同年代に接したことにより、自身も未来を担う者として勉強しなければという意識につながった。それと同時に、安全保障問題にも興味が出てきたため、本会議に向け勉強していきたいと思った。(横田真彩)

・防衛大研修総括

防衛大生が学ぶ環境を終日体験し、彼らと腹を割った議論を行うことができた防衛大研修は、日米学生会議日本側参加者の事前活動において欠かすことのできない重要な活動であったと言えよう。今後日本の防衛に直接関わってゆく防衛大の学生と、日本の安全保障について話し合うことで得られた非常に現実的な思考や視点は大変新鮮であった。日々訓練に励み日本の防衛を考える彼らの世界観を知ったことで、一般大学で学ぶ自らの考えを改めて客観視する機会にもなった。これらの経験は、当会議で日本を代表してアメリカの学生と日米関係や国際政治の問題を論じる際に、大変貴重な役割を果たしたと言える。同時に防衛大研修ではそれまでの我々の事前活動での学びを生かし、防衛大生にとって新しい視野を持ち込むことで、互いに刺激しあう場を創ることができたのではないかと思う。同世代として幅広い議題を話し合い、そして終日共に過ごし友情を築くことができた本研修は、とても意義深い時間であった。(伊藤実梨)

給水塔での集合写真

■第64回日米学生会議勉強会

日時：2012年6月16日(土)～6月17日(日)

場所：国際教育振興会

概要：

本会議に向けて必要となる基礎知識を身につけるべく、2日間にわたり有志による勉強会を行った。本企画の狙いは、東北研修の事後勉強会、日米関係の学習、英語ディスカッション力の向上の3つである。日米関係については、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科の篠原初枝教授をお呼びして講演会を行った。勉強会を通して、参加者各自が本会議までの課題を認識し、モチベーションを高めることができた。

・東北研修事後学習

東北研修から1ヶ月弱が経ってからの東北事後勉強会であったが、時間を置いたことで研修の時とは違った気持ちで議論に臨むことができた。研修に参加しているときは復興について議論する際、少なくとも自分は感情面が先行していたと言える。しかし今回はより冷静に考えることで自分が何を感じたのか、何をアメリカ側に伝えたいのかということを見つめ直すことができた。また、東北に行く前のイメージと行ったあとのイメージの違いを考えたところ、大きな違いがあったことをみな認識し、東北研修の意義を改めて実感した。研修の時に感じた感情面の要素と、今回事後勉強会で冷静に見つめ直すことのできた要素の双方をアメ

リカ側に伝えていければと思う。またそのためにも研修や今回の勉強会だけでなく今後もじっくり東北について考えていきたいと思う。（浅原光貴）

〝次の3点において、非常に有意義な時間を過ごすことができたと思う。
まず第1点目としては、本会議に今後参加する同じデリとして、研修に残念ながら行くことができなかった仲間にシェアをすることができたことは大きな意味があったと感じている。

また第2点目として、研修に参加したデリも、研修から一定の時間をおいて客観的に経験を振り替えることによって自身たちの糧とすることとなり、経験を放置することなく触れることの大切さを知った。皆で「復習」をし、さらに本会議でアメリカ側にどう伝えるかまで話し合えたため、研修によって得たものが経験だけでなくさらに大きくなったように感じる。
最後に、日本語で話し合い、英語でまとめ発表する学習により、日本語で深く話し合えて学べることが非常に多く良かったが、英語でそれを実際に伝えることの難しさや自身の未熟さを改めて痛感し、本会議へのモチベーションに繋がった。（横田真彩）

・英語ディスカッション

英語学習は非常に有意義であった。英語でディスカッションをして一番感じたことは母国語でない言語で話し合いをするのは難しいということだ。お互いに言いたいことが上手く言葉にできなかったり、相手にしっかりと伝わらなかったりと困難も少なからずあった。しかし、その一方でわかりやすく言い換えたり、ジェスチャーを使ったり、お互いに協力をしあう機会が増えたことでメンバー同士の距離は近づいたように思う。また、英語でのメモの取り方などをお互いに共有しあえたことも良かった。本会議になるとアメリカ側参加者の使う英語はより難しく、早くなるのでしっかりと協力していくことが大事だと感じた。（森田修弘）

今回の英語勉強会では危機感をより一層持つことができたという意味でとても有意義であった。今回の勉強会では最初に軽いトピックを扱ってから、その後「今後原子力発電に依存すべきか、否か」についてディスカッションしパワーポイントでまとめ報告した。議論に背景知識が必要なことはもちろんであるが、その知識があったとしてもそれを英語で相手に伝わるようにするには、その話題について普段から英語で考える癖を付ける必要があると感じた。あと一ヶ月ちょっとで本会議が始まるので、RTの勉強と英語を上手く結びつけていけたらと思う。そしてもっと説得力のある意見が言えるようにするために、知識や話し方の構成を学んでいきたい。（藤田耕己）

・日米関係勉強会

日米の関係について、過去を踏まえ現在を語るというスタイルで語られた今回の講演は、自分の頭の中の日米に関する知識を整理し、新たな肉付けをするのに最適の機会となりました。また、その後のグループディスカッションでは、日米学生会議の参加者の多様性を表すように、一つの意見に固執することなく、柔軟に自分たちの結論を導き出すことができたと思います。私個人としては、日米関係に関する知識が少し弱い点が否めなかったため、このような専門家を呼んでの勉強会は本会議に向けてのステップとして必要不可欠でした。今後は今回出た構造の変化が起きている中で、経済・軍事両面での日米関係について自主的にさらに詳しく勉強をしていきたいです。（市毛裕史）

講演会には話者の一定の見解が反映されるために学校の事実の勉強だけでは得辛い「考える材料」をもらうことができたという点で有意義であった。今まで何度かJASCerと同士で考えを交えたが、それと比較するとやはり学生の議論には意見を裏付ける論拠やデータが乏しく建設的でない一面があることを実感した。もっと勉強することで議論に説得力が増すと思う。しかし、その一方で全ての分野で専門家並みの知識を持つことは不可能であり、そういった議論は専門家に任せてよいと言う見方もある。自由な発想を大切にしながらも、今私にかけているものは必要最低限の知識であると思うため、1か月間勉強に励みたい。自分の力不足と、先輩方の期待の大きさを感じ志を新たにした勉強会であった。（片山恵里）

・自主勉強会総括

東北研修の事後勉強では、参加者有志によるプレゼンテーションに続いてグループディスカッション（英語）を行った。本会議でアメリカ側参加者に何を伝えたいかを中心に話し合い、日本側参加者としての役割を考えることができた。

また日米関係勉強会では、篠原教授のご講演を通して、アメリカを訪問するに当たり「なぜ今、日米なのか」ということを改めて再考することができた。

さらに英語ディスカッションでは、どのようにグループとして生産的な議論を行うかについて考えると同時に、本会議に向けて英語に対する意識を高めることができた。

２日間という短い期間ではあったが、学ぶことが非常に多い有意義な企画となった。本企画は、トピックを選定する上でアドバイスを下さったアラムナイの方々、ご講演いただいた篠原教授のご協力なしには成り立たなかった。勉強会担当としてこの場をお借りして深く御礼申し上げ、勉強会の総括とさせて頂きます。（川邊拓也・櫻井千浪）

篠原教授を囲んで

■直前合宿

日時：2012 年 7 月 27 日（金）～7 月 28 日（土）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

概要：

直前合宿は、渡米 1 日前に日本側参加者が集まり本会議に向けて最終準備を行う合宿である。分科会活動、スキットの練習、そして本会議中の注意事項などの共有が行われた。

・直前合宿感想文

本会議に向けての最終準備の場所として直前合宿は、いろいろな意味で本会議への士気を高めるものであったと思う。

スキットの準備では、アメデリとの出会いに想いを馳せ、本会議の“楽しさ”という面への期待値が高くなった。各分科会の活動時間では、それまで分科会ごとで行ってきた事前活動をまとめ、英語によるプレゼンを行うことで、本会議で行われる“議論”への期待と言語の壁や考え方の違いに対する“不安”も大きくなった。

また、アラムナイの皆様の訪問は日米学生会議というものが受け継いできた“伝統”を強く感じさせ、自分たちに向けられる“期待”や“責任”を感じた。

そしてなんといっても、参加者全員が初めてそろうことで会議に向けた“一体感”が生まれたと思う。直前合宿は本会議を始めるうえで、もう一度初心に戻り、気合を入れなおすよい機会になった。（渡部寛史）

前日まで大学の試験があったこともあり、直前合宿で他の JASCer と会うまではこれからアメリカに行き本会議に臨むという実感が持ちきれないでいた。それに対して少し不安に感じていた部分もあった。しかし、ここで皆と会い、RT の準備、アメリカでアメデリたちに披露するスキットの練習等を通して、これからアメリカに向かうという気持ちに切り替わっていったように思う。そして最後に行ったリフレクション。日本側参加者のみで日本語で行う最後のリフレクションでそれぞれの思いを口にしていった。このリフレクションがさらにアメリカで自分は何をしたいのか、そして何を達成したいのかを考える機会となった。気持ちが本会議に向けて前向きになっていったと思う。本会議を充実に繋がる良いマインドセットとなったように感じる。（大多和祐介）

・直前合宿総括

直前合宿では、アメリカでの本会議に先立ち、1 ヵ月の本会議中のプログラムの準備、本会議のルールとス

ケジュールの確認や、分科会ごとに日本での事前活動のまとめを行った。事前活動の成果を各分科会が英語で発表し、他の分科会と進捗状況を共有し、本会議の目的意識を新たにした。

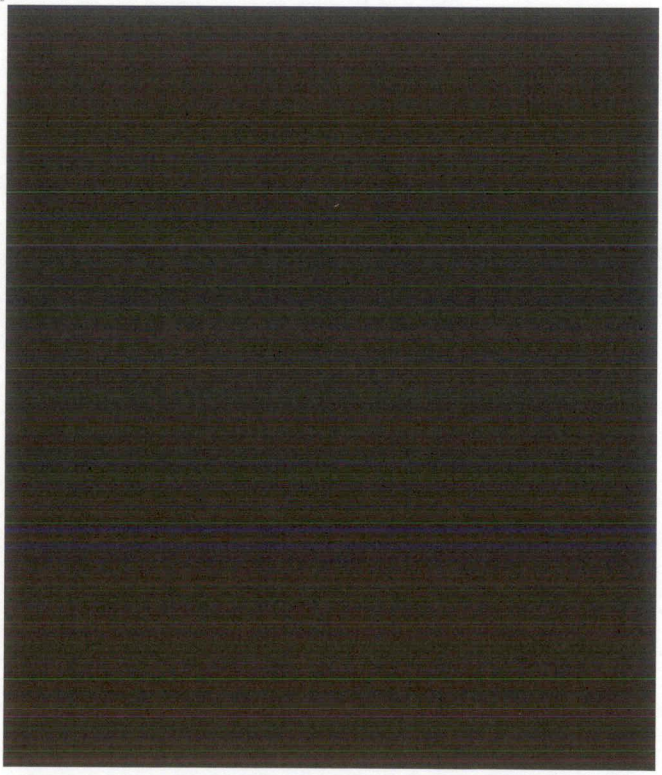
また、若手から大先輩に至るまで多くのアラムナイの方々から激励をいただき、JASCの新しい歴史を作っていく、そして未来に繋げていくという意識を強くした。

さらに例年行われている文化交流の一環であるスキット(寸劇)の練習を参加者主体で行い、参加者内でより一層強い絆を深め、本番に備えた。日本側参加者による最後の事前活動である直前合宿を通して、第64回日米学生会議本会議を迎えるために必要な参加者としての責任を再確認できたと共に、モチベーションを向上することができた。(杉岡昌太)

スキット練習の様子

第３章

本会議・サイト活動



テキサスサイト(7月28日～8月3日)

■サイトコーディネーター
伊藤実梨
川邊拓也
Andrew Leistensnider
Danielle Wilson

■サイト概要
テキサス州北部に位置する近代都市ダラス。第64回日米学生会議は市中心街北方にある南メソジスト大学からスタートする。ダラス経済は油田開発によって発展し、大手石油資本エクソンモービルや、世界的半導体企業テキサス・インストラメンツの本社がある。国際的に開けた都市であり、ダラス・フォートワース空港はハブ空港として世界第3位の離発着数を誇る。一方で、不法、合法の移民流入が顕著で、全人口の3分の1強をヒスパニック系が占めるまでに膨れ上がった。近年、全米で最も危険な都市の上位にランクインし、治安は悪化の一途をたどっている。第1開催地では、文化の多様性を維持しながら都市の安全性を向上させるために何ができるのか考えたい。

■サイト日程
7月28日(土) 日本側参加者到着
7月29日(日) 開会式、分科会活動、アイスブレイク、スキット
7月30日(月) 東北研修報告発表会、分科会活動
7月31日(火) Dallas Immigration Court 訪問、分科会活動
8月1日(水) Internment Camp 講義受講
Sixth Floor Museum 見学、分科会活動
8月2日(木) Lecture on NGOs、分科会活動、リフレクション
※宿泊場所：South Methodist University

■具体的な活動
・開会式
前夜にアメデリとの初対面を経験した私たちは翌日、オープニングセレモニーとレセプションに臨んだ。オープニングセレモニーでは Japan-America Society の方や日本の名誉総領事をダラスで務めていらっしゃるアメリカ人の方が、まず始めに日米友好にかける情熱を語って下さった。私たち日米学生会議も微力ながらも日米友好に一役買っているとの評価をいただけるよう、活動に邁進したいと思いを新たにした。アジア研究をなさっている日本人の南メソジスト大学教授からも極東情勢についてお話を伺った。
レセプションではオープニングセレモニーでお話いただいたお三方を囲み、学生たちが質問攻めにする光景が見られた。またアメデリとは前日の夜会ったばかりでまだ自己紹介をお互いにしていなかったケースが多く、自己紹介をしながら何人かでの雑談に興じる学生たちも多かった。(藤川健太郎)

開会式後、講演者を囲み

レセプション中の様子

・アイスブレイク

アイスブレイクの時間は主に二つありました。スキットとシートゲーム。まずスキットはジャパデリ、アメデリそれぞれが準備してきた日本とアメリカの文化を紹介する劇のようなものでした。私はスキットの主人公に選ばれ、練習の量も他の人に比べてちょっと多かったので正直最初は少し嫌になりましたが、スキット終わった後は本当にやってよかったと思いました。スキットのお陰でアメデリ全員の顔を覚えることができて、みんなと話すネタが増えました。きっとアメデリに対しても同じことが言えると思います。そのあと私たちはシートゲームというゲームやりました。簡単に言うと二人の間に大きなシートがあって、目の前にあるそのシートが下ろされたら、どちらが早く相手の名前を言えるか競い合うゲームでした。みんなで楽しめ、他の人の名前を覚えるきっかけにもなり、その日のうちにみんなの名前を覚えることができました。(ヴー・ホアン・ミン)

・東北研修報告発表会

7月30日、Tohoku presentationという題で日米の災害について知り災害とその復興について考察するという印象深いプログラムが行われた。

日本側は、東日本大震災とその復興について、東北研修を通して分かったこと、感じたこと、また原発やトモダチ作戦という日米に関連深いトピックに関して発表を行い、アメリカの支援に対する感謝の気持ちも伝えた。一方アメリカ側には、ハリケーンを例に災害と復興について発表をしてもらった。双方のプレゼンテーション後にグループに分かれ、原発の必要性等のトピックを定め、ディスカッションを行った。

私は原発に関して発表する機会をいただいたが、センシティブな問題を扱うこと、さらにそれを母語でない英語で誤解のない様に伝えることの難しさを痛感し、非常に勉強になった。またディスカッションからは、全く異なる二か国の災害だが、互いに学びあえるところはあると感じ、まずは今後東北の復興に何かの形で役立てられないか考えたいと強く思った。(横田真彩)

東北フォーラムスタッフで

・Dallas Immigration Court訪問

暑いダラスの繁華街の中、汗を流しながら着いた移民裁判所では、今までの生活では見ることができなかった世界の一面を見ることができた。まず、移民の人々が受ける裁判の様子。ショッキングだったことは、裁判を受けるべき移民の人々が裁判に出席していないにも関わらず裁判が淡々と進められていたことである。本当に移民の人々に情報は行き渡っていたのか。疑問が残る裁判であった。次に、裁判官のお話。渡米した当初であったため、まだ英語に耳が慣れない状態であった。そのため、自分の中にこの時間を有効活用できてないのではないかという焦りと、他の参加者は理解し、質問している姿をみて、ものすごい悔しさを感じたことを覚えている。講義の内容自体では、裁判官の中で個人的な判断と客観的な立場に立った裁判官としての判断との間でジレンマがあるという率直な思いは、すごく興味深いものだった。しかし、裁判官の方の人種差別用語の使用には少し違和感を感じた。(市毛裕史)

裁判見学後、全員で

・Internment Camp 講義

テキサスの暑さにもだいぶ慣れてきた８月１日、南メソジスト大学のホールにて日系人収容所に関する講義を受けた。日系人収容所に関してはあまり知らないという学生が多かったので、この問題について知る非常に良い機会であったように思う。講義は主にテキサスの日系人収容所の規模、場所、中の様子等についてであった。収容所では人々は意外と自由な生活を送ることができたと教授は話していた。

講義後の学生間でのディスカッションでは、日系人収容所についての興味関心が高まったと述べる参加者が多かった。同時に講義そのものがアメリカ側からの視点に偏りすぎているという指摘が、日本側の学生からだけでなくアメリカ側の学生からもあった。収容所の良い点を多く述べているが、日系人に対する差別や負の遺産に関する言及がなかったことを指摘する声が多かった。また、両国の歴史の授業で日系人収容所の問題を詳しく教えるべきという意見も多く出た。(鹿山ゆかり)

・Sixth Floor Museum 見学

テキサス州ダラスにあるSixth Floor Museumは、ケネディ大統領の暗殺にまつわる資料を展示した博物館である。オーディオを聞きながらケネディ氏の大統領としての業績と影響力を見ていると、ケネディ大統領の暗殺事件がアメリカと世界にどれだけ衝撃を与えたのかがしみじみ感じられる。

Sixth Floorという名前からわかるように、オズワルドは本建物の６階からケネディ大統領を狙撃したとされている。窓際に立つとケネディ大統領がまさに撃たれたところが道路上にXで表示されているのが見える。ケネディ大統領が暗殺されてから約50年経った2012年に、私たちはケネディがこの世を去った場所で、彼がどのような人生を生きてきたかを振り返ったのである。

この建物がダラス１番のツーリスト・アトラクションになれたのは彼の残した業績のためであるかもしれない。そういった意味でSixth Floor Museumは歴史の現場であり、自分が生きている間何をしたいかを考えさせられるところだった。(キム・ヘジン)

・NGOs Lecture

ブッシュ財団は、ジョージ・ブッシュ元大統領が大統領を退任したあとも世界の問題に対して影響を及ぼしていくために設立され、そのセンターは私達が滞在していた南メソジスト大学内にあり、自由、国際保健、教育、女性の地位などの問題に取り組んでいるそうです。私は大学で国際保健サークルに所属しているので、なかでも国際保健の話に興味を持ちました。アフリカで行われているHIVやマラリアのプロジェクトの写真は興味深かったです。途上国において、感染症をいかに予防するかというのはとても大事です。子宮頸ガンの話もでていましたが、これは唯一予防できるガンであり、先進国においても予防に注力すべきとの話には納得しました。また、この財団ができる前は500万ドルしか予算がなかった国際保健分野に150億ドルかけられるようになったという話には感心しました。(小田垣彩花)

講演者とともに

■サイト総括

第64回日米学生会議は、この地テキサス州ダラス市で幕を開けることとなった。第１サイトであることの意義、ダラスでのみ経験できることは何か、この２点を常に強く意識し、サイトコーディネートに臨んだ。

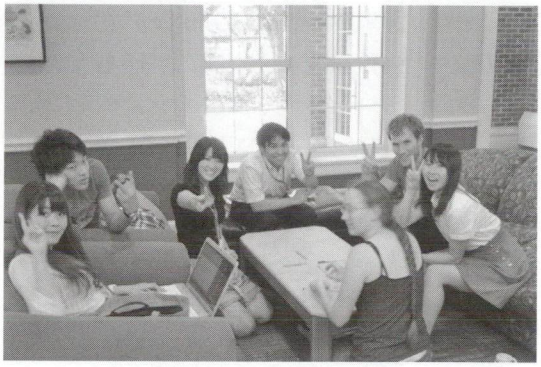
まず、第１サイトであることの意義として「日米参加者間で親睦を深める」ということが挙げられる。「非常に個性の強いメンバーが集まるJASCにおいて、一人ひとりと話して欲しい」という実行委員の想いは強かった。そのため、アイスブレイク等、皆で交流できる企画を多く盛り込み、名前と顔を一致させるところから始めた。ダラス最終日のリフレクションにおいて、「既に全員と一度は話し、顔と名前が一致している」と参加者から聞くことができ、テキサスサイトのコーディネートをして本当に良かったと強い喜びを感じた。

また、ダラスでのみ経験できることとして、当都市の特徴である「不法移民の流入」と「文化の多様性」を念頭に置いたアカデミックコンテンツを盛り込んだ。特に、不法移民者に対する裁判を生で見ることができたのは、いかにアメリカが移民問題の解決に努力しているのかを知るのに最適な機会となった。

文字通り炎天下の中で、体調を崩すことなく最大限のことを吸収しようと尽力してくれた参加者には感謝をしている。また当サイトは、日本側実行委員の無理な要求を実現しようとコーディネートの大部分を担ってくれたAndrewとDanielleの並々ならぬ努力なくては成り立たなかった。心からありがとうと言いたい。

最後になりましたが、この場をお借りしてダラスサイトコーディネートに協力して下さった全ての方々に感謝の意を伝え、サイト総括とさせて頂きます。（伊藤実梨・川邊拓也）

南メソジスト大学風景


ラウンジでの参加者の様子

マディソンサイト(8月3日～8月9日)

■サイトコーディネーター
八木澤龍大
山下祐里奈
Jose Lamazares
Steve Zellmer

■サイト概要

豊かな自然に囲まれ、農業と食品加工、観光資源に恵まれたウィスコンシン州。その州都マディソンには、州立版アイビーリーグのひとつに数えられるウィスコンシン大学があり、公教育の水準も高く、大学による地域貢献も盛んである。市内では夏と冬に毎週、州特産の農産品を扱う全米最大級のマーケットが開かれ、多くの人々で賑わう。一方、他の多くの州同様、州財政は悪化し、赤字削減のために州職員の労働条件が見直され、住民や学生を中心に大規模な政治運動が引き起こされた。第２開催地では、政治抗議運動フォーラムの開催や州会議事堂への訪問を通じて、激動の州政治を学ぶ。同時に、農場やキッコーマンのウィスコンシン工場などを訪問し、アメリカにおける食糧生産の現状や、農業地域に密着した食品加工業について理解を深めていく。

■サイト日程

8月3日(金)　マディソンへ到着
8月4日(土)　ファーマーズ・マーケット訪問、
　　マディソン市内見学、タレントショー
8月5日(日)　スペシャルトピック、バーベキュー、
　　分科会活動
8月6日(月)　Babcock Hall 見学、
　　Wisconsin Institute for Discovery
　　見学、政治抗議運動フォーラム、
　　分科会活動
8月7日(火)　KIKKOMAN FOODS,
　　INC ウィスコンシン工場訪問、
　　Harley Davidson Museum 訪問
8月8日(水)　Organic Valley 訪問、
　　州知事宅でのレセプション、
　　リフレクション
8月9日(木)　バークレーへ移動
※宿泊場所　University of Wisconsin Madison
　　Slichter Hall

■具体的な活動

・ファーマーズ・マーケット訪問

ウィスコンシン州は農業が盛んであり、私達は大学の近くの街にあるファーマーズ・マーケットを訪れた。それはウィスコンシン州で全米的にみても規模の大きいマーケットであり、沢山の人で賑わっていた。そこには見たことのないような野菜や、蜂蜜の実演販売などが見られた。そこで販売されている美味しいご飯を食べたりしながらとてもリラックスした時間を過ごすことが出来た。

また、ファーマーズ・マーケットで働く方のお話を伺う時間があり、マーケットについてより深く知ることができた。ファーマーズ・マーケットは歴史があり、非常に大きな規模であるということから、新規で参入したい人は何年も待たなければならないなど、競争率が高い。また自分の手で作った、育てたものを扱うということが参加条件であり、マーケットのクオリティは非常に高い。(西村優希)

ファーマーズ・マーケットでの講演の様子

・バーベキュー

マディソンに到着して3日が経ち、新しい環境にも大分慣れてきた頃、バーベキューが行われた。我々が滞在したウィスコンシン大学内のSlichter Hallは池のほとりにあり、また辺りには緑に輝く芝生が広がっていた。まさにバーベキューを行うには最高の場所だった。当日は快晴。時折吹くそよ風が心地よかった。この日のご馳走は豪快なハンバーガー、ホットドッグの他にお好み焼きもあった。お好み焼きは日米両国の参加者にも好評で、特に和食が恋しくなり始めていた日本側参加者にとって久しぶりの日本の味は格別だった。肉が焼きあがる音、サッカーやフリスビーを楽しむ人たちの掛け声、ジョークを言い合う人たちの笑い声、風に揺られる葉の音。何気ない風景や聞こえてくる音にJASCerと時間を共有できる幸せを感じるのだった。(川野さりあ)

バーベキュー風景

・Babcock Hall訪問

8月6日の朝、スーツに身を包んだ私達は徒歩で寮を出発し、Babcock Hallに向かいました。アイスクリーム工場の見学のためです。ウィスコンシンは乳製品の名産地なので、この工場見学をとても楽しみにしていました。まずは乳製品を販売している店舗部分にお邪魔させてもらい、おいしいアイスクリームをトッピングとともにいただきました。その後、グループに分かれ、順に工場内を案内していただくことができました。製造工程を一目で見渡せるガラス張りの部屋で従業員の方に説明を受けると、工場の製造体制や勤務体制など、伺ったお話に関連して様々な質問が飛び交いました。参加者それぞれが興味を持ち、疑問を抱いては解消しようとするJASCの活発な雰囲気をここでも感じるとともに、効率化を図った工場システムに感銘を受けました。(松浦理咲子)

・政治抗議運動フォーラム

日本では抗議やデモ運動はあまり活発ではないが、アメリカでは大きな政治的役割を担っている。このフォーラムでは2011年2月ウィスコンシン州で起きた対州知事デモの影響とその原因を、市長や雑誌記者を含めた講演者と共に考えた。Scott Walker州知事は財政難の対策として、労働組合の団体交渉の権利を剥奪し年金支払額を引き上げた。国民はそれに反発し、州議事堂に10万人が押し寄せた。写真や映像で見るその光景は目を疑うものであった一方で、日米市民の政治への関わり方の違いを感じた。真剣でないデモ参加者もいたものの、デモがここまで巨大化するほど政治は日本人にとって関心のあるトピックではないように思えた。これは日本人の控えめな精神に由来するものかもしれないが、メディアを騒がせ、州知事を含む政治家のリコール選挙にこぎつけたウィスコンシン州のデモを見ると、日本でも国民からの積極的な政府への訴えかけで政治に影響を与える事ができるのではないか、と思った。(三浦愛)

政治抗議運動フォーラム後の集合写真

・KIKKOMAN FOODS, INC工場訪問

キッコーマンは醤油を製造している企業として日本で有名であるが、アメリカでも有名であり、キッコーマンの醤油は調味料の1つとして多くの店にも置かれている。ここではどのように日本発祥の醤油をグローバル展開していったのかを中心に、KIKKOMAN FOODS,

INC の CEO を務められている清水和生氏よりご講演いただいた。一口に醤油といっても、展開先の現地に合わせた販売を行っている点と、アメリカ進出後最初の工場をウィスコンシン州に建てた理由が、私個人としては印象的であり、企業のグローバル展開を実際に感じることができたように思う。ご講演後には工場内を見学させていただいた。日本の文化を世界に拡大、定着させていく過程を感じた貴重な経験だった。(大多和祐介)

・Harley-Davidson Museum 訪問

ウィスコンシン州の大都市ミルウォーキーがかの有名な Harley Davidson (以下 HD) 発祥の地だということをご存じの方はどれくらいいるだろうか。アメリカで高速道路を走っていると度々目にする HD だが、ドライバーたちにとってミルウォーキーは聖地なのだそうだ。そのミルウォーキーで私たちは Harley-Davidson Museum を訪れた。ここでは 1903 年に創設された HD のバイクが最も古い型から最新のものまで順番に並べてあったり、バイクにまつわる歴史の紹介があったりと HD にあまり興味がない人でも楽しめるようになっていた。HD が初めて海外展開した先が日本であった、ということはこれから小話のネタとして使えるかもしれない。館内を一通り見学したあと、私たちは HD の海外展開の歴史や今後の展望などについて、Harley-Davidson Asia 副社長の Christian Walters 氏からお話を伺った。企業の具体的な戦略などを伺う機会は滅多にないので非常に勉強になり、楽しむことができた。私たちのたくさんの質問にも快く答えてくださった Walters 氏に感謝をしたい。(森田修弘)

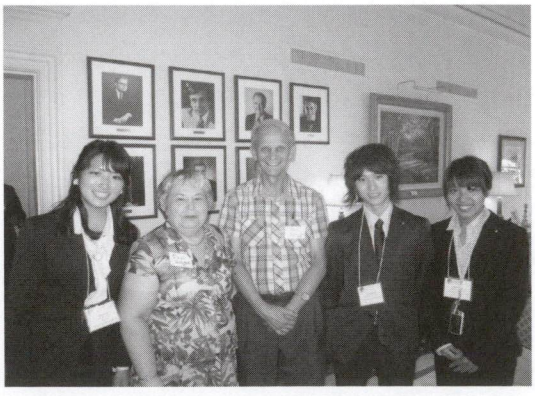
・Organic Valley 訪問

アメリカの牧場経営の実態について学ぶため、Madison 郊外にある牧場を見学した。有機農法ということで、農薬の非使用や広い牧場での経営などについてお話いただいた。昼食は有機農法で採れた野菜を使った料理を牧場の方々からご提供いただき、ハンバーガー、牛乳などを堪能した。健康志向が強くなったアメリカにおいてこうした有機農法を行う農場は人気が高まる一方、経営面で苦労をしていると、牧場の方々とのお話を通して、改めて感じた。また、消費者が食にお金をどれだけ使うのかについては、日本もアメリカも、その現状はあまり変わらないのだということも理解することができた。(竹内正人)

Organic Valley にて

・州知事宅レセプション

ウィスコンシン州知事の公邸にて開催されたレセプションに参加した。閑静な住宅街にたたずむ白塗りの立派な州知事公邸を目の前にして、JASC が多くの方々に支えられた歴史あるプログラムであると改めて感じ、参加者としての責任を感じた。レセプションで多くの JASC アラムナイの方々と交流をした。私がお話をしたあるアラムナイの方は、20 年以上前の参加者であり、今でも同窓会に参加し JASC との関わりを持ち続けていると嬉しそうに語ってくださった。JASC でのつながりは、本会議後も長く続くということを改めて強く感じたひと時であった。(中道洋司)



州知事宅でのレセプションにて

■サイト総括

はじめに、第２開催地ウィスコンシン州マディソンのプログラム実施にご尽力いただいた全ての方々に感謝申し上げたい。とりわけプログラム作成たに大きく協力して下さったアラムナイの Mr. Seaborg そして中心となって準備や運営を進めてくれたアメリカ側実行委員の Steve と Jose には感謝の言葉が尽きない。

滞在したウィスコンシン大学マディソン校は、湖に面し市街と一体化した広大なキャンパスを有し、参加者は美しい景観に心打たれただけでなく、アカデミックな環境やアイスクリーム製造などの地場産業を通じて地域振興を進める大学に感銘を受けた。また州会議事堂の見学や州政治についてのフォーラムを通じて、市民の政治への関わり方や、政治家や政治記者が 2011 年に起きた政治運動やこれから開催される大統領選についてどのように考えているのか、生の声を聞くことができた。さらに、有機農場やキッコーマンの醤油工場、農産品マーケットの訪問を通じて、アメリカの食糧生産の取り組みや日本企業の活躍、さらには食品流通について学ぶことができた。一方、第２開催地の魅力はアカデミックな学習ばかりではなく、参加者が特技を披露するタレントショー、参加者が自由にトピックを決め議論するスペシャルトピック、バーベキューの開催など、参加者同士の友情を育む時間をたくさん持つことができたことである。

第2開催地では多くの学びと深い相互理解が得られ、非常に充実した開催地であったと言える。（八木澤龍大・山下祐里奈）

バークレー／サンフランシスコサイト（8月9日～8月14日）

■サイトコーディネーター
櫻井千浪
杉山和
Zachary Callaghan
Rachel Horton

■サイト概要

ゴールデンゲート・ブリッジやフィッシャーマンズ・ワーフなど、華やかな観光地で人々を魅了するサンフランシスコ・ベイエリア。湾の東岸に位置するバークレーはリベラルな都市として知られ、カリフォルニア大学バークレー校は1960年代の学生運動発祥の地とも言われる。サンフランシスコはアジア系移民を多く受け入れてきた歴史がある一方で、少数派民族排除の時代もあった。排日移民法や中国人排斥法によってアジア系移民は制限され、先住民は白人入植者に土地を奪われ、偏見や差別の目と闘ってきた。「人種のるつぼ」とも「人種のサラダボウル」とも言われる移民国家アメリカ。特定の人種、民族の権利をめぐる歴史を通して、少数派民族のアイデンティティ問題を考え、多様な人種が共生するための道を模索したい。

■サイト日程

8月9日(木)　サイトオリエンテーション、分科会活動
　　広島プレゼンテーション
8月10日(金)　分科会活動
　　Tomodachi Leadership Program
　　Graduation Ceremony参加
　　広島映画鑑賞（“Pictures from
　　a Hiroshima Schoolyard.”）
8月11日(土)　スペシャルトピック、分科会活動、
　　Andrew DeWit教授のご講演
　　Tomodachi Leadership Program参加者
　　とディスカッション
8月12日(日)　サンフランシスコへ移動、観光、
　　分科会活動
8月13日(月)　分科会活動、観光、在サンフランシスコ
　　日本国総領事館訪問
8月14日(火)　シアトルへ移動
※宿泊場所　カリフォルニア大学バークレー校、
　　San Francisco Downtown Youth Hostel

■具体的な活動

・広島プレゼンテーション

ヒロシマとナガサキへの原爆投下は日本人とアメリカ人の間で最もタブーとされている話題であると言えます。私は小中高と広島で育ったので原爆投下について一家言持ち、毎年原爆投下の時間には黙祷を捧げるのですがそれでも原爆投下についてアメリカ人学生と話すのを無意識に避けていました。今回日本人側参加者の１人である中高時代の後輩が「是非このことについて日米学生会議で話し合いたい」と言ってくれなければ原爆投下についてのセッションをしなかったと思います。セッションでは日本側の言い分のみを主張することはしたくなかったので感情を可能な限り排して事実のみを淡々と述べ、その後にそれを元に何グループかで話し合うという形態を取りました。結果として「目的は手段を正当化するのか」というような深い内容にも発展し、単なる感情論ではなく日米両国で同じような悲劇を繰り返さない為の具体的な話ができたと思っています。（山東典晃）

広島プレゼンテーションの様子

・広島映画鑑賞（“Pictures from a Hiroshima

Schoolyard.”）

このヒロシマ映画は、原爆に遭い多くの友達や家族を亡くしてまだ間もない頃の子供たちが、文房具やおはじきをプレゼントしてくれたアメリカのある教会へのお礼として送った絵を題材にした作品で、何十年も経ってから、描いた本人たちがまた自分の絵を目にすることができるようにしようと立ち上がったプロジェクトとそれをとりまく人々を描いたドキュメンタリーです。ヒロシマ映画を含め、戦争に関する映画というとどうしても暗いイメージを抱いてしまうのですが、この映画の中で何よりも印象的だったのはその描かれた絵の明るさでした。まだ戦争で受けた傷が癒えていないだろう子供たちが描いたとは思えないような、美しい色遣いで描かれた風景画や、玉入れの絵は、私に、新しい”ヒロシマ”の一面を見せてくれました。（飯島千咲）

・Tomodachi Leadership Program参加者との交流

8月10日と11日には、被災地から約300人の高校生が3週間バークレーを訪れリーダーシップスキルと地域貢献について学ぶという「TOMODACHI Summer 2012 ソフトバンク・リーダーシップ・プログラム」の高校生と交流する機会がありました。10日には、プログラムの発表会と卒業式を観に行きました。高校生は班に分かれてそれぞれの調査をしていたのですが、私が話を伺った班は、バークレーに住宅と商店が複合した建物や、ショッピングモールを建設することを提言していました。高校1年生もいたのですが、予想以上に現実的で面白い内容で驚きました。11日には、2時間ほど時間をいただき、分科会ごとにディスカッションをしたり、東北についての意見交換をしたりすることができました。私は人権分科会だったので、いじめについての議論をしました。高校生は半数以上が卒業後に就職することもあり、彼らの視点からの東北の現状や復興に対する率直な意見は新鮮で、貴重な機会でした。（中野舜一郎）

Tomodachi Leadership Program
Graduation Ceremonyでの様子

・Andrew DeWit教授のご講演

午前中の分科会活動の後、DeWit教授からエネルギー問題に関するレクチャーをしていただいた。レクチャーでは、主に東日本大震災における福島原発事故以降、日本でも問題になっているエネルギー問題に関して、海外での例を含めながら説明をしていただいた。エネルギー問題は、復興RTや環境RT、企業RTなど多くのRTと関係があるテーマであり、また、詳しい知識を持たない参加者も多くおり、非常に有意義なレクチャーであった。

今までのような一極集中型（原子力や火力など）の電気供給より、新エネルギーと呼ばれるいくつかのエネルギーを用いることで、供給源を分散させた方が災害に強いエネルギー供給ができるという考え方や、地域間での電力シェアの仕組みを作るといった考え方は非常に興味深かった。

また、会場には昨日鑑賞した広島の映画で取り上げられた作品が展示してあり、参加者も興味深く見学していた。（渡部寛史）

・在サンフランシスコ日本国総領事館訪問

サンフランシスコ滞在の最終日となった8月13日に日本領事館を訪れレセプションに参加した。JASCのアラムナイであるグレン・フクシマさんがしてくださったご自分のJASCでのお話が印象的であった。何十年も前、私たちと同じように、様々な背景を持った人間と語り合い、友情を深め合っていた。その文化が脈々と引き継がれ、私たち64回のJASCに至っているという

ことを改めて再確認し、この文化を次の世代に、そして自分たちの周りへと広げていきたいという強い思いを持った。その後、JASCのアラムナイや各界の方々と夕食会を楽しんだ。この場では、アメリカ国内外問わず各界で活躍されている方々のお話を直接伺うことができた。シリコンバレーを拠点に自分が生きがいを感じることに生き生きと取り組む姿勢を、お話の中で感じ取った。私自身もこれだ！と思うものを見つけるためにこの学生生活を最大限活かしていこうと思った。
（藤田耕己）

在サンフランシスコ日本国総領事館での集合写真

■サイト総括

近年だけでも、第54回、第56回、第58回、第62回とカリフォルニア州は頻繁に日米学生会議の開催地になっている。それほど、魅力があり多くを学べる地であるということだが、現地では驚きの連続だった。Fisherman's WharfやJapan Town等の賑やかな観光地ばかりではなく、日系人や他のアジア系移民の歴史にまつわる資料館もあり、学びと遊びの機会に溢れていた。コーディネートを担当したアメリカ側実行委員のZachary CallaghanとRachel Hortonの努力により、サイト概要に書かれているようなカリフォルニアという地の特色を生かすことが可能となった。UC Berkeleyで広島と戦争に関する映画の試写会が開催されたことに伴って、広島出身の日本側参加者が広島勉強会を開催できたことも特筆したい。

最後に、ご協力くださった皆様に感謝を表して、カリフォルニアサイト総括とさせていただきます。多大なるご支援とご協力本当にありがとうございました。
（櫻井千浪、杉山和）

シアトルサイト(8月14日～8月19日)

■サイトコーディネーター
杉岡昌太
森田真弓
Jillian Anderson
Kimberly Julien

■シアトルサイト概要

ワシントン州最大の都市シアトルは、緑と湖に囲まれたその美しい都市景観から、「エメラルド・シティ」の愛称を持つ。航空宇宙 産業の雄ボーイングを始め、近年では IT 産業やバイオ産業が発達し、世界最大のソフトウェア会社マイクロソフトやネット通販最大手のアマゾン、グローバル展開を続けるスターバックスなど先端企業が集積している。また環境に対する意識も高く、世界をリードする環境先進自治体としての側面も持つ。州、郡、市の行政が、廃棄物のリサイクルや自家用車運転抑制などに一体的に取り組んでいる。環境に配慮しながらも着実に経済発展を遂げているこの地で、環境共生型社会を実現するためにはどのように企業活力の向上と自然保護活動を両立すべきか考察したい。

■ サイト日程
8月14日(火)マリナーズ戦観戦
8月15日(水)Wing Luke Museum and the International District
8月16日(木)分科会活動
8月17日(金)ファイナルフォーラム、実行委員選挙、アラムナイレセプション
8月18日(土)観光、ファイナルディナー
8月19日(日)帰国

■具体的な活動

・マリナーズ戦

シアトルに着いた初夜、マリナーズ対レイズ戦を観戦しにSafeco Field に行った。イチローがマリナーズから移籍してしまった後なので少し残念であったが、みなフェイスペインティングをしたり、マリナーズやイチローのグッズを買ったりと長旅の後にも拘らずシアトルの夜を楽しんだ。また、アメリカの球場は沢山の出店やお土産屋が多くありアメリカンフードを存分に楽しむことができた。

試合は終始マリナーズが 1 点差で負けており、追いかける形であった。若干負けムードが漂っていたが、マリナーズの勝利を信じ一生懸命応援した。合間合間に応援を促す言葉がスクリーンに表示され、球場が一体となって応援することが出来た。普段出さないような大声を出したり、上半身裸になって T シャツを振り回す観客もおり、球場ならではの一体感と高揚した雰囲気に酔いしれた。

結果は9回の裏に逆転し、見事勝利。JASC の成功を感じさせる素晴らしい試合であった。(片山恵理)

セーフコフィールドにて

・Wing Luke Museum and the International District

Wing Luke は政府機関に勤めながら人種差別問題に取り組み、1962 年にシアトルで初めて市長に当選した中国系アメリカ人である。この博物館は 1965 年に Wing Luke が亡くなった後、「アジア系アメリカ人達がその歴史や文化を学び、誇りを保てる場所を作りたい」という彼の意志を継ぐ人々によって設立されたものである。普段の日本の生活では、日本以外の国での日系人の問題や歴史などを意識することはありませんでしたが、実際に訪れることにより、初めてその存在と問題を目

の当たりにしました。特にアメリカでは第二次世界大戦中の隔離政策により、日本人強制収容所があることを知ったことは衝撃的でした。見学中に講演に来ていただいた Mako Nakagawa 氏にはそのことについての実体験を聞かせて頂き、幼少時代に父親が捕まり引き離され殺されてしまい、強制収容所で幼少時代を過ごしたという過去のお話から、教師の道を選んだこと、学ぶことにおいて最も重要なことを教えて頂き大変参考になりました。（木村光太郎）

Wing Luke Museum

・Mako Nakagawa 氏　レクチャー

第二次世界大戦中の日系人の収容についての展示を見た後、私達は実際に収容所での生活を体験された Mako Nakagawa 氏に講演をしていただけました。展示を見ただけでは表面的に「昔の人に起きた悲惨な話」と感じたものも、実際にナカガワさんのお話を聞くことで、より現実味が強く感じられ、とても考えさせられました。

Nakagawa 氏は、アメリカで生まれ育ったアメリカ人です。しかし、たったの５歳であった Nakagawa さんは日系人という背景を持つため“国家にとって危険となりうる者”とみなされ、他のアメリカに住んでいた日系人同様に、彼女も収容所に連れて行かれてしまいました。さらに皮肉なのは、一定の自由を奪われた収容所にて Nakagawa 氏は Liberty（自由）についての教育を受けていたそうです。

私は日本人であるにも拘らず、詳しく強制収容所の歴史を知らず、大変ショックでした。歴史を次世代にも教育していく事が重要だと感じました。（野口ゆかり）

Mako Nakagawa さんと

・ファイナルフォーラム

緊張、不安、希望、寂しさ、疲労感。１人１人の参加者が今までRTに懸けてきた成果や想いを伝えるファイナルフォーラムは、この会議の真髄を成していると言っても過言ではない。それ故に、発表前は様々な感情が入り混じった、今までの会議中では感じたことのない雰囲気が漂っていた。ここでのプレゼンテーションのために、本会議が始まる前から日本で様々なフィールドトリップやスカイプミーティングなどを行い、本会議中では日米の学生の間で言語の壁や価値観の違い、意見の衝突を乗り越えながら、タイトなスケジュールの中時間外でも発表準備のためのミーティングやリサーチを行った。RT でのディスカッションは決して楽なものではなく、衝突や葛藤、悔しさを感じ、時には涙を流したこともあったが、それだからこそ RT の結束が強まった。発表の場では全ての RT に一体感が生まれ、それぞれに今までの成果を思う存分発揮することになり、発表後はより一層 RT メンバーの絆が深まった。（饒平名玲美）

ファイナルフォーラム生放送の様子

ファイナルフォーラム後の集合写真

・レセプション

夕方に行われたレセプションでは、ネイティブアメリカンを彷彿とさせるデザインのレストランで、OB、OG の方々と語らうことができた。部屋からはシアトルのビル群と雄大な川が見渡せ、夕焼けとともにレセプションに花を添えていた。料理はビュッフェ形式で、シュリンプ・カクテルやクラムチャウダー、串焼きなどシアトルらしい食事に、JASCer たちは舌鼓を打った。レセプションの後半では、新 EC の紹介も行われ、一人ひとりが紹介されるとその度に歓声が上がり、新 EC の誕生を祝福していた。新 EC の誕生と本会議があと実質１日しかないことを実感し、皆は写真を撮ったり、爆笑したり、泣いたりと楽しい時間を過ごした。またファイナルフォーラムを終えた安堵感も入り混じり、何とも不思議な夜だった。（野地洋平）

アラムナイレセプションの様子

・シアトル観光

観光は各々が好きな場所に行く極めて自由度が高いものでした。私は数人のジャパデリとアメデリと一緒にシアトルのダウンタウンを訪れました。活気あふれるダウンタウンにはかの有名なスターバックス１号店があり、歴史あふれる内装とおいしいコーヒーを楽しみました。スターバックスを後にした私たちは、すぐそばの Pike Place Market を訪れました。各自がそこで昼食を取ったり、友人にお土産を買ったり、路上パフォーマンスを鑑賞したりと楽しいひと時を過ごしました。その後はシアトルの観光名所であるスペースニードルに行くグループとシアトル・アート・ミュージアムに行くグループに分かれて行動しました。私は美術館のグループに入って友人と様々な時代・地域・民族の美術品を鑑賞しました。個人的にはアボリジニの風俗に関する展示品が特に印象的で、併設してあった解説用ビデオクリップとともに楽しみました。その後はほかのメンバーと合流し帰寮の途に就きました。（廣野允威）

・ファイナルディナー

毎回リフレクションでは皆お互いに感動し、共感をして半泣きになっていたけれど、最終回は半泣きどころか本気泣きでした。温かさと熱さと寂しさとこれからの期待に胸が熱くなるようなリフレクションが終わり、最後の皆で取る夕食の時間がやってきました。１カ月食事を皆で取るのが当たり前だったけれど、これが 71 人全員一緒の「最後の晩餐なんだな。」と思うとものすごく寂しかったです。だけどちゃんと食べている人はほぼおらず、ほとんどがお互いにハグをし合い、感謝を伝えにいく時間になっていました。この時間に、全員にではできなかったかも知れないが、１人１人、自分と出会ってくれてありがとう、沢山の熱い議論やトークや思いやりや友情にありがとう、これからもずっとずっと大切な存在でいてね、と伝え合えたのは私達皆にとって非常に意味のある事だったと思います。ありがとうで溢れていた私達の最後の晩餐は素敵なラストだったと、最後にそう思います。（林真希チェルシー）

ファイナルディナーでのリフレクションの様子

第65回日米学生会議実行委員

■サイト総括

最終サイトとなるシアトルでは第64回日米学生会議の終わりが全ての参加者の新たな船出となることを目標にコンテンツ作成に注力した。ファイナルフォーラムに向けて分科会の時間を多く取った。そして、次期実行委員を決める選挙に向け、現実行委員と参加者が交流する機会を作ることにより、立候補者の不安を軽減させる工夫などを行った。

ファイナルフォーラムでは、日米学生会議出身者である吉原健吾氏のお声掛けで、ニコニコ動画による日米生放送が実現し、7万を越える視聴者と7千以上ものコメントを獲得することに成功した。これは、各分科会が会議を通して議論してきた内容を最大限に発揮することができたことと、多くの温かいご協力とお力添えがあったからこそ実現したものである。

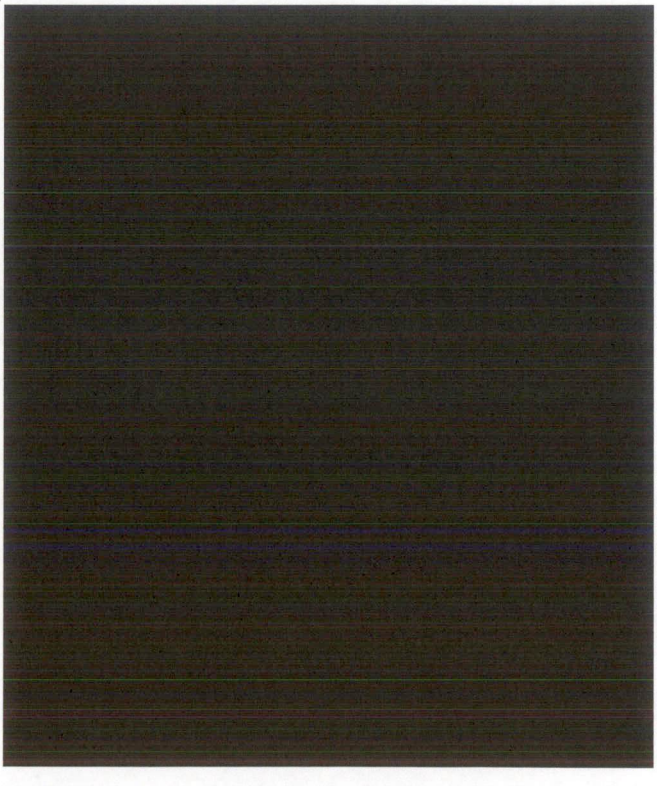
またサイトコーディネーターを務めてくれたアメリカ側実行委員のJillian AndersonとKimberly Julienの活躍なしではこの最終サイトの成功はなかったであろう。

最終サイトでは別れが付きものであり、参加者全員が日米学生会議を終え、それぞれの生活に戻る。しかし、第64回会議で経験して得たものや感じたこと、そして築いた絆は未来永劫受け継がれていき将来の日本、またはアメリカに還元されるものと信じている。

最後に、第64回会議に多大なるご協力をいただきました多くの方々に心より御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。(杉岡昌太、森田真弓)

第４章

分科会活動



現代社会における企業活動と倫理

Business and Ethics in the Modern World

■分科会メンバー
櫻井千浪*
浅原光貴
市毛裕史
松浦理咲子
三浦愛
Jose Lamazares*
Cruz Arroyo
Jun-Yong Choi
Autumn Ding
Channig Harris
（*は分科会コーディネーター）

■分科会概要

近年、企業活動は社会の様々な分野で行われ、企業は社会の一員として高い倫理観を持って行動しなければならない。これに伴い企業の社会的責任（CSR）という概念が注目され、企業は利益追求だけではなく、社会や環境にも配慮した活動に取り組むことが求められている。例えば「地域社会との共生」は、しばしば社会的責任のひとつと言われる。各国・地域の文化や慣習を尊重し、さらに雇用創出などによって地域社会の発展に貢献することを、指針に掲げている企業も多い。環境という観点では、CO2 排出量削減による地球温暖化対策や、製品リサイクル技術による循環型社会への貢献など、企業の環境保護への取り組みが重視されている。企業はどのように、経済的、社会的、環境的側面に配慮しながら、企業価値を向上させ、持続的成長を図るべきだろうか。当分科会では、企業が守るべき倫理とは何か、CSR のほか具体的事例を取り上げて考察した。

■事前活動

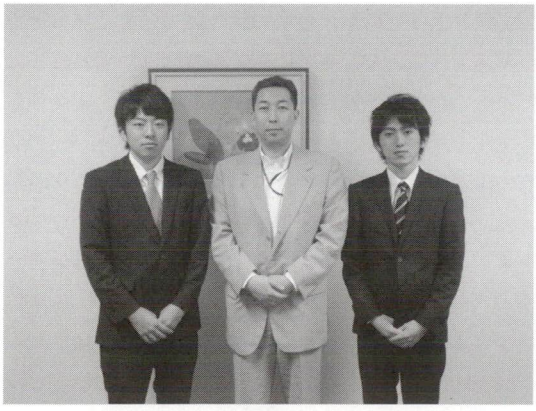
・春合宿

出願時の第一志望ではなかったが、「現代社会における企業活動と倫理」という分科会は、結果的に自分の問題意識を議論するのに適した場所であったため非常に満足している。

まず始めに私たちは事前に考えてきた各々の問題意識を共有した。そこではお互いに知らない論点がどんどん挙げられ非常に興味深く思うと同時に、「企業活動と倫理」というテーマの広さに驚き、議論の難しさを実感した。また、本会議を終えてから分科会で学んだことをどのように社会に還元するかということが積極的に議論されたのはこの分科会の特徴だろう。今後は、この春合宿で設定した「企業が守るべき倫理は何か。それに伴う行動は何か。」という大きな問いに答えを出すべく、労働問題・企業倫理の定義など今回決めたいくつかのテーマに基づいた勉強会やフィールドトリップに臨みたいと思う。（浅原光貴）

・キッコーマン株式会社 海外事業部
管理第 2 グループ長 深澤晴彦氏 フィールドトリップ
日時：7 月 12 日(木)
場所：キッコーマン株式会社 東京本社
参加者：浅原、市毛、櫻井

OB の天野氏、茂木氏の御紹介で実現したキッコーマン株式会社への訪問は、自分たちの視野を広げことができ、有意義なものとなった。深く感銘を受けたことには、理念共有の徹底がある。理念を末端にまで届かせることは、大企業において可能なのだろうかという疑問は、丁寧な説明によってすぐに吹き飛んでしまった。新人教育の前に、上司の側にまず理念を伝える。単に一度で終わる新人教育だけでなく、仕事を通じて理念を伝えていくというこのやり方はとても合理的に見えた。またエッセイや写真コンテストを全世界で行うことは、理念の浸透に十分納得いくべきものだった。加えて、担当者の深澤氏がいきいきとしゃべる姿は、より一層私たちに理念共有の徹底を実感させた。そして、新たな視点を与えてくれた言葉として「企業が存続することがお客様のためになる。」がある。この言葉は JASC 本会議だけでなく、自分自身の人生で役立てたい言葉となった。(市毛裕史)



深澤氏と

・伊藤忠商事株式会社 広報部 CSR・地球環境室
小野博也氏 フィールドトリップ
日時：7 月 20 日(金)
場所：伊藤忠商事株式会社　東京本社
参加者：市毛、三浦

今回のフィールドトリップは、企業における倫理や理念、CSR、ソーシャルビジネスなど様々な観点から生の声を聞く事ができ、分科会活動の話し合いのため、そして自分のためにも非常に参考になった。特に、小野氏の「消費者に対して良い事をしていると、結果的にそれがビジネス的にも良い結果につながった」という実体験に基づいた話は、本では読んだことがあるものの、その重みが格段に違った。小野氏のお話は、伊藤忠の企業理念や組織体制、水ビジネス、再生エネルギービジネスなど多岐にわたっていて、今まで分科会で議論してきた内容を考えにまとめ、さらに他の視点からフィードバックを得られたためとても盛り沢山かつ有意義な時間だった。(三浦愛)

小野氏と

・厚生労働省　フィールドトリップ
日時：7 月 25 日(水)
場所：厚生労働省
参加者：浅原、市毛、三浦

今回私たちは企業がもつステークホルダーの一つを労働者として捉え、労働政策を司る厚生労働省を訪れてお話を伺った。テーマとしては「労働組合」「労働時間などの労働環境」「過労死」を扱い、それぞれの項目について担当者の方が専門的な知識を分かりやすく説明して下さった。印象的であったのが、行政の役割は包括的な問題への対処であり、個別具体的な事例は個々の企業が対応する必要があるということであった。例えばコンサル業界などでよく採用される裁量労働制

の工場労働での適用は難しい。このように業界毎に経営形態が違うこともあり、全ての業界を包括する政策をとるのが難しいという話が興味深かった。(浅原光貴)

中川氏、金子氏、関口氏と

・直前合宿

直前合宿において、当分科会では今まで行ってきたフィールドトリップ内容のシェア、今までのトピックの整理、および企業倫理の定義の確認を行い、分科会発表に向けて調整をおこなった。一番思い出深く心に残っていることは、英語で行われる初の分科会発表に分科会メンバーで一丸となって取り組めたことである。春合宿での初めての出会いから約 3 ヵ月間、我々は手探りながらも、分科会のテーマに沿って興味のあるトピックを中心に話し合いを進めてきた。時には意見の衝突がありながらも、「企業倫理とは何か」という大きな問いに取り組んできた。そのため自分たちでゼロから形作った定義や、今までの議論の流れを整理しながら振り返れた時は胸がいっぱいになった。初めての英語での分科会発表でも、自分たちの現時点の考えや想いを伝えることができ、達成感とともに日本を発つことができた。(市毛裕史)

■本会議中の活動

・本会議議論内容

日米の参加者が顔を合わせてまず行ったのが、事前準備の段階で議論、経験してきたことの共有であった。最初に共有したのが RT ペーパーの内容である。日本側とアメリカ側から一人ずつ選んでペアにし、お互いの RT ペーパーの内容を発表するという形をとった。過労死、BOP、多国籍企業、収賄、企業文化、労働環境などそれぞれが異なる関心を抱いていたのが興味深かったと同時に、この分科会のテーマが含む範囲の広さを改めて実感した瞬間でもあった。

次に日本側が事前準備の段階で行ったフィールドトリップの内容を共有した。具体的にはキッコーマンの企業倫理の考え方、伊藤忠の BOP 事業、厚生労働省による労働環境への政策などの論点をアメリカ側に伝えた。こうした内容はアメリカ側にとって新鮮な面もあったようで、アメリカの状況や考え方と比較し、興味深い意見を交えながら議論を深めることができた。RT ペーパーとフィールドトリップの共有で一番印象的であったのがやはり日米の違いであった。事前活動の議論を通して自分たちの中で前提となりつつあった内容がアメリカ側では必ずしも当てはまらないことを実感すると同時に、逆にアメリカの特徴（アメリカ側にとっては日本の特徴）を認識する足がかりになったと思う。(浅原光貴)

RT ペーパー、フィールドトリップの共有に引き続き、私たちは「現代社会における企業活動と倫理」をテーマに議論を進めていった。その中で重要なトピックとして取り上げたのが、企業の腐敗についてであった。企業経営が傾いている時にこそ企業倫理が問われるのではないかという観点から、企業の腐敗と企業倫理との関連を探ることとなった。そして、RT ペーパーの共有の段階では企業倫理をレベル 1 とレベル 2 の 2 段階のみに分けていたが、企業倫理が崩壊している段階を表すレベル 0 を新たに付け加えるべきだという考えに至った。これ以降、レベル 0 から 2 の 3 段階の企業倫理レベルに今までの事例を分類し、ファイナルフォーラムに向けて一貫したプレゼンテーションを発表すべく大詰めに入った。レベル 1 としてスタートした企業がなぜレベル 0 に転落してしまうのか、あるいはなぜレベル 2 を達成するのかについて事案をピックアップし、prezi を用いて視覚に訴えるプレゼン作りに尽力した。常に分科会メンバーが一丸となって取り組み、非常に良い雰囲気だった。(松浦理咲子)

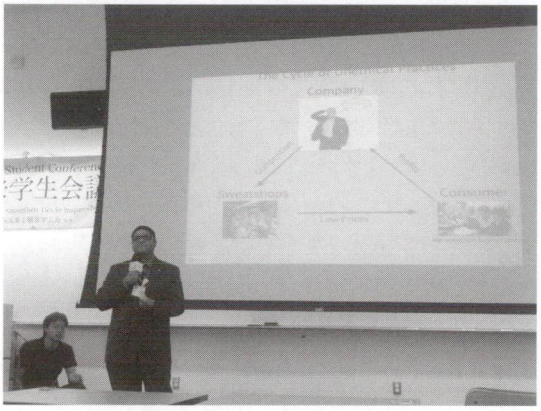
・iLEAP Social Innovation in Seattle (SIIS) フィールドトリップ
日時：8 月 16 日(木)
場所：シアトル郊外

8 月 16 日、私たち企業と倫理分科会は iLEAP のプログラムでシアトルに来ている日本人大学生とディスカッションの場を持つためにフィールドトリップに向かった。彼らは NPO 運営・社会起業に興味を持っているため、分科会テーマを考慮し" socially responsible business"をテーマに2時間ほど話し合うことにした。最初は意見を言ったり質問したりすることに戸惑いを見せていた学生もいたが、ビジネスを専攻している学生が積極的に話題を切り開き、お互いに今まで学んできたことを共有するうちに、非常に建設的で有益な議論を展開することができた。私たちが今まで扱ってきた事例を紹介したり、考えた定義に意見を求めたりすることができたので、分科会にとっても刺激になる素晴らしい機会だったと思う。日本の学生との出会い自体も貴重であり、今後も続けていきたい関係だと感じている。(松浦理咲子)

SIIS 参加学生と

・ファイナルフォーラム

そもそも「倫理」とは何か、という漠然とした疑問に始まった夏だったが、個性に富んだ 10 人で納得のいく集大成を迎えた。倫理とは立場や見方によって捉えられ方が様々であるため、企業活動の「倫理の度合い」を 3 段階に分けた。レベル 1 は法律などに定められた最低限を守った企業活動。レベル 0 はその最低限すら守られていない状態。例としてはスウェットショップ(労働搾取工場)。レベル 2 は最低限だけでなく、地域貢献など社会的に求められている活動以上のことをすること。例として実際訪れたウィスコンシン州の有機農場を挙げた。これらのレベルを提示した上で、企業のレベル間の動きに注目した(昇進、後退)。外的要因が強く、特に企業の倫理的活動を大きく影響するのは消費者であるという結論に至った。良き商品に投資、支援し、悪しき商品には目を向けない。理想論とは言え、私達はこのようにして 1 ヵ月間かけて検証してきた共通見解:"Consumers define the business world"を観客に精一杯伝えた。(三浦愛)



ファイナルフォーラムでの発表の様子

■日本側参加者感想文

・浅原光貴

現代社会における企業活動と倫理。この分科会に参加することが決まった時、嬉しさと同時に不安が生まれた。良い方向にいけばいろいろなことを学べ、悪い方向に進めば収集がつかなくなる。扱うテーマが広いためこのような感想を私は抱いた。案の定日米両参加者各々が興味関心を抱いているテーマは様々であり、当初の予感のもと議論に参加し始めることとなった。そして言語の違いや議論の組み立て方の違いなどから最初は意思疎通が必ずしもうまく取れず、議論にまとまりがもてなかった。しかし日米両参加者が本音を共有し合ううちに当初の課題は乗り越えることができ、次第に生産的な議論を展開することができた。「企業が

守るべき倫理は？」という春合宿で設定した問いに対しても企業倫理を 3 つのレベルに分割し、そこに消費者という要素が強い影響を与えるという私達なりの答えをファイナルフォーラムで提示できたのではないかと思う。この答えがどのように思われるかは分からないが、そこに至るまでに行われた議論を通して知識だけでなく考え方などの面も含めて様々なことを学んだ。癖の強い個性的なメンバーが集まったこの分科会で自分の役割に悩む日々が続くこともあったが、そのように自分と見つめ合う機会を与えてくれた彼らと議論し一緒に活動できたことを誇りに思うと同時に、心の底から感謝している。

・市毛裕史

私は最高の RT に入ることができた。この一言に尽きると思います。RT としての到達度や、内容の深さの点では、まだまだ完璧ではなく、自分自身にも改善の余地はあると思いますが、ここの RT ほど自分を苦しめ、嘆かせ、泣かせてくれ、笑わせてくれ、また成長させてくれた RT はなかったと思います。「現代社会における企業活動と倫理」という一見漠然としたテーマと向き合ったこの約 4 ヵ月間、通称 Bethics と呼ばれた当分科会は、自分に多くの学びの機会を与えてくれました。ここでいう学びは単なる知識の吸収ではなく、これからの人生にも確実に影響を与えてくれるものです。多くの意見の衝突の中、自分の意見を真摯に伝える必要性。人の意見をきちんと最後まで聞く態度。お互いに尊敬しあいながら、議論を進めていく大切さ。その人の人格と、意見や主張を分離して考える重要性。そして、相手のことを思いあったケア。全て単純なことで、自明のことかもしれませんが、自分の意見を真剣にぶつけられる企業と倫理分科会だからこそ自分の腑に落ちるまで吸収することができました。また、英語で苦労した自分を理解し、自分の意見を最後まで聞いてくれる RT メンバーには自分の中で衝撃とも言えるほどの感銘を受けました。自分もこれから出会う人に対してそのような態度で接したい、そう思えるようになりました。これからは、この分科会での経験を活かしながら、自分も人に影響を与えられるような人を目指していきたいです。

・松浦理咲子

私たち「現代社会における企業活動と倫理」分科会は、とりわけ順調に議論をすすめることのできた分科会だったと自負している。本会議前の RT ペーパーを共有した時点で、単語の定義や議論の軸に関してある程度合意に至っていた。企業倫理とは何なのか、利益を追求する存在である企業がどうして倫理に従って行動するのか、企業倫理が問われる事案は何なのかなど、論点は非常に多く、どのように焦点を絞ればいいのか悩んだこともあったが、最終的に企業を倫理レベル 0 から 2 の 3 段階に分類することが決定してからはスムーズであった。ファイナルフォーラムでの発表に向けて、企業が倫理を破るのはどういった時か、企業が倫理的に振る舞うのはどういった時かなど、今までに取り扱った事案の中から一貫した発表のための例を抽出すると、すっきりとわかりやすいプレゼンテーションを作ることができた。最初は英語での議論が難しく、なかなか自然なスピードでディスカッションを続けることができなかったが、最後には皆で一丸となってひとつの発表を作り上げることができ、チームワークと努力の重要さを学んだ。この分科会で共に活動した 10 人の絆をこれからも大切にあたためていきたいと思う。

・三浦愛

本会議終了 3 日前、シアトルにて日本人大学生と議論をするフィールドトリップに出かけた。議題は「ソーシャルビジネス」。企業と倫理分科会メンバー2 人に対し 5 人程の日本人大学生と議論をしたが、質問をされながら議論を進めた。私はその時、分科会全体で過ごした時間を振り返った。1 ヵ月前にこんなにいきいきと自分達の企業倫理や企業活動に関する意見を他者に言えただろうか。様々な事例を踏まえて、多角的な視点を踏まえて、自分の論を展開する事ができただろうか。この 1 ヵ月間、議論がどこに進んでいるのかわからなくなる事もあったし、日米間で意思疎通ができているのかを不安に思う事もあった。本会議以前も、事前勉強が何の役に立つのか見えない事もあった。けれど振り返ると、私達は確実にお互いを高めあってきた。回り道もあったかもしれないが、確実に前進をしてい

た。企業と倫理分科会メンバーは国籍も様々で強い意見の持ち主が多く、一人ひとりにカラーがあり、良くも悪くも自己主張が強い人が両国側にいた。しかし、議論を通して、ぶつかる事や言語の壁を恐れずに自分たちの知識や考えを伝え合った結果、メンバーみんなの見解を踏まえた新たな自分の意見をそれぞれ紡ぎ出せた様に思う。私は今ではメンバー全員を心底信頼している。気が利き、包容力のある RT コーディネーターに最初は引っ張られ、最終的に 10 人で分科会を作り上げられた事を私は誇らしく思う。この分科会で本当に良かった。

■分科会総括

「企業活動と倫理」。私は昨年夏、実行委員として新たなことに挑戦しようという気持ちで、自分の専攻とは全く異なるテーマを選んだ。私たちの生活は企業活動と深く関わり、私たちは消費者として企業へ影響力を持っている。私たちには企業の倫理をより良い方向に導く責任があるのではないか。日米両国の参加者が、それぞれのバックグラウンドや個性を生かし、企業の倫理と私たちの役割について議論することができたと思う。

本会議では、3 つの観点から企業の倫理を考察、分類した。まず、労働搾取工場のように企業活動が法に抵触している場合、あるいはその可能性がある場合、次に最低限の法令遵守にとどまる場合、最後は CSR のように法令遵守を超えて社会貢献活動を行う場合である。この類別化によって企業活動の倫理を段階付け、いくつかの事例を用いて検証することができたことは当分科会における大きな成果である。

この結論に達するまでには議論が堂々めぐりすることもたびたびあった。メンバーそれぞれが、消費者、経営者など、企業活動に関わる様々な立場で意見を主張していたことが主な原因だった。「そもそも、ある企業活動を倫理的か否か一概に評価できるのか」。この議論から、立場によって情報の不均衡があり、捉え方の基準も異なるという考えに至った。

議論の成果のほかに、大変重要だったことがある。それは、相手を理解しようとする姿勢である。本会議では言語の壁や議論の進捗への焦りからそれぞれ葛藤があったと思う。しかし、みなが互いを信頼し尊敬する姿勢を持ち、自分の課題に向き合い、真摯に議論に取り組んだ。分科会コーディネーターとして大変誇りに思う。

最後に、当分科会活動にご協力いただいた全ての方々に深く御礼申し上げ、分科会総括とさせていただきたい。（櫻井千浪）

分科会メンバー全員で

環境と科学技術

Environment and Technology

■分科会メンバー
杉岡昌太*
木村光太郎
山東典晃
横田真彩
饒平名玲美
Danielle Wilson*
Chris Brown
Keiko Kato
Alithea Mcfarlane
Paul Yarabe
（*は分科会コーディネーター）

■分科会概要

科学技術の発展により人類の生活は劇的に変化した。生産力は大幅に工場し、利便性を高めてきたが、一方で地球の生態系と自然環境に悪影響を与え、地球温暖化、大気汚染のような環境問題が発生した。「不都合な事実」は改めて地球温暖化の脅威を再認識させ、環境を守る努力の大切さを啓発した。しかし温室効果ガスの削減や、再生可能エネルギーの開発が試みられる中、京都議定書などの環境条約が今なお機能しているかどうかは疑わしい。環境負荷を抑制する手段について様々な情報が交錯する現代社会において、今や企業だけでなく一般市民にも環境リテラシーの向上が求められるようになってきた。当分科会では環境問題を地球温暖化だけではなく、放射能汚染や水質汚染などの汚染問題、エネルギー問題、ゴミ問題などに至るまで多角的に捉え、それらを踏まえたうえで、それらの問題をどのように解決すべきか考察していく。

■事前活動

・春合宿

春合宿全体を通してまず思ったことは、参加者のみんなは知識や英語の能力が高いことでした。また能力が高いことに驕らず、向上心が強く、威張ったりせず、人間的に素晴らしいと思える人が多かったです。そのため自分の能力の低さや、性格など、自身を見つめ直す切掛けにもなりました。そのため、春合宿を終えて思ったことが、自分の圧倒的な能力の欠如でした。本会議前に一回潰されることにより、さらに充実したJASC を送るためにすべきことが明確に見えてとてもよかったと思いました。

また64回会議のメンバー全員とは春合宿を通して深く話すことができず、その状況が本会議まで続いてしまい、本会議までに互いをよく知らない、あまり深い仲ではない関係のまま本会議を迎えてしまったことが残念でした。（木村光太郎）

・竹本秀人氏フィールドトリップ
日時：6月18日(月)
場所：日米会話学院
参加者：木村、山東、杉岡

今回の竹本氏によるフィールドトリップでは、宇宙といえば耳に新しい「はやぶさ」の歴史をはじめ宇宙技術の進歩から始まり、そうした技術進歩がもたらしてくれる「可能性」、それに伴う解決すべき新たな問題とその解決策へのヒント、と非常にたくさんのことを教えていただいた。

普段まったく宇宙技術に触れることのない私にとって、今回の竹本氏による講義内容は何もかもが新しく、面白く感じた。聴講させて頂いたお話のなかでもとくに宇宙太陽発電システムについては、東日本大震災により、エネルギーの捻出解決策を求める日本人にとって、そして原発を見直しエネルギー源を今一度模索している世界にとっても、非常に大きな可能性をもつものだと感じ強く興味を持った。遠いところにあると感じていた宇宙技術進歩の話が急に身近に感じられるようになり、またどれほど現代の科学技術の革新が人々へ恩恵をもたらすようになっていくのかという過程を見た気さえした。

そうして変わりゆく環境へのニーズにこたえる策として進歩を続ける科学技術だが、その科学技術の進歩が環境に負荷をかけることがある。お話しくださったスペースデブリの問題や、宇宙エレベーターも大きな可能性を秘めているが同時にその立地場所によっては戦時目的となりかねない等、この機会がなければ知りえなかった問題もたくさん教えていただいた。さらにこうした問題に対処すべく、技術革新と環境を整備する枠組みの必要性など、多くのヒントも教えてくださり、国際法専攻希望の私個人としても、また分科会ひいてはJASC全体での視点としても貴重なお話で非常に興味深く感じた。また関連して、震災によって海外へ漂着するものの対処に関するお話もいただき、アメリカでの本会議で現地学生と話したいトピックも増えた。

今後、科学技術のもたらす利点・欠点を考え比較し、国際法など別の要素をうまく利用し補っていくことで、環境と科学技術の共生を考える必要があるだろう。今回のフィールドトリップでは、この共生を考える上での最たる例として、まだ権利も分配されていない宇宙環境を中心とした深いお話を頂くことができたので、非常にわかりやすく面白く学ぶことができた。また、宇宙をはじめ、私たちをとりまく環境は、いまだ現在進行形であり、国際法など整備のされていない分野が多いからこそ、次世代を担う私たちが話し合う意義の大きい分野だと強く感じ、改めて本会議に向けて頑張ろうという気持ちにつながった。

本会議では、日本の学生として、日本の世界での役割、日米間における役割を考えつつ、同時に同じ地球の環境をつくる一員としての役割を、本会議を通して、日米双方の学生でできるかぎり具体的に描いていきたいと思っている。

最後になってしまったが、お忙しい中ご丁寧なパワーポイントを始め、映像、たくさんの資料を準備してくださり、そして貴重なお時間を私たちに割いてくださった竹本氏に、心から感謝している。是非、このフィールドトリップでの経験を今後につなげていきたいと思う。(横田真彩)

竹本秀人氏と

・直前合宿

本会議が始まる直前ということで、日米両国学生が揃うことになる本会議のRTミーティングの議論の方向性を決定付けることに終始注力した。“環境と科学技術”という広い範囲をカバーした分科会であるため、日本人参加者内だけでも各々の興味範囲や専門分野が広域に分布してあり、アメリカ側も含めた中でどう1つのテーマにまとめて議論を展開していくかということは、春合宿で最初にミーティングを行った時からの懸念事

項であった。

まずそれぞれの興味範囲を1つのチャートにまとめるため、縦軸の上下に技術と政策、横軸の左右に国内と国外という対立項を設け、それぞれに当てはめるなどした。また、日本側参加者が掲げた、議論の方向性として、現在世界が抱えている気候変動問題を解決すべく、現行の科学技術を最大限に活用することで、日米共同で世界にリーダーシップを発揮し、日米の国際社会におけるプレゼンスを向上させようという結論に至った。

（饒平名玲美）

■本会議中の活動

・第1サイト：ダラス

第1サイトのダラスは私達64th参加者にとって初サイトということもあり、みんな緊張と不安でいっぱいでした。ですが日本側が第1サイトに着いたとき、アメリカ側の参加者達が歌で歓迎してくれたため、とても楽な気持ちで第1サイトが始まったことをよく覚えています。ですが第1サイトではやはり英語の壁が顕著に現れ、本会議の中で一番重要であるRTミーティングもミーティングどころではありませんでした。そんな中でもRTメンバーは必死にその問題の解決法を模索、実行し、RTメンバー1人1人がしっかり意見を述べ、議論の流れを理解できるように努めてくれました。そのおかげで、第1サイトが終わるころにはチームは一丸となり、みんなが「チームのために」という意識をしっかり持って終えることができたと思います。大きな壁を乗り越えたこと、その意味でも第1サイトは個人的に非常に印象が強く、また思い出深いサイトになったと思います。

（木村光太郎）

・第2サイト：マディソン

マディソンでは、全体的に他のサイトと比較してRTの時間が少なかったが、最終プレゼンの方向性を決定づけるにあたって、非常に重要なリサーチを発見することができた。それはスタンフォード大学の環境工学科の教授であるMark Z. Jacobsen氏が発表したもので、2050年までに全てのエネルギー需要を再生可能エネルギーで賄えることが可能であり、その障害となるのは科学的もしくは経済的な要素ではなく、政治的、社会的なものであるという研究結果であった。その研究を端に発して、私たちは「十分な科学技術があるのにも拘らず、環境の持続的可能性を保つことができないのか」、そして「現在ある科学技術を前提とするならば、どうしたら環境の持続可能性を達成することができるのか」という2つの問題を設定し、その解を導き出すことを今後の議論の中心にすることとなった。（饒平名玲美）

・有機農場見学

日時：8月8日(水)

場所：Organic Valley

第2サイトのマディソンで行われた Organic Valley のフィールドトリップでは、広大な牧場の中で有機農法という大変な仕事をこなす人々とその中で生きる動物達を見学してきました。牛の乳しぼり見学の後、現地の方が朝食を用意して下さった時、ポリタンクから出てくる飲み物が牛乳ではなく水だったことを非常に印象深く覚えています。朝食の後は牛舎、子牛の飼育場、質疑応答、生後数時間の子牛、牧場の歴史などを学んだあとに昼食も用意して頂きました。今度は本当にとてもおいしい有機農法で作られた牛乳が飲めたことが2番目に印象深く覚えています。

また昼食の際に同席して頂いた運営者の方と話したとき、有機農法について驚くほど深く考えていました。維持が大変で高値になってしまう商品、周りの農家がorganicでなくとも有機農法をやっていく意味、遺伝子組み替え作物の危険性など、実際に従事している方々からのお話は大変貴重でまた心に残るお話を聞くことができました。（木村光太郎）

・第3サイト：バークレー／サンフランシスコ

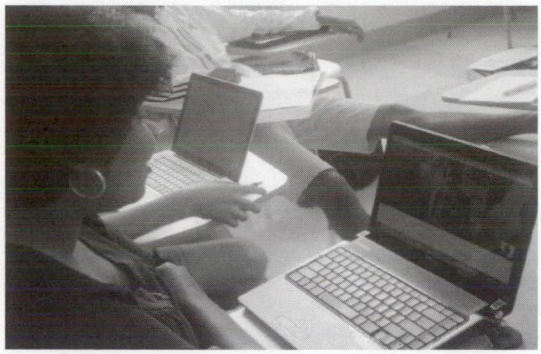
バークレーサイトでは、これまでの2サイトから浮かび上がってきた問題意識に対して、ファイナルフォーラムを見据え、そのストラクチャー、内容ともに具体的な点を議論することとなった。

私たちにとって鍵となる論文を提起したDr. Jacobsonにスカイプで質問をさせていただいた事

も含め、再生可能エネルギーの定義そのものから核エネルギーをはじめ具体的なエネルギーについても議論した。また問題設定の具体的解決策について、政府と企業、そして人という 3 つの分類に分けての議論も行い、ファイナルフォーラムでの方向性も見えてきた。さらに、Dr. Dewit によるレクチャーを受講したことにより、日本国内でのスーパーグリッド構想について学ぶことができ、その後重要なトピックとすることとなった。同様に JASCer ならではのアクションについても今後のトピックとして挙げられ、最終サイトに臨むこととなった。(横田真彩)

・Mark Z. Jacobson 教授フィールドトリップ

私たちの今後の議論の軸を成すリサーチである、「2050 年までに全てのエネルギー需要を再生可能エネルギーで賄えることが可能であり、その障害となるのは科学的もしくは経済的な要素ではなく、政治的、社会的なものである」という研究を発表したスタンフォード大学の環境工学科の教授である Mark Z. Jacobsen に連絡を取ったところ、私たち環境 RT メンバーとスカイプで対談をしてくれることを快く引き受けてくれた。こちら側からいくつか質問を投げかけ、それに答えるという形式で対談が行われたが、その中で彼が日本のことについて言及した。現在日本は福島第一原発の事故を受け、社会的に再生可能エネルギーを推進する絶好のチャンスに見舞われていると指摘し、再生可能エネルギーの普及の前途は政府からの政策に色濃く影響されるため、学生として出来ることは日本の政策決定者と話し、国民に政策的解決の重大さを理解してもらうために行動することだと伝えられた。(饒平名玲美)



Mark Z. Jacobson 教授とのスカイプの様子

・DeWit 教授フィールドトリップ

「世界のエネルギー需要は全てスーパーグリッドと WWS を併用することで補うことができる。障害は技術的・費用的なものではなく社会的要因である」我々の分科会はスタンフォード大学の教授である Mark Z. Jacobson 教授のこの論文を軸にファイナルフォーラムの発表を行うという方向性で一致し実際に Jacobson 教授に Skype レクチャーをしてき、理解を深めましたが、Jacobson 教授の論文は計算を行う際に全世界の風力・太陽光・水力資源の分布を使っていた上、日本の社会的な問題について特異的に言及している訳ではなかった為そのまま日本に適応することは出来ませんでした。そこで立教大学教授である Andrew DeWit 教授から日本の環境政策、電力産業構造、自然エネルギー資源分布などについてのレクチャーを受け、Jacobson 教授の提言をどのように日本に最適化するか議論しました。(山東典晃)

・第 4 サイト：シアトル

我々の分科会はカリフォルニア滞在中に既にファイナルフォーラムの軸ができ上がっていたため、議論も極めて順調に進み後はスライドを作るだけと思っていましたが、最後の最後に初めて日本側参加者とアメリカ側参加者の意見が割れ大変な議論となりました。日本側参加者のコンセンサスは日米学生会議に参加したからには机上の空論でなくその成果を実際に社会に還元したいというものだったのですが、対するアメリカ側参加者はファイナルフォーラム自体が社会的影響を作り出せるという考えで、スライドに具体的な提言を

入れるか入れないか、入れるとしたらどのような提言を行うかで文字通り直前まで寝る間も惜しんで白熱した議論を行いました。最終的に皆が満足する形で今後の活動の方向性を発表をの終わりで述べることができました。信頼し合った仲間同士だからこそできた忌憚のない議論、ファイナルフォーラムでは最高の結果を出せたものと自負しています。(山東典晃)

・ファイナルフォーラム

1980 年、国連環境会議が取りまとめた「世界保全戦略」に初出し、1992 年に国連地球サミットにおける核心的な考え方として提言された「持続可能な社会」というスローガン。我々の分科会は提言されてから早 30 年以上経ったこのスローガンが未だ達成される気配すらないのは一体何故なのかという極めて単純な疑問から議論を開始した。

まず我々は「持続可能な社会」を実現するにあたり何が欠けているのかということを明らかにすることにした。議論ではそもそもそれを実現する技術が成熟していないのではないかという意見が数多く見受けられたため、その検証のために幾つかの論文を参照することとなった。我々はその中のひとつ、スタンフォード大学教授である Mark Z. Jacobson 氏の論文に注目した。氏の論文は趣旨として「スマートグリット網と水力・風力・太陽光(WWS)を併用することで 2030 年までに新たなエネルギー需要を、そして 2050 年までに全人類のエネルギー需要を満たすことができる」といったもので、我々の予想とは裏腹に既に技術的・経済的問題は解決されており、実現を妨げているのは主に社会・政治的な問題であるという驚くべきものであった。果たして氏の主張が信用に足るのかどうか、我々は論文の計算手法、数値データ、引用数、それにまつわる議論などを分担して精査、さらに Jacobson 教授に Skype 上で直接講義をして頂いた上で十分信頼できるものと判断し、氏の主張を軸に議論を深めていくこととなった。

次に日本とアメリカが Jacobson 教授の提言を実現化するにあたってどのように貢献できるかということが議題なった。世界のエネルギー環境を変革するには世界一の温暖化ガス排出国であるアメリカの関与が必要不可欠であるが、自国の産業を逼迫しかねない既存エネルギー源の WWS への転換に対する抵抗が極めて強くなることが予想されたため、まずは日本での導入を優先するものとした。これは立教大学教授 Andrew DeWit 氏の説を参考にしたもので、東日本大震災に連動した福島第一原発事故の影響で、原子力発電の社会的運用コストは慰謝料・原発立地である地方自治体へさらに必要となる交付金などを含めると天文学的な値になっており、日本にスーパーグリッド網と WWS の大規模導入を図った方が中長期的に遥かに経済的であるという考えに因る。グリーンニューディール政策で一日の長のあるアメリカ資本による日本への投資を促し、日本が WWS の本格的普及の拠点となることで、徐々にアメリカ、ひいては世界における WWS 市場を成熟させていくということを我々の分科会の提言の軸に据えた。

このように「持続可能な社会」を実現するための具体案をひとまず形にすることができたが、これでは机上の空論に過ぎず、これを実現するために我々日米学生会議ができることとは、我々日米学生会議にしかできないこととは一体何であろうかという一番大きな問題に直面した。「環境と科学技術」分科会の議論では大きく意見が相違したり意見が出ずに先が見えなくなったりすることはそれまでほとんど経験しなかったが、最後の最後になって皆完全に行き詰まってしまった。その後、何日にもわたり出口の見えない苦しい話し合いが続いた。しかし、数日間にわたる忌憚のない意見のぶつけ合い、腹を割った夜通しの話し合いの結果ようやく「答え」のようなものが見えてきた。他の人々にはなくて我々にはあるもの、それは日米学生会議の一員としての覚悟であり、各人が今後国を担うという強い意思である。そしてこの想いは日米学生会議の OB・OG の皆様も共有して下さることと思う。今回の提言内容を実現すべく、専門も興味分野も全く異なる第 64 回日米学生会議参加者 71 名が、そして数多くの OB・OG の方々があらゆる角度からアプローチし日本とアメリカを、そしてひいては世界をより良い方向へ変革していくだろうと強く確信している。(山東典晃)

ファイナルフォーラム

■日本側参加者感想文

・木村光太郎

最初に述べたいことは、環境 RT は最高だということです。私たちの RT メンバーはみんな優しく、しっかりと議論ができ、人格的に尊敬出来る人しかいませんでした。例えば誰かが話すときは互いにしっかり人の意見を聞き、その意見を尊重し、決して個人が意見を押し通すということがありませんでした。議論をするとき、しばしば自分の意見を通したいと思うことがありますが、何よりも一番重要なことは、チーム全体が納得できる意見を見つけるまで議論し合う、という事だと思います。その最も基本的かつ重要な考えを RT メンバーのみんなは持っていました。そのため、私は今回の JASC の中でも英語力が最も乏しかったのですが、みんなはそれを底上げし、聞き取れないことは説明や翻訳、伝えられないことは翻訳してくれました。また、どんなに言葉が詰まってしまっても、ちゃんと自分の意見を聞き、理解しようとしてくれました。RT メンバーのその姿勢に感動と尊敬を覚えました。間違いなく RT メンバーみんなが RT メンバーみんなを好きであり尊敬し、一生消えない絆ができたと信じています。早くみんなでまた集まって、成長したみんなに会いたいです。

・山東典晃

選考試験受験後に毎日郵便受けとメールをチェックしていた私は日米学生会議の選考合格の知らせを受け取り文字通り部屋を飛び回り大喜びしました。しかしそこに書いてあった“life-changing experience”という言葉にふと目が留まりその時は「なんだなんだ、随分と大げさだな」とやや穿った見方をしていました。ですが、1 ヶ月近くのプログラムを終え今は断言できます。日米学生会議は確かに“life-changing experience”でした。様々な方々から援助していただき実現したプログラムは素晴らしいの一言に尽きるものでしたが、それ以上にそこで出会った人々に本当に大きな刺激を受けました。参加者全員が私にはないものを持っており、彼らと過ごした 1 カ月間は自分の 23 年間の人生に数々の新たな視点をもたらしました。その中でも特に日本側アメリカ側に 1 人ずつ私の今後の人生を大きく変えるであろう出会いがありました。日米学生会議に参加するまでは一般的な医学生として既定の路線に乗っかかり惰性で生きていたとまでは言わないものの、無意識に設定した限界に縛られる人生を送っていましたが、彼らのバックグラウンド、考え方に触れることでようやく自分も「高み」を目指す決心をすることができました。今後は日米学生会議での経験を生かし国際社会、そしてとりわけ日本に貢献できるような人材になるべく日々邁進する所存です。

・饒平名 玲美

“Environment and Technology：環境と科学技術”この分科会名から見ても、かなり広範囲をカバーした分科会であることが伺える。そのため、本会議が始まる前日本側の参加者で終始議論していたのは、各々のメンバーの興味範囲や専門分野が広域に分布している中でどう 1 つのテーマに議論を集約するかということであった。本会議が始まってからは、アメリカ側も同じことを危惧していることが明らかになったが、日本側との英語でのコミュニケーションの問題もあり、中々本題に乗りこめず、それぞれが壁にぶち当たっていた。その議論を収集するため、個々の専門分野を発表し、互いに相手の考えていることや問題意識を理解すると共に、今後の議論の方向性を考える場を作るなど、手探り状態で議論を進めていった。その中で少しずつ方向性が見えてくるようになり、ファイナルフォーラムでは誰もが納得のいく出来となった。

この議論で学んだことは 3 つ、諦めない姿勢と話し

合うことの重要さ、そしてディスカッションにおけるリーダーシップの取り方であった。これだけ互いの興味範囲が異なっていたとしても、深く話し合いを重ねることで 1 つの共通項を見つけ出したことから、言語の障害があったとしても諦めずに自分の伝えたいことを全力で伝え、相手のことを全力で理解する姿勢を持つ大切さを学んだ。

衝突をしながらも困難を一緒に乗り越えたRTの仲間は一生の友であり、今後の私の人生においてかけがえのない存在である。

・横田真彩

JASC の中でも最も長い時間を一緒に過ごして、その中で、おそらく最も、自分の弱さやダメなところを隠すこともできず曝け出した場所。それでも絶対に孤独を感じることはなく、必ず一緒に悩んでいる人や支えてくれる人がいた場所。JASC の中でのホームが、私にとっては環境RTだったのだと思う。言語面でうまくいかず悔し涙を流した時も、議論で納得が行かなかった時も、問題点がどれほど小さくても、互いを尊重し合い、全員で解決していこうという姿勢を大事にしていたRTは本当に居心地が良かった。

だが、ファイナルフォーラム直後は自分の出来の悪さに納得がいかず達成感より悔しさが勝っていたし、そう感じる自分の姿にもチームワークを全うする以前の「余裕のなさ」を感じざるを得なかった。反省点は多々ある。この気持ちを忘れず、新しく視野を広げてくれた環境RTのトピックと議論、協力してくれた方々に感謝して、今後止まることなく勉強をしていきたいと強く思う。そして、この環境 RT から次年度 RT をコーディネートさせてもらう機会を頂いた以上、環境RTのメンバーにも誇れるRTを作っていきたい。

メンバー全員に心から感謝すると共に、1 年間をこのRTに捧げ、最大限参加者に寄り添おうとしてくれたしょうちゃんと、Danielle には感謝の気持ちでいっぱいである。すべての瞬間を忘れたくない。既にRTが恋しいが、また次に会う時まで、怖れず何度でも挑戦を重ねて、自信を持って成長したと言える自分でいたい。

■分科会総括

3・11 の福島第一原発事故を受け、日本国民だけでなく、全世界の人々が今まで当たり前のように受け入れていたエネルギーに対して問題意識を持つようになった。もちろん、環境問題はエネルギー問題だけに留まらず多岐に渡る。放射能汚染、生態系異常、気候変動など数多くの問題が存在する中で、事前活動中に参加者はそれぞれが興味関心のあるテーマを共有し、知識を高め合った。

本会議では「太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギーが科学技術として確立されているという前提に立ち、にも拘らず何故『持続可能な社会』を達成できないのか」という主題を掲げ、果敢に議論に臨んだ。この分科会の参加者の専門が経済、医学、国際法といった具合に多分野にあったこともあり、それぞれの専門知識と視点を総動員させることにより活発な議論を展開することができた。また、会議中に環境問題を専門とする教授に直接質問させて頂く機会や、アメリカ有機農場で働かれている方々から遺伝子組み換え食物についての問題を教えて頂く機会などにも恵まれたことで、文献やインターネットで手に入る情報だけに依存せず、議論を進めることができた。分科会参加者の智慧を最大限に発揮し臨んだファイナルフォーラムでは全員が納得いく結論に達することができた。そして、会議を通じて得た最大の成果は現状に強い問題意識を持ち、その問題に真摯に向き合い、未来に向けて行動しようとする意志なのだと思っている。

事前活動でフィールドトリップを心よく受けて下さった竹本秀人氏、日本の最新鋭の技術と環境問題だけでなく、他の国際問題を知る機会を与えて下さりありがとうございました。また、本会議中に快く Skype で質問に答えて下さった Jacobson 教授、DeWit 教授、ありがとうございました。また、私と共に分科会を引っ張ってくれた Danielle Wilson と分科会トピックに正面から取り組んでくれた分科会メンバーにはとても感謝している。この分科会を応援して下さった全ての方々に心より御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。（杉岡昌太）

パーソナル／ナショナルアイデンティティ

Personal / National Identity

■分科会メンバー
八木澤龍大*
飯島千咲
ヴー・ホアン・ミン
西村優希
森田修弘
Kimberly Julien*
Katherine Jordan
Patrick Meuer
So Nakayama
Aiko Norita
（*は分科会コーディネーター）

■分科会概要

グローバル化が進み、多様な価値観を持つ人々が共に生活する今日の社会の中で、それぞれのアイデンティティを理解し合い、受け入れ合うことは、重要な課題となっている。移民の国であるアメリカでは、移民のアイデンティティは自らのルーツとアメリカとの間で、揺れ動く。第二次世界大戦中の日系２世は、日本人の両親を持ちながらアメリカで育ったことから、日本人とアメリカ人のアイデンティティの間で苦悩した。また日本では、アイヌや在日韓国・朝鮮人は、アイデンティティの危機に直面し、今なお社会的な差別に苦しんでいる。当分科会では、日米両国におけるアイデンティティの葛藤の事例を取り上げ、パーソナルアイデンティティとナショナルアイデンティティがどのように形成されるのかを調査し、考察する。そして、異なったアイデンティティを持つ他者の価値観を尊重し、社会の中で平和に共存していく道を模索していく。

■事前活動

・春合宿

春合宿での分科会活動は話し合いが中心であった。パーソナル／ナショナルアイデンティティという漠然としたトピックからどう議論を絞り込んでいくか模索することが主な話題だった。この分科会のメンバーはそれぞれ、完全に異なったバックグラウンドを持っていたため、まずそれがどのように自分のアイデンティティに影響を与えたのかを話し、お互いの人生経験を共有し合った。その後、アイデンティティの定義についての話し合いを行った。アイデンティティという言葉自体、元々日本語になかったものであり、この概念も見方を少し変えれば意味も変わってしまうため、アイデンティティの意義を考える時間も設けた。アイデンティティのトピックは他の分科会の話し合うトピックと違って決まった問題提起がないため、それを今後アメデリと共有できるように、春合宿中はお互いの知識と経験をできるだけ共有し合った。（ヴー・ホアン・ミン）

・朝鮮大学校フィールドトリップ
日時：6 月 14 日（土）
場所：朝鮮大学校
参加者：ヴー、西村、森田、八木澤

私達は在日朝鮮人のアイデンティティを学ぶため、朝鮮大学校を訪れた。学生に校内を案内してもらった後、2 つのグループに分かれてディスカッションをした。普段の生活の中で北朝鮮に対して一定のイメージを持つに十分な情報にはメディアを通して触れている。しかし、“在日朝鮮人”となると状況は大きく変わるということがわかった。学生によると、彼らの“母国語”は日本語であり、学校では意識して朝鮮語を使うようにしているという。雑談をしている分には同世代の若者であるが、政治や思想の話に踏み込んでみると、確かにお互いに納得のいかない部分が多い。しかし同時にメディアで報道されているほどお互いに敵対意識や排除意識はなかったように感じられた。そういった部分も含め、お互いにぶつかりあうことを覚悟しつつ、対話を重ねていくことが諸問題の解決に繋がるはずだと強く感じた。（森田修弘）

朝鮮大学校の学生達と

・ブラジル人学校フィールドトリップ
日時：6 月 14 日（土）～6 月 15 日（日）
場所：エスコラアクアレラ（ブラジル人学校）
参加者：ヴー、西村、森田、八木澤

私達は神奈川県厚木市にあるブラジル人学校を訪れた。ブラジル人学校に通う子供達はブラジル人コミュニティーと日本社会の狭間に閉じ込められてしまっている。それが彼らと一日接した後に感じたことだ。彼らは両親の意向もあり、そして排他的な日本社会の影響も受け、ブラジル人コミュニティー内の学校に通っている。しかし、政府の援助を受けることのできていない学校はお世辞にも設備が十分とは言えず、教師不足もあり、子供達はポルトガル語を流暢に話すという感じではない。しかし、日本語はもっと不自由である。これが原因で彼らは自分の考えや気持ち、感情を上手く表現できていないように感じた。自分を表現できないことにより、自分が何者であるのか、そのアイデンティティの確立に苦しんでいるように思えてならなかった。このような苦難の多い状況を解決するためにも、ブラジルないし日本の政府がしっかりとした支援体制を整えていくべきだと思う。（森田修弘）

・アムネスティ・インターナショナル日本 難民チーム 李秀香氏ご講演
日時：6 月 15 日（金）
場所：東京大学 本郷キャンパス
参加者：ヴー、西村、森田、八木澤

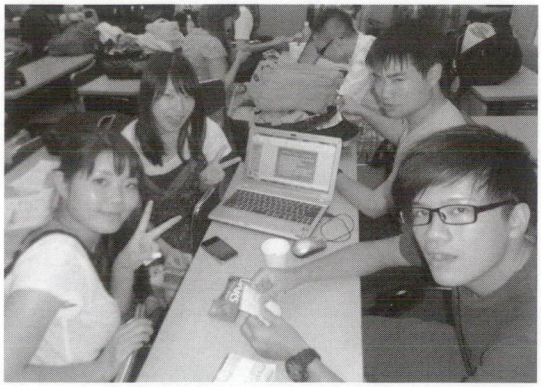
私達はアムネスティ・インターナショナル日本で難民のために働く李秀香氏からお話を伺った。日本での難民受け入れ体制の厳しさや、難民収容所の環境の悪さなどを学んだ。そのような状況の中で自分ひとりでは何も変えられない無力さを感じる事も多々あるとお話されていたのも印象的だ。
また、李氏は自身のアイデンティティを“韓国系日本人”であるとおっしゃっていた。日本で長い間生活し、日本語を話し、日本文化を十分に理解しているにも拘らず、社会やその制度では日本人として扱ってもらえないためだ。「アイデンティティがはっきりしないことの問題は？」と問うと、例えば外国でトラブルにあったとき、自分はどこから来たのかと聞かれてもうまく答えることができない宙ぶらりんな感じだとおっしゃっていた。考えの基盤や指針がはっきりせず不安だということであると考えられる。普段深く注目する機会の少ない日本社会の問題点について知る貴重な機会だった。（西村優希）

・直前合宿

本会議目前の直前合宿、私達パーソナル／ナショナ

ルアイデンティティ分科会では2日間をかけてこれまでの分科会活動やフィールドトリップ、アメリカ側の分科会メンバーとの合同スカイプミーティング、各自のRTペーパー等について振り返った。そして、これから迎える本会議で話し合いたいことをまとめたプレゼンテーションを作り、参加者全体に向けて英語で発表した。

また私にとって、諸事情で行けなかったフィールドトリップに関する情報を分科会メンバーから直接共有してもらう貴重な機会であった。同時に、このように分科会メンバー全員でそれまでの活動について改めて振り返ることができたのは、本会議を迎える前のステップとして必要不可欠なことであったと思う。また、英語を使ってプレゼンてーしょんをしたことで、本会議に対する心の準備にもなった。（飯島千咲）



直前合宿にて

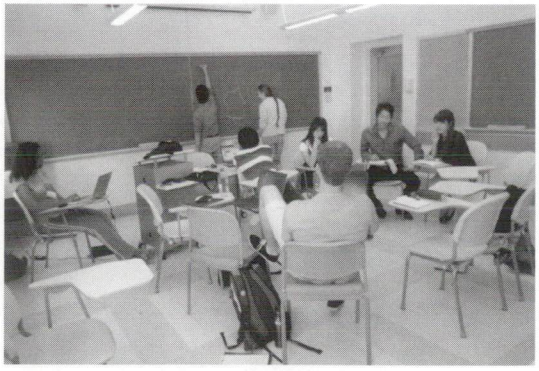
■本会議中の活動

・本会議議論内容

日本側は春合宿から、アメリカ側は本会議前の直前オリエンテーションからそれぞれアイデンティティに関してどのような議論をしたいのかを考えてきた。顔合わせとなった最初の分科会の時間では、事前に準備をしていた15分ほどのプレゼンテーションでお互いの立ち位置と方向性の確認を行った。渡米前に合同スカイプミーティングを行っていたおかげで、双方修正が必要な部分はなく順調に始まった。その後はRT内で2人1組になり、ペアのRTペーパーの内容を全体に紹介し、書いた本人を中心として質疑応答を行った。この作業を通して全員の興味がどこにあるのかを探った。そして、話し合いの末、アイデンティティの定義、話し合う意義、ケーススタディについて話し合いをし、同時に第64回参加者全体を対象としたアンケート調査を行うことになった。

【定義】

数時間に及ぶ議論の結果パーソナルアイデンティティの定義は“How an individual differentiates her/him-self”となった。主語を何にするか、“differentiate”と“distinguish”はどう違うのか、このように定義づけすることでアイデンティティの存在意義は何になるのか、など1つひとつの要素にとことんこだわった。この定義に基づいてアイデンティティを話し合う目的も導き出した。National identityの定義は“One binding set of values, social norms and customs that a group of people commonly believes in and which allows them to form a nation.”とし、これは独立時のアメリカや明治期の日本など具体的な事例から共通要素を抽出することによって定めた。



分科会での議論の様子

【アンケート】

定義を決定した後、私たちは日本人とアメリカ人の発想の違い、そして個々人の発想の違いを知りたいと考えJASCerを対象にアンケートを実施することにした。アンケートでは様々な場面を設定し、それぞれの場面で相手に自己紹介をするときに何を言うかを選択式で問い、さらに異なる場面で自分の外見のどこを重視するかを尋ねた。最大でも母数が71名という決して十分

ではないアンケートであったが、それでも多くの違いを見つけることができ、とても興味深いものであった。

【ケーススタディ】

定義づけが終了し、アンケートが完成した後にはケーススタディを行った。各人の興味に合わせて選定したトピックは二重国籍の是非、在日朝鮮人・韓国人のアイデンティティの問題、国家の安全保障とアイデンティティの関わり、難民とそのアイデンティティ、LGBTQA（同性愛者等）とアイデンティティなど、各人の興味に合わせて多岐にわたった。お互いに知識の足りない部分を補充し合うなど、議論の終わりには全員がそのトピックに関して自分なりの見解を持つことを目標として行った。

【全体を通して】

当初アイデンティティというテーマは漠然としすぎていて、議論は収集のつかないものになってしまうのでは、という不安を多くのメンバーが抱えていた。しかし、しっかりとお互いにコミュニケーションをとることで、概念的なものから具体的なものまでバランスよく話し合うことができ、実りのある議論をすることができた。（森田修弘）

・Dallas Holocaust Museum フィールドトリップ
日時：8月1日（水）
場所：Dallas Holocaust Museum
参加者：飯島、ヴー、西村、森田、八木澤

ダラスでは、全員でJ.F ケネディ元大統領が暗殺された場所に建てられた“Sixth Floor Museum”を見学した後、人権分科会、安全保障分科会と合同で、”Dallas Holocaust Museum”へフィールドトリップに行った。思えば、ドイツ、ポーランド含めヨーロッパへ行ったことのない私にとって、ホロコーストに関係する歴史博物館へ行ったのは初めてのことで、心の準備ができていなかったのかもしれない。ガラスの棚に飾られた、ユダヤ人の髪の毛で編まれたスリッパを目にしたときは、あまりのショックに何かを考えたり感じたりする前に自然に涙が流れ、吐き気まで襲ってきた。

もう二度と繰り返されてはいけない歴史を前にして、私たちの分科会のテーマであるナショナルアイデンティティの違いが与えうる影響、その健全な在り方を問うことの重要性を再確認した。（飯島千咲）

・Connie So 教授のご講演
日時：8月16日（木）
場所：ワシントン大学

アジア系の人々が多く居住しているシアトルで、私達アイデンティティ分科会は、ワシントン大学のConnie So 教授から、「アジア系アメリカ人」についてご講演いただいた。So 教授ご自身も香港系アメリカ人だったので、非常に内容の濃い講義を受けることができた。講義は2時間に渡り、110枚のスライドを通じて、教授はアジア系アメリカ人に対するステレオタイプの種類とその歴史を紹介してくださった。そして、その状況をどのように変えていけるかについて、アジア系アメリカ人の成功例などを挙げながら説明してくださった。アメリカの民俗学のステレオタイプの定義が今まで私の知っていた定義と異なっていることが、最も印象に残った。アメリカの民俗学での定義は、ネガティブな意味合いを持ち、事実ではないということが条件だった。（ヴー・ホアン・ミン）

Connie So 教授と

・ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムでは、実施したアンケート結果と共に、主にLGBTQA（性的少数派）及びナショナルアイデンティティについて発表した。LGBTQA に対する捉え方がアメリカと日本で異なり、日本の閉鎖的な部

分はアメリカに見習って改善すべきだという結論を発表した。また、ある集団の人々が異なる集団の人と出会うことにより、それまで認識されなかった集団のアイデンティティを認識するというナショナルアイデンティティ形成のプロセスをまとめた。最後に相互理解のための理想的な多文化教育について提案し、発表を終えた。

ファイナルフォーラムでは緊張しながらも自分自身も改めてアイデンティティについて考えさせられた。発表を聞いてくれた人々が、アイデンティティ認識のプロセスや人によって他者のアイデンティティの受け入れ方が違うことについて理解することで、偏見や紛争などの問題の理解につながればと思う。（西村優希）

ファイナルフォーラムでの発表

■日本側参加者感想文

・飯島千咲

私はパーソナル／ナショナルアイデンティティ分科会（以下、IDRT）に所属していたのだが、本会議中もっともっと議論できる時間があればと思ってしまうほど、毎回の分科会の時間は楽しくて密度が濃く、非常に有意義なものであった。

メンバーの 1 人ひとりが、相手の言っていることを最後まで聞き十分に理解しようとする聞き上手であり、その上で自分の持つ意見や考えを明確に伝えることができる話し上手であり、そして何より個性的なバックグラウンドを持っていたからこそ、「アイデンティティ」という非常に抽象的かつ繊細なトピックに対して、いつも活発な議論ができたのだろうと強く思う。

分科会の時間以外のちょっとした移動時間や自由時間も分科会単位で行動することが多かったため、メンバーとの思い出は数え切れないほどある。中でも最も想い出に残っているのは、第 1 開催地ダラスで大学の会議室で行った 3 回目の分科会の時間に、3 時間ノンストップで語り合い、自分たちなりの“パーソナルアイデンティティ”の定義を決めた時のことである。試行錯誤を繰り返し、メンバー全員が納得のいく定義が生まれたあの瞬間に感じた達成感や一体感、そして一気にやってきた安堵感と疲労感は、きっとこの先ずっと忘れないだろう。I love you IDRT!!（飯島千咲）

・ヴー・ホアン・ミン

分科会全体を通して最も大変だったことは、メンバー全員が共有できる話題をまとめていくことであった。アイデンティティという広い漠然としたトピックから何に焦点をあてるのか、本会議前も本会議中も互いに関心のあるトピックを共有しながら議論を進めていった。最終的には話し合った内容を踏まえて、自分たちが考えるパーソナルアイデンティティとナショナルアイデンティティを定義し、第 64 回 JASC 参加者全員にアイデンティティに関するアンケートを行った。アンケートの結果から、人は異なった状況下では異なったアイデンティティを選択し演じること、そして同じ状況下でもアメリカ人と日本人の間で違うアイデンティティの意識を持つことが分かった。ファイナルフォーラムでは、パーソナルアイデンティティとナショナルアイデンティティの定義の紹介と説明、そしてアンケート結果を発表した。全体として、もちろん知識も必要だったが、他の分科会と比べて発想力や想像力を必要とする抽象的な話し合いが多かったと個人的に感じ、議論を終えてとても充実感を感じている。

・西村優希

日米学生会議で分科会の活動が始まってから、アイデンティティについて考える意味とは何だろうとずっと考えていた。目に見えない抽象的で漠然とした“アイデンティティ”が、私達の日常生活やあるいは社会の中でどのような役割を果たし影響しているのか。分かったこととして、自身のアイデンティティを確立することは、考え方や行動の基盤や指針となり、またそ

れが他者を理解する方法に影響を与え、それが自尊心を築くプロセスや様々な問題の根本にあるのではないかということだ。

分科会では主に在日朝鮮人、日系ブラジル人、日系アメリカ人、さらに移民1世・2世・3世の違いなど、2ヵ国にまたがるアイデンティティ持つ人々の問題について扱った。実際にアメリカに行って感じたのは、アメリカでは様々な民族や異なる背景を持つ人々がいるが、彼らは”アメリカ人”としてのアイデンティティを共通して持っているということだ。アメリカ側参加者の1人とUC Berkeleyで会話したことを今でも鮮明に覚えている。“There are a lot of Asian students here.” “But who do you think is an American? All the people coming from Europe, Asia, anywhere are considered to be Americans.”アメリカという国はアイデンティティという側面においても非常に多様で、学ぶべきところが多いと感じた。

・森田修弘

いきなり個人的な話から入るが、私はいわゆる帰国子女である。それゆえ日本に帰国してからアイデンティティというものを考える機会が、他の日本人よりも多かったように思える。日本人らしいとは何なのか、逆に日本人らしくないとは何なのか、このような疑問を私はいつも考えてきた。この分科会には帰国子女に限らず様々なバックグラウンドを持ち、同時にアイデンティティに関心を持っている人間が集まっていた。それこそ、本会議のテーマにあるように「衝突と理解」によってこの分科会は動いていた。それぞれがもっていたステレオタイプや考えが衝突し、それを土台に議論をすることで最終的に理解につながる、これほど楽しい議論はなかなかない。一行の定義を決めるのに3時間かけることも厭わない、決して妥協を許さない10人のメンバーで、1ヵ月に渡ってアイデンティティについて話し合うことができた。私は分科会の活動から、大きな達成感と今後の自信を得ることができた。9人の最高の仲間たちにこの場を借りて改めて感謝をしたい。

■分科会総括

当分科会は、「異なるアイデンティティを持つ他者との平和共存」をテーマとして掲げ発足した。当分科会の参加者の多くは、留学経験者、帰国子女、日米以外の国家の出身者を含む多様なバックグラウンドを持ち、自らアイデンティティに悩んだ経験を持つ学生である。参加者は、朝鮮大学校やブラジル人学校訪問、難民問題の講演などを含む事前学習や本会議での議論を通じ、経験と知識を併せ持つ人材に大きく成長できたと思う。

本会議では、在日朝鮮人、日系アメリカ人、難民、性的マイノリティについての議論を通じて、日米社会で生きるマイノリティやそのアイデンティティについて理解を深め、社会に潜む問題点を考察した。また、パーソナルアイデンティティ、ナショナルアイデンティティを再定義し、JASC参加者全員にアンケート調査を実施するなど、様々な試みに挑戦した。参加者はそれぞれの経験と学習に裏打ちされた強い意見を持つために、時には衝突した。しかし参加者は、思いやりと活気に満ちた粘り強い議論の中で、お互いの意見を理解し合い、最終的に衝突は理解へと変わった。分科会の中で、異なるアイデンティティを持つ者同士が互いに尊重し合い共存する環境作りを体現したように思える。

アイデンティティに関わる問題は見えにくい。特にほぼ単一民族で構成される日本国民にとって、「アイデンティティ」に関する問題は意識しづらい。だが、深くアイデンティティを考え抜いた当分科会の参加者には、アイデンティティに関わる問題意識を発信し続け、異なるアイデンティティを持つ他者との平和共存を模索し続けてほしい。

最後に、朝鮮大学校の皆様、エスコラアクアレラの皆様、アムネスティ・インターナショナル日本の李秀香様、ワシントン大学のConnie So教授をはじめ、当分科会にご協力いただきました全ての方々に心より御礼申し上げます。（八木澤龍大）

Madison Governor’s Mansion にて

災害復興と社会の再構築

Post-Crisis Reconstruction

■分科会メンバー
杉山和*
野地洋平
野口ゆかり
廣野允威
渡部寛史
Andrew Leistensnider*
Mari Kobayashi
Shintaro Kono
Manabu Taketani
(*は分科会コーディネーター)

■分科会概要

未曾有の大災害となった東日本大震災からの復興は、単なる復旧にとどまることなく、被災地を活力ある地域として再生させるとともに、日本社会の再生に資するものでなければならない。そのため内向きにならずに、自由貿易協定（FTA）の締結や環太平洋経済連携協定（TPP）の参加により市場を開放し、新興国の成長を被災地域の産業活性化や日本経済の再生に取り込むべきとの動きもあるが、異論も根強い。若年人口が流出してしまったこと、被災地域に自力で復興する財力が欠如していた点など、ハリケーンカトリーナに見舞われたルイジアナ州ニューオーリンズは東北地方との共通点が多く、復興に取り組む上での教訓が得られる。復興は被災前から懸案であった課題を解決する好機ともなる。当分科会では、国内外の災害復興を取り上げ、ケーススタディを重ねることにより、復興が創造的に社会の再構築を成し遂げる方法を模索する。また、災害復興のプロセスを分類し、各段階において必要とされる取り組みや政策を考える。

■事前活動

・春合宿

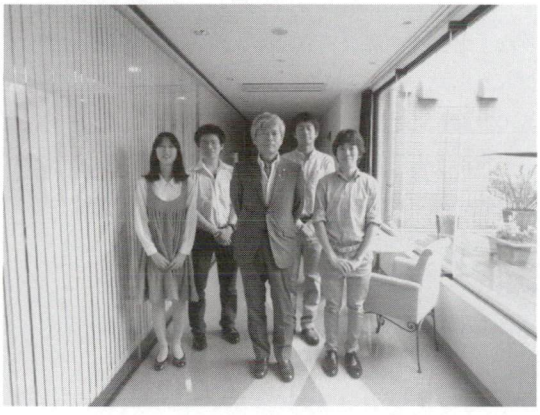
本会議を終え、春合宿を振り返ってみると、春合宿中分科会メンバーで話し合ったことが無駄では無かったと思える。復興が点ではなくプロセスであり、復旧との区別が必要とされることや、多くのケーススタディに取り組むことなど、重要な観点を得ることができた。まだまだぎこちなかった 5 人が、徐々に打ち解け、復興について考えた熱い 2 泊 3 日だった。まずそれぞれの興味分野や専門分野を共有し、復興に対してどのようなアプローチをするかを話し合った。その後、復興と復旧について考えた。実際に、戦後の広島や阪神淡路大震災、東日本大震災などのケースを使って、復興のプロセスを表やグラフを使って議論した。最終日の発表では、本会議までどのようなフィールドトリップ、ケーススタディを行うかを発表した（野地洋平）

・北原国際病院 フィールドトリップ
日時：7 月 7 日（土）
場所：北原国際病院
参加者：杉山、野口、野地、廣野、渡部

分科会はじめてのフィールドトリップとして伺ったのは、日米学生会議の OB でもあり、医療社団法人 KNI の理事長として東日本大震災において復興に向けて様々な支援を行なっていらっしゃる北原茂美先生である。

北原先生には多くのことをご教授いただいたが、その中で、復興においては現地の現状を「正しく」判断する力が必要であり、そのためには様々な分野の知識や正しい情報をいかに集められるかが重要だということを教わった。東北だけでなく海外でのプロジェクトなどを例にとって説明をいただくことで、現状を「正しく」理解することやその難しさ、そして具体的に「正しい」現状理解を行う方法を非常にわかりやすく理解することができた。このフィールドトリップを通じて、自分たちが考える復興というものの最も根本的な部分の基礎を作ることが出来たと思う。

お忙しい中、我々のために時間を割いてくださった北原先生に改めて感謝したいと思う。（渡部寛史）



北原茂美先生と

・田嶋要事務所 フィールドトリップ
日時：7 月 8 日（日）
場所：田嶋要事務所
参加者：市毛（企業分科会）、杉山、野口、廣野、渡部

原子力災害現地対策本部長として福島で 3 か月の駐在任務を果たすなど、今回の震災に際して精力的に活動している田嶋要氏を訪問した。主に雇用創出と日本のエネルギー戦略に関してお話を伺った。前者に関しては、当座産業としての除染事業など「マイナスを 0 に戻す雇用」、グリーンイノベーションを通した新産業など「0 をプラスに転じる雇用」という 2 段階方式が望ましいということを指摘された。後者に関しては日本の技術力を生かして今後の日本はエネルギーの一極集中から地産地消へのモデルチェンジを果たし、環境面で各国に多大な影響力を持つ「世界一の環境先進国」を目指す展望を語られた。最後に雇用創出と環境政策を同時並行で進めていき、シナジー効果を生み出す必要性を語られた。政策の最前線に立つ方から示唆に富むお話を聞けて大変有意義であった。（廣野允威）

田嶋要氏と

・福島県立医科大学 フィールドトリップ
日時：7 月 14 日（土）
場所：福島県立医科大学
参加者：野地

福島県立医大へのフィールドトリップの主な目的は、震災後医師だけでなく、研修医や医学部生が、どのような活動をしていたかを伺う事であった。震災対応で活躍された大谷先生をはじめ、広報担当の松井先生、3 名の研修医、医学生の方々のご協力を頂き、3 時間以上に及ぶ熱い議論ができた。震災という非日常性ゆえに、スケジュール管理の難しさや学生に対する世話人の必要性、また医学生の看護に関する技術が十分でなかった等が課題として挙げられる。原発に関しては、メディアや情報の非対称性などのバイアスにいかに対応し、住民に正確な情報提供ができるかが、今後の鍵となるだろう。また福島県と医大が実施する「県民健康管理調査」が、福島県を日本一健康な県にする可能性を秘

めている点も興味深い。災害が、今ある問題の解決を我々に迫り、それに着手できる機会であることを学ぶ事ができた。ご協力頂いた皆様、本当にありがとうございました。(野地洋平)

・長野県 フィールドトリップ
日時：7月21（土）22日（日）
場所：長野県上高井郡小布施町・長野県下水内郡栄村
参加者：杉山、野地、廣野、渡部

復興における町づくりを学ぶために、独自の町づくりで有名な小布施町と東日本大震災の翌日に震度６の地震に見舞われ、現在復興に向けた町づくりを行っている栄村を訪れた。

小布施町では、小布施町町役場行政経営部門交流グループの宮崎氏、佐藤氏からこれまでの町づくりに関して講義をしていただいた。町の独自性をどのように発見し伸ばしていくか、そしてそうした活動を住民を巻き込んで行う大切さとその方法を学ばせていただいた。
さらには株式会社形式で町の経済や文化の発展を担う㈱ア・ラ小布施代表の関氏にもお話を伺い、市民としての町づくりへの関わり方を教えていただいた。
栄村では、栄村の住民間、さらには栄村と都市をつなぐ学びのネットワーク構成に尽力され、地震後には村の復興とさらなる発展を目指し活動していらっしゃるNPO法人栄村ネットワーク代表松尾氏にお話を伺い、その後実際に被災した現場を案内してもらった。震災復興において、政府が規定する「復旧」と現地でのニーズのずれを強く感じ、さらには農村部での復興の在り方というものも学ばせていただいた。

このフィールドトリップを通して、復興において重要な「いかにして町をつくるか」ということが学べたと思う。(渡部寛史)

小布施町役場にて

直前合宿

直前合宿の最後に行ったプレゼンテーションでは春合宿から直前合宿になるまでの２ヶ月間で訪問したフィールドトリップや定例スカイプミーティングで議論した内容についてまとめたものを発表しました。政治家の東日本大震災に対する復興ビジョン、医者の東日本大震災に対する復興の取り組み、町民主体の街づくりなどと様々の異なる立場の人からお話を聞くことができたフィールドトリップの学習内容を一つにまとめるのは難しいことでした。本会議では、日本で学んだことを活かしながら、アメリカ側と時間をかけて、まず復興とはどのような状態を指すのかを定義付けることで一致しました。(野口ゆかり)

本会議での活動

・本会議の流れ

災害復興と社会の再構築(英名：Post-crisis reconstruction)の議論を始めるにあたって、私たちが最初に直面した難題、そして最終サイトまで頭を悩ませたのは、“Reconstruction”という言葉をどう定義するかでした。そこで、人によってとらえ方が千差万別なこの言葉の含意を探るために私たちは最初の開催地ダラスにおいて、まず各々が事前に執筆したRTペーパーの内容を吟味し合うことから始めました。具体的にはRT内で２人１組のペアを作り、お互いのRTペーパーを熟読したうえで皆の前で発表するという形式をとりました。これにより各自が考えている復興の「かた

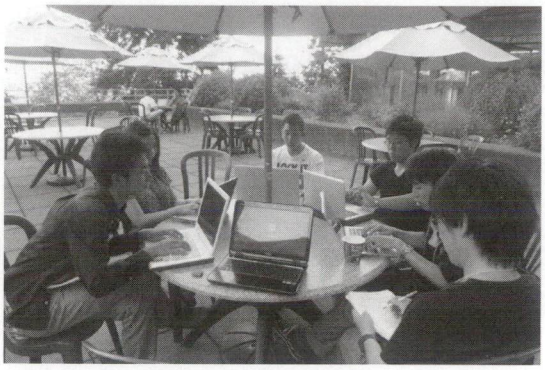
ち」というものが明らかになりました。教育と雇用創出の観点から復興を捉える者、常時と非常時のリーダーの在り方の違いから復興を捉える者、娯楽が被災者に与える心理効果から復興を捉える者など興味深い視点を持つメンバーの考えを共有することによって、その後の議論の幅を広げることができたと思います。またFederal Emergency Management Agency（FEMA）という米国の災害復興を担当する政府組織の方から、その組織の概要やハリケーンカトリーナ罹災時の対応などについて詳しくお話を伺いました。第２開催地マディソンでは前回の議論を踏まえたうえで復興に関する共通の認識を浮き彫りにするべくブレインストーミングを始めました。この議論の過程で後の最終プレゼンテーションに生きてくる「緊急対応・復旧・復興のフェイズ分け」、「マイナスからゼロ、ゼロからプラスへ」といったアイディアの萌芽がみられました。（廣野允威）

バークレーでは、復興における時間軸に注目した。まず、災害発生から日常の生活へと戻り、そこからさらによりよい未来へと変わっていくプロセスに注目した。復興においては、この過程が大切であり、これらの段階の移り変わりは互いに重なりあっていることも注目すべき点であるとした。

これらの考えに幅を持たせるために、国内外を問わずにケーススタディを重ねることになり、メンバーそれぞれが自分の担当のケースを調べ、シェアを行った。この際、インフラ・仮設住宅・時間経過・経済・コミュニティーに特に注目して調べた。

サンフランシスコでは、バークレーから続けてきたケーススタディを続けつつ、以前話し合った時間の経過について、分かりやすい形でグラフにまとめた。そこでは、復興の過程を Emergency, Restoration, Reconstruction 1, Reconstruction 2 と定義した。この過程の中でより重要な部分は後半の２つであるとし、この２つの部分を構成する要素の中で重要だと思うものを選び出した。その結果、メンタルケア・コミュニティー・リーダーシップ・コミュニケーション（情報共有）・国際的な支援・教育・経済と産業が挙げられた。これら一つ一つに関してさらに詳しく議論を重ね、復興にどのような影響を与えるか考えた。

シアトルでは、復興の構成要素をさらに整理した。メンタルケア・コミュニティー・教育・経済・コミュニケーション・リーダシップの６つが重要なものとして選ばれ、各々の関係をわかりやすくグラフにまとめた。さらに、この６つの中で特に説明をしたい２つを選び出して、ファイナルフォーラムで説明を行うことになった。（渡部寛史）



ディスカッションの様子

・ファイナルフォーラム

私が所属していた「災害復興と社会の再構築」分科会は、本会議中に世界中で起きた災害のケーススタディをした上で、議論をしたので、その内容をまとめあげて、プレゼンテーションを行いました。ニコニコ動画に生中継していただき緊張している中で、自分の発表するパートをしっかりプレゼンテーションすることができた喜び以上に、私は長い間一緒にフィールドトリップに行き、さらに熱い議論を交わした仲間と一緒にこのプレゼンテーションを行えたことが誇らしかったです。発表当日は、ある分科会メンバーが練習のときより長い時間をかけてしまったり、不慣れな英語での台詞が飛んでしまったりと少々ハプニングがあり、もしかしたら“完璧”なプレゼンテーションではなかったかもしれません。でも夜遅くまで何度も発表練習をし、発表を見ていた人は分からないであろう、小さなミスであっても、プレゼンテーションが終わったあとに悔しくて泣いてしまうくらい一生懸命取り組んだ発表であったことには変わりはないはずです。反省点もあるが、とても印象的な発表を行うことができたと思います。（野口ゆかり）

■日本側参加者感想文

・野口ゆかり

私たちの分科会は、日本での活動はとても順調でした。たくさんのフィールドトリップに行く機会に恵まれ、定例スカイプミーティングも週 1 回のペースで開催することができ、分科会に所属している各メンバーが人の話を聞き、自分の意見もちゃんと言えているようでした。

しかし、アメリカに行き状況は一変しました。日本ではあんなに活き活きと議論をしていたメンバーが英語という壁にぶつけり、意見を上手く述べることができなくなってしまったり、長期間の集団生活で日本では見えていなかったメンバーの素顔もだんだんと見えてきたりして衝突しました。分科会全体が抱える問題、そして私が個人的に感じていたプレッシャーをどのようにして解決していけばいいのか分からず、かなりフラストレーションが溜まり分科会に行くのが少し嫌だと思う時期もありました。お陰様で肌ももものすごく荒れました。深刻な問題を解決するにはすぐに自分から行動に移さないといけないと思い、焦りとフラストレーションから他人に注意するときにかなりきつい言葉を浴びせてしてしまった日もありました。時間が少し経ってから振り返ってみると、この分科会は本当にたくさんの問題があったと思います。解決するには時間もかかったし、もしかしたら不器用な方法での解決だったかもしれないけれども、みんなで衝突し、支えあいながら過ごした時間は忘れられないものとなりました。分科会のメンバーには感謝の意を述べたいと思います。

・野地洋平

春合宿からスタートした復興 RT の活動は、私にとって JASC そのものというよりも、それ以上の価値を持っていると思う。今考えてみると、「災害復興と社会の再構築」というテーマはタイムリーであらゆる分野の知識が必要とされる分科会だった。

本会議前には、復興に関するフィールドトリップを数多く行うことができた。これは、本会議で議論する前に、できるだけ沢山の人に会ってお話を伺い、私たちの視野を広げるためであった。分科会を通して感じたことは、人と会って話すことがいかに重要であるかということである。新聞や本、Web 上で得られる知識が十分ではないということは、人間はそれほど簡単に大事なことは話さないという特性で説明できると思う。実際の対談であれば、話の流れが飛んだり、あまり関係のない話題になったりする。それ自体が議論を深め、新しいアイディアを生み出す土壌になるのだと感じた。復興に関して言えば、教科書を読んで答えが出るようなテーマでない以上、上記のメリットがより活かせたと思う。

・廣野允威

「災害復興と社会の再構築」は他の分科会と比べて特殊な分科会だった。というのもメンバー全員に日本人の血が流れている分科会だったのである。当初は純粋な欧米人のいないこの分科会は意見が日本人寄りに偏ってしまうのではないかと心配していたが、杞憂に過ぎなかった。各自が多様で刺激的なアイディアを持っていて、議論を戦わせることも厭わず、それでいて RT の運営が調和をもってなされるように各自が RT 内での役割を認識し、それに徹することができる、とてもバランスの良いチームだったと思う。後半には大きなトラブルにも見舞われたが、全員がその問題に対して真摯に向き合い、問題解決に向かって一丸となって動いたことに私は大きな誇りを抱いている。2011 年を表す漢字ではないが、確かに私たちのチームには「絆」が存在したと思う。この絆は数多くの優秀な人たちと出会い、喧々諤々の議論をしたという経験に並ぶ私の貴重な財産である。願わくば、JASC を通して結ぶことが出来た縁を今後も大切にし、将来のさらなる飛躍へとつなげていきたい。

マディソン散策中の様子

・渡部寛史

本会議を終えてみて、このRTはたくさんの困難にぶつかってきたと思う。

復興という現在最もホットなトピックを扱う重圧を感じることもあったし、専門的な知識に乏しい自分たちのような学生が約１か月議論をするだけで、何かまとまった結論が出るのかという不安もあった。全RTの中で、最も日本人のアメデリが多い分科会でもあり、純粋なアメリカ人は１人だけという状況の中で、本当に日米両国として復興を考えられているのか疑問に思ったこともあった。伝えたいことがあるのに、言語の壁に阻まれ、悔しい想いをしたこともあった。意見が合わなくて、個人が激しく対立したこともあった。

振り返ってみれば、たった１か月とは思えないほど多くの困難にぶつかっていた。しかし、分科会のメンバーそれぞれが自分の困難から逃げず、復興というテーマに真摯に向き合ってきた。どんな困難もみんなで協力し、問題を解決してきた。

そうした姿勢が、議論自体を有意義なものにしていったと思う。いろんなバックグラウンドと専攻をもつメンバーが、自分の出せるものすべてを出して考えた結論は、たとえ立派なものでなくても、今の自分たちが考えられるベストなものになったと思う。

将来、医師として何らかの形で復興に関わりたいと考えている自分としては、この約１ヵ月の間、いろんな分野のメンバーと共に復興について真剣に考えられたことは非常によい経験となった。復興には様々な要素が含まれており、そうした中で自分の専門を生かし、よりよい復興を行うにはどうすればよいのか等、こうした環境でなければ気付けないことにたくさん気付くことができた。

こうした素晴らしい経験を与えてくれたRTメンバー全員に感謝したいと思う。そして、これから、この学びを活かし。進み続けたいと思う。

マディソンにて

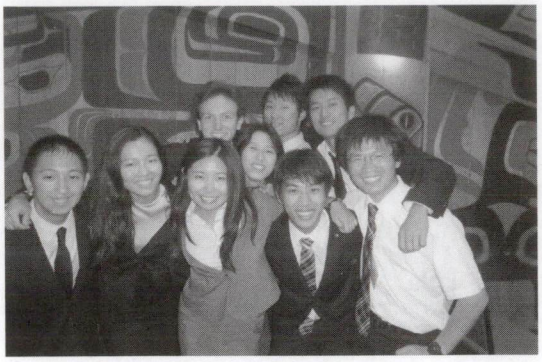
■分科会総括

昨年開催された第63回会議では７つの分科会に加え、東日本大震災の後に震災復興分科会が特設されたが、第64回日米学生会議では「災害復興と社会の再構築」の分科会が７分科会の一つとして設置された。そのため、事前準備活動から、衆議院議員や医療関係者、また第62回会議で地域再生分科会に所属していたJASCOBにも協力をいただき情報収集やフィールドトリップの計画を行っていった。しかし、本会議においては一ヵ月という短い期間で導きだせる結論は、学者や専門家によってすでに提言された

復興プランには到底及ばないと考えたため、分科会として新たに提言を出すことにこだわらず、学生の立場でもできるボランティア活動、これまでの災害で復興を成し遂げた被災地のケーススタディが議論の中心となっていった。話題性のある分科会ではあったものの、ケーススタディから得られる復興成功の共通項は限られていたが、「心理的な復興」に着目し、被災者の心理的なケアの重要性を共通項の一つとして挙げた。また、災害直後は決断力のあるリーダー、長期的な復興過程では住民の意見を汲み取れるリーダーの存在が、災害から効果的に復興するために必要であると考えた。メンバーは多様な専門性を持ち興味の範囲も幅広かったため、レジャー、防災教育、医療等、災害復興と結

びつく可能性のある分野についても多角的に議論することができ、分科会全体として知識を高め合うことができた。

最後に、分科会にご協力くださった全ての方々に感謝の気持ちを表して、分科会総括とさせていただきます。多大なるご支援とご協力、誠にありがとうございました。(杉山和)



ファイナルディナーにて

人権問題と我々の責務分科会

Human Rights and Our Responsibility

■分科会メンバー
川邊拓也*
片山恵里
キム・ヘジン
中野舜一郎
中道洋司
Rachel Horton*
Kei Aizawa
Jonathan Geider
Madison Mears
Ariel Stenger
（*は分科会コーディネーター）

■分科会概要

21 世紀を迎えた今日、人権という概念は急速に世界に広まった。基本的人権は、国籍、年齢、性別、人種、宗教、言語や地位に拘らず、全ての人々が有する権利である。

グローバル化は、人々に経済的豊かさをもたらした一方で、貧富の差を拡大させ、新たな人権問題を生み出した。実際、日米におけるホームレスや若年失業者は増加しており、彼らへの自立支援や人権保護が両国にとって新たな重要課題となっている。また、2000 年に採択されたミレニアム開発目標は、目標の 1 つとして「極度の貧困と飢餓の撲滅」を掲げているが、いまだ世界人口の 6 分の 1 が 1 日 1 ドル未満で生活している。

当分科会では、極度の貧困問題、紛争時に見られる民族浄化、奴隷制度や強制労働、拉致問題、同性愛者に対する差別など、様々な人権問題を取り上げ、基本的人権とは何かを再考する。そして未来へ向けて、政府やNPO、一般市民である私たちに何ができるのかを模索する。

■事前活動

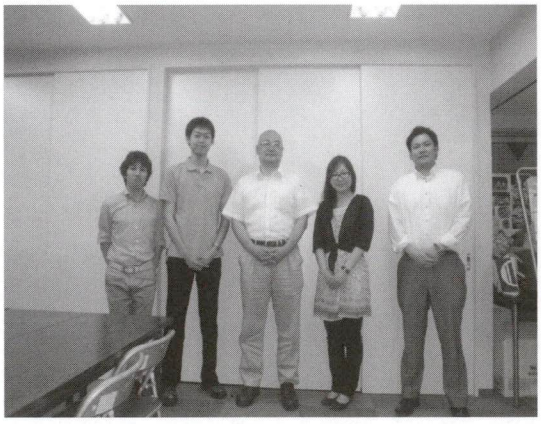
・春合宿

初めての顔合わせの緊張感の中、まず「人権」という漠然とした概念を明確にするために「人権の定義とは」「他人の人権を守る必要はあるか」といった根本的な話題を扱った。既に互いの価値観が現れたため非常に興味深く、相互理解が進むものとなった。その後お互いの興味をシェアする中で、貧困者への社会保障、人道的介入、移民、中絶などの興味が挙がった。これらの問題について週 1 回のスカイプミィーティングを通して勉強していくこととなった。また、KONY2012 という少年兵の問題を解決すべく行われたアメリカの草の根的活動についての動画を観て、人権問題を広めるためのメディアの利用の仕方や個人としてどのようなアクションが出来るのかということについて話合った。国際関係や国際法が専門のメンバーもおり、専門が全く人権と関係の無い私は初め気が引けていたが、自分の専門から見た視点が議論を深めることを感じることができた。（片山恵里）

・福島慎吾様フィールドトリップ
日時：7 月 7 日(土)
参加者：片山、川邊、中道

出生前診断技術の発達と共に障害児の中絶が増えている現状を知り、障害者やそれを支える社会制度について学ぶためにお邪魔させていただいた。現在の社会に山積する教育や医療、雇用などの課題を知り、毎日困難に直面しながら生活している障害児やその両親が抱える問題を学ぶ機会を持つべきだと感じた。

アメリカに実際行き、日本では障害者を特別視し、社会における役割までも奪ってしまっていると感じた。そして、より共存的な社会を作ることが日本にも出来るのではないかと感じた。その為には小さい頃から障害のある子と一緒に教育を受け、障害を一つの個性として認識することが必要であり、そのことで障害者への偏見の無い社会が作られていくのではと思う。(片山恵里)



福島慎吾様とともに

・朝鮮大学校フィールドトリップ
日時：7 月 14 日(土)
場所：朝鮮大学校
参加者：片山、川邊、中野、中道

このフィールドトリップでは在日朝鮮人の現状について深く理解することができました。訪れてまず、教室の上に金日成主席・金正日総書記の肖像画がかかっていたり、生徒同士が朝鮮語で話していたり、女子生徒がチマチョゴリを制服として着ていたりしたことに驚き、まるで北朝鮮に来たかのような錯覚を受けましたが、一方で図書館には日本やアメリカの本や雑誌もありました。人権の観点からは、参政権について「同胞が内部分裂しないためにも強く希求することは必要ない」という学生が多かったことが印象的でした。
また、北朝鮮国籍というだけで、韓国籍と比べても他にも様々な権利の制限を受けていることに関しては、画一的制度だと批判の余地がある一方で、あくまで在日朝鮮人として生きていこうとする彼らに対し日本国籍保有者とまったく同じだけの権利を認めるというわけにもいかないため、アイデンティティとも絡む難しい問題があることを改めて認識することができました。
(中野舜一郎)

朝鮮大学校の学生とともに

・アムネスティ・インターナショナル日本 難民チーム フィールドトリップ
日時：7 月 15 日(日)
場所：東京大学 本郷キャンパス
参加者：片山、キム、川邊、中野、中道

アムネスティ難民チームの李秀香（イ・スヒャン）さんの話を聞いて考えさせられたのは「移民と難民」の違いだった。移民と難民の区別は明確ではなく、国家や団体により定義は様々である。また、移民者として来たが母国の政治情勢が不安定になったため難民となった場合や難民として来たが移民扱いになった場合などもあり、「難民問題は私が考えたより多くの課題を抱えているのでは」と思った。

また、日本の難民認定及び状況改善も一つの課題で

あろう。李さんの資料によるとアメリカは難民認定比率が64%であるが日本はわずか2%である。他の先進国はアメリカほどではないが20%前後であることを鑑みると、日本は難民認定において非常に辛いことが分かる。国内制度や難民に対する正しい認識が確立されていない状態で難民を受け入れるのは社会問題につながり得るが、日本は現在「難民」に対しどのような立場なのか、今後どう対応すべきか考え直す必要があるだろう。(キム・ヘジン)

アムネスティ・インターナショナル日本
難民チーム 李秀香氏とともに

・直前合宿

春合宿から直前合宿に至るまでの活動について、振り返りを行った。特に、毎週欠かさずに行ったスカイプでのミーティングを踏まえ、それぞれの人権に関わる問題意識について確認を行った。また、アメリカ側も含めたRTペーパーを再び読み直し、アメリカ側参加学生の興味関心について確認した。以上を踏まえ、アメリカにおいて、人権に絡めてどのような議論をすることができるのか考えた。同時に、RT同士での発表では、本会議でどのようなRTにしていくのかを発表した。これらの活動は、本会議への士気を高める絶好の機会となった。(中道洋司)

■本会議中の活動

・第1サイト：ダラス

アメデリと初めて会い、お互いの興味をシェアした。日本での議論では「そもそもこの人権問題に介入する必要があるのか」などと人権問題解決自体に懐疑的意見が挙がることもあったが、アメリカ側参加者は皆、“It's a definitely human rights' violation!!!”と熱いパッションを持ち、介入に対し意欲的な意見が多く、その意識の差に驚いた。

最初は全くアメリカ人の英語が全く分からず悔しい思いをしたが、自分が分からないということを、恥ずかしさを押し殺し伝え続け、易しい英語を使ってもらうことでお互いが歩み寄ることが出来た。皆がきちんと参加出来る議論の基盤を作ることができた。初対面にも関わらず一気に距離を縮め、絆を強めたテキサスの日々であった。(片山恵里)

・Dallas Holocaust Museum フィールドトリップ
日時：8月1日（水）

人権を考えるうえで、第二次世界大戦におけるユダヤ人の悲劇を忘れることはできない。ダラスの中心部に位置するHolocaust Museum。ここでは、「悲劇」の歴史的経緯を、写真や遺品を通して展示している。将来を担う私たちが、引き起こしてはならない歴史事実として、改めて確認させられたフィールドトリップであった。学生寮に戻り、あるアメデリにホロコーストについてアメリカが関心を寄せる理由について話し合った。その中で彼は、政治的・歴史的理由があることを踏まえつつも、「アメリカは正義を重んじる国であるから、人類史上の不正義を忘れないために展示しているのでは」と私に言った。アメリカが人権に対して、なぜ力強く擁護しているのか、という理由の一端を見つけた気がした。(中道洋司)

Dallas Holocaust Museum

議論の様子

・第２サイト：マディソン

数少ないRTの時間の中で取り組んだものが、人権とは何か、という私たちなりの定義を確立することであった。メンバーはさまざまな背景を持っているため、多様な意見が出され、「こういう視点があるのか」と新たな気づきの連続であった。そんな中で、私たちにとっての人権とは、「あまねく人々が受けることができる、・・・」とした。それぞれの価値観や知識を踏まえたうえで、すりあわせて行うことができた。マディソン滞在最終日、大学の小さな教室で、定義を決定したときの達成感とみんなの笑顔と一体感を今も鮮明に覚えている。（中道洋司）

・第３サイト：バークレー／サンフランシスコ

カリフォルニアでは、ファイナルフォーラムで扱うトピックを選定することに多くの時間を割きました。議論の前半では、発表の枠組として、「過去と現在の状況を比較する」「人権問題に取り組んでいる団体に注目する」ということを決め、後半で具体的なテーマを選びました。最終的に選ばれたテーマは、「性的搾取を目的とした女性の人身売買」でした。検討段階では他にも「戦時下における文民の権利」「イスラム教女性の権利」「人種差別」などの意見が出ましたが、「人身売買」が選ばれた理由は、人身売買は日米で現在行われており、人間の一番基本的な人権を侵害するものであるにも拘らず、認知度が低いことを問題視する意見が多かったためです。（中野舜一郎）

・第４サイト：シアトル

シアトルでの作業はファイナルフォーラムのための準備そのものだった。聴衆に何を伝えたいかを考え、その中で我々が今まで議論した内容をどのように効果的に伝えられるかを工夫した。人権とは何か、我々の責務とは何か、どうして人権を守らなければならないのかといった根本的な話題を「人身売買」といった事例を使って議論を更に進めた。ファイナルフォーラムはプレッシャーでもあったが、発表するために議論をするのではなく、十分に成熟した議論を行い、その結論を発表したいという思いがあった。そして発表データ作成にも一歩ずつ取り組み、最終的にはみんなの意見をまとめることができたと思う。また、映像と折り紙を作ることで作業量が多かったが、みんなで協力した大切な思い出もある。（キム・ヘジン）

・ファイナルフォーラム

人権分科会は「アメリカと日本における人身売買」をテーマに、人身売買問題を解決しなければならない理由、それと関連する我々の責務、そして学生としてできることに関して発表を行った。講義形式にならないよう人身売買の歴史や現状は映像を作って伝え、人身売買解決に関わっている団体のFacebookアドレスを書いた折り紙をみんなに配った。小さいことだけれど大きな変化は小さいことから、今の自分にできることを１つずつやりこなすことから始まるというメッセージを込めたものだった。

3週間にかけて行った議論の内容を15分といった限られた時間内に伝える作業は簡単ではなかった。しかしファイナルフォーラムを準備しながら今までの議論を振り返って考え、自分の中で議論の内容が整理することができただろう。また、聞き手に人権に対する興味を少しでももたせることができたら、それは私たちにとって単なるファイナルフォーラム以上の有意義なことであろう。(キム・ヘジン)

■日本側参加者感想文

・片山恵里

春休みにタイの子どもを人身売買の被害から保護するシェルターを訪れ、人権問題に興味を持ちこの分科会に入った。世界規模の人権問題に学生一個人が出来ることの限界を感じ「私たち学生の責任」はどこにあるのか、という事を考えたいと思っていた。まさかファイナルフォーラムで「人身売買」について扱い、個人で出来るアクションについて言及するとは思ってもいなかったためJASCと自身の経験が結びついた密度の濃い議論ができたことを本当に嬉しく思う。

普段の学生生活では自分の専門についての勉強のみで視野が狭まっていたが、世界の様々な問題を勉強し、議論できたことで継続的に世界の出来事に関心を持つきっかけとなった。また、自分の学問分野においても人権問題解決に貢献できる力があるのだと実感でき、日本に住んでいる私にとっての貢献の形があるのだと実感できたことは非常に有意義であった。長期的にこの問題に興味を持ち、自身の貢献の形を模索したい。

・キム・ヘジン

人権分科会で得た最も大きなものは「熱い想い」である。私が人権問題に興味を持ったきっかけは北朝鮮の強制収容所からの人の話を聞いたことだった。当時大学1年生であった私は人権問題を自分の手で解決したいと思い、人権に対する熱い想いでいっぱいだった。

しかし国際政治と人権問題に対する知識が少し増え、そこには冷たくなった自分がいた。どうして人権を守らなければならないのか、人権を守るというのは結局誰のためなのか、誰に人権を守る責務があるのか、頭で理屈ばかりを考え、ある国が「人権擁護のため」というとそれは建前で本当は別の政治的な意図が潜んでいると冷たい目線で考えることが多くなった。

私は理屈が全てではないことを忘れていたのだ。頭で冷静に考えるのは大事だが人に対する暖かい心を失ってしまうとそれは人のための学問ではなくなる。より住みやすい世界に少しでも貢献するために勉強していたにも拘らず、最も大事な「人」という部分をいつの間にか見失っていたのである。

このような私に皆は感情の大事さを気づかせてくれた。この3週間、人権に関して熱い議論を行ったが「どうして人権を守らなければならないの」と聞かれたところ、私は未だに人を納得させるくらいの論理的な説明はできないかもしれない。しかし少なくとも自分の中でははっきりわかる。それは、私たちは熱い血が流れる人間だから。この単純で明確な事実を改めて教えてくれたみんなに感謝したい。

・中野舜一郎

この分科会で扱ったテーマで興味深かったものに、①「(重大な人権問題と殆ど無縁の生活を送っている大学生にとって) 他人の人権を守ることは責務なのか」②「責務は普遍的か個別的か」③「責務を果たせない場合をどう考えるか」といったものがありました。①・②については、アメリカ人は予想以上に人道的な考え方をしていました。個人主義の国というイメージが強かったのですが、国家的に人道的介入に積極的なことや、宗教や教育の影響なのかもしれません。③について、日本人は、責務は絶対に果たすべきものだと考えていた一方で、アメリカ人は責務の実現には自ずと限界があり、果たせなくても仕方がないという考えでした。当初私には、アメリカ人の考えは都合の良いダブルスタンダードで、このような現状肯定的な結論では、議論の意味がないようにも思えました。しかし、人権問題はたいてい複雑な背景から生じており、どう考えても「一歩ずつできることから取り組んでいくしかない」という結論しか出てこないものであって、そうなると「できること」の程度も個人次第だということを受け容れなければならないのだろうと思うようになりました。これは人権問題を積極的に解決しようとする姿勢を諦めたようにも聞こえますが、気楽で理に適っ

たものであるともいえます。このように考えることで、私は今まで人権問題にどこか距離を置いていたことで抱いていた罪悪感を解消することができました。

・中道洋司

人権とは何か、人権に関する私たちの責任とは何か。「人権」分科会として選ばれて以来、ずっと考え続けてきた。私は大学図書館で人権に関する文献を読み漁り、国内のフィールドトリップを通して現場の視点から人権を考えてきた。

自信と不安を抱えて臨んだ本会議では、人権の定義や個別の問題に関わるテーマなど議論が多岐に及んだ。そのような中で、私たちは最終フォーラムの議題に「人身売買」を選択した。日米の学生が集まって議論できる環境の中で、私たちは社会のタブーを扱うことに挑んだのである。限られた時間の中で、私たちはリサーチを行い、議論を積み重ねた。その中で、課題に対して私が感じたことの 1 つは、「異なる価値観を持った人々と議論をし続けることの重要さ」である。異なる視点を持った人々との議論によって、私たちが今まで気づかなかった問題に取り組む礎が構築される、と実感した。事実、私を含め多くのメンバーが「人身売買」を扱うとは考えていなかったのではないか。

最後に、充実したRTを可能にしたのは価値観や専門がまったく異なるRTメンバーのおかげである。理解できない点に対して、多くの時間を費やしてでも理解をしようとしてくれた 1 人ひとりの姿勢には大変助けられた。彼らとともにRTを挑めた経験は、私にとってかけがえのない財産である。

■分科会総括

全ての事象が「人権問題」として扱われる現代社会において、「人権」という言葉が包括する範囲はより広義なものとなった。このような非常にマクロなテーマ設定に対し、本当に分科会が成り立つのかという不安は常にあったが、その中で、日米の学生で議論をする意味、個々人の興味、2012 年という年に考察する意義を軸に、ミクロな視点に落とし込み、白熱した議論を展開させた参加者の皆には本当に頭が上がらない。

「学生である自分たちには、人権問題に対してどのような責任があるのか？」この問いに対して、数々の人権問題を考察していく中で導いた 1 つの答え。それは「身近なところから問題を共有し、伝えていく責任」であった。豊かなアイデアと行動力でこの結論を導き出したことが、この分科会の存在意義を裏付けたと考えている。ファイナルフォーラムの前夜に、寝不足ながらも来場者へのメッセージとして皆で時間をかけて作った 100 枚の折り紙の 1 つは大切に飾っているよ。

真っ直ぐな姿勢と熱い情熱を持ち、地方からの参加ながらも全ての行事に参加してくれ、医療という貴重な視点を持ち込んでくれたえりにゃん。常に冷静に自分の考えを共有し、議論に深みを与える味のあるスパイスをくれたしゅん。素直に皆の意見に耳を傾けてくれる優しさを持ち、いつも皆を惹きつけるプレゼンテーションをしてくれたみっちー。真摯に人権問題と向き合い、持ち前の明るさと最高の笑顔で分科会に元気をくれたヘジン。アメリカ側参加者の Ariel、Madi、Kei、Jon、そして分科会を最高のものにするべく、夜遅くまでミーティングに付き合ってくれた RT パートナーの Rachel。このメンバーで活動することができて本当に良かったよ。心から有難う。

最後になりましたが、分科会フィールドトリップを快く受け入れて下さった皆様、数々の貴重なアドバイスと激励を下さったアラムナイの皆様、1 年に亘り多大なるご支援とご協力を下さった全ての皆様に心から感謝を申し上げ、分科会総括とさせて頂きます。(川邊拓也)

分科会全員で

安全保障と日米

Cooperative Security in the 21st Century

■分科会メンバー
伊藤実梨*
鹿山ゆかり
川野さりあ
藤川健太郎
藤田耕己
Zachary Callaghan*
Santiago Cruz
Sabine Etienne
Caitlin Jordan
Nobuko Masuno
（*は分科会コーディネーター）

■分科会概要

21世紀の世界は、核兵器や生物化学兵器など大量破壊兵器の拡散や民族、宗教的対立を根源とする地域紛争、非国家主体による国際テロなど新たな脅威に直面している。日本周辺では、中国の軍事的台頭や海洋権益拡大への強硬姿勢、北朝鮮の核開発問題など多くの不安定要因が依然存在する中、沖縄米軍基地の役割が改めて見直されている。日米は東アジアの安全確保のためにいかに協働していくべきか。また、ソマリア沖の海賊対策やアフガニスタン、イラクでの人道復興支援など、テロの温床となりやすい地域の安定化が新たな脅威を軽減する手段として認識される現在、日米同盟の機能の拡充が期待されている。両国は今後、アジア太平洋地域の枠組みを超え、国際社会の安全保障のためにいかなる協力体制を築いていくべきか。当分科会では日米安保を多角的に分析し、「世界の中の日米同盟」として日米が今後取り組むべき課題を考え、両国協働のあるべき姿を模索する。

■事前活動

・春合宿

5月初旬の春合宿は初めて分科会のメンバーが顔を合わせる機会となった。新聞やニュースの情報に敏感に反応するようにしていたものの、他のメンバーとの知識の差を体感し、議論していくにあたって危機感を覚え、どのように分科会に貢献していくのかを具体的に考え始めた。分科会では、それぞれが興味のあるトピックを出し合った。日本国憲法9条、領土問題、生物化学兵器、沖縄・グアムの役割などが挙がり、問題意識を持った背景を話し合い、メンバー間で基本的知識を補い合うことで、知識の差を埋めるよう心がけた。同時にメンバーが共通に関心のあるトピックを確認し、今後日本側で議論を進めていくことを確認した。また分科会の今後の方針として、6月までにアメリカ側とお互いの興味のあるトピックを共有することや、2週間に1度共通の文献を読んだ上で分科会ミーティングを開くことを決定し、希望するフィールドトリップについても検討を始めた。最終日にはこれらの成果を日本側参加者全体に向けて発表した。（藤田耕己）

・長島昭久氏フィールドトリップ
日時：７月１９日（木）
場所：衆議院第一議員会館　長島昭久事務所
参加者：伊藤、鹿山、川野、藤川、藤田、市毛

内閣総理大臣補佐官として安全保障を担当されている長島昭久様より、日米関係の在り方や、東アジアにおける日本の役割等を伺った。

まず、今日において重要なのは、経済・貿易、安全保障において存在感を増している中国の台頭にどのように対応していくかである、と長島氏は指摘された。今、東アジア地域に必要なのはルールに基づいた秩序であり、日本は米国と共に平等な透明性の高いルールづくりをする役割を担うべきだ、日本は受け身の立場であってはならない、と話された。

また、長島氏は「有事のリスクは米国、平時のコストは日本が負担」という今の日米関係の在り方は「不健全」だと表現された。歴史上、米国との「対等」な関係は難しいが、より健全な関係を築く必要があるとされた。

学生だからこそ自由な議論ができる我々が、安全保障分科会として何を考えるべきか、その議論をどう未来へつなげていくべきか、本会議を目前にして考えさせられるフィールドトリップだった。（川野さりあ）

衆議院第一議員会館 長島昭久事務所にて長島氏と

・孫崎享氏フィールドトリップ
日時：7 月 21 日（土）
場所：孫崎邸
参加者：伊藤、川野、藤田

外交官として英国、米国、ソ連、イラクなど世界各国で活躍された経歴をもち、防衛大学校教授を経て現在は日米同盟、外交などの分野における執筆活動を精力的に行われている孫崎享氏を訪問した。

尖閣諸島を始めとする日本の領土問題を中心にお話を頂いた。孫崎氏はそもそも日本政府がなぜ、尖閣諸島を日本固有の領土と主張できるか、島の歴史についてどこまで調べているのか、という点に疑問を持たれている。また、領土問題には「棚上げ」という解決法もある、と指摘された。棚上げすることにより、経済面等において既に強い連携を有する日中が、「岩」のために両国の関係を悪化させることは無意味だということに気付かされる、とのことだった。

孫崎氏のお話の中であった「根本に疑問をもつ」という言葉が印象的だった。受け身の姿勢ではなく、与えられた情報に対して常に「なぜ」「どのように」、と疑問をもつことが重要である、というメッセージを頂いた。（川野さりあ）

孫崎邸にて、孫崎氏と

・靖国神社フィールドトリップ
日時：7 月 27 日（金）
場所：靖国神社

直前合宿の分科会の時間を利用して私たちは靖国神社の遊就館を訪ねた。靖国神社への首相の参拝はこれまで東アジアの友好関係の妨げとなってきた。日米の安全保障を語る上で太平洋戦争をどのように認識するか、は避けて通れない課題である。そのため、偏った歴史認識を示しているとしばしば批判される遊就館の展示を自らの眼で確かめる必要性を感じ、訪問へと至った。

「靖国史観」と呼ばれる遊就館の記述は、基本的には事実を基にして日本の第二次世界大戦までの道筋を描

いている印象を受け、私の想像とは異なり非常識とまではいえないかもしれないと思った。ただ、日本は戦争に巻き込まれたのだという被害者意識が表に出ていると共に、日本が日中戦争以来なしてきた膨大な人権侵害については全く触れないという点で、非常に一面的でバランスを欠いている展示だと感じた。(藤川健太郎)

・直前合宿

直前合宿では、初日に設けられた分科会セッションの時間を利用して、フィールドトリップに出かけ、靖国神社を訪れた。全員の時間を合わせ行動する時間が限られていた中で、米国出発前に全員で行動し意見交換ができたことは有意義であったと思う。その夜には日本での分科会活動を日本側参加者に共有する分科会発表の時間があり、私たちの分科会はこれまで行ってきたフィールドトリップについてプレゼンテーションすることを決定し、これまで訪れた人物や場所について振り返った。具体的には、内閣総理大臣補佐官の中島昭久氏、外務省で働かれていた孫崎享氏、また当日訪れた靖国神社についてである。私は長島氏の訪問について担当し、私たちが興味を持ち質問した憲法9条やPKO・自衛隊に関する先生の見解と自分の考えを整理することができ、アメリカで議論していく際にも役立っていたように思う。(藤田耕己)

■本会議中の活動

・Dallas Holocaust Museum フィールドトリップ

日時：8月1日(水)

場所：ホロコーストミュージアム(テキサス州ダラス)

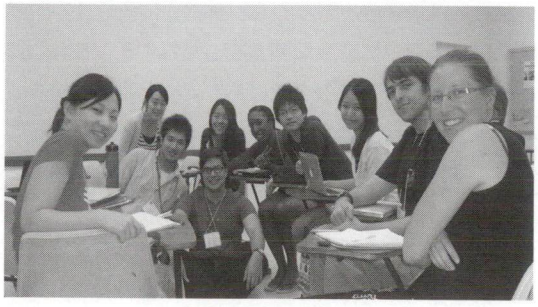
アイデンティティRT・人権RTと合同で、私たちはダラスのホロコーストミュージアムを訪ねた。この博物館はホロコーストの記憶を残し、その再発防止の願いを込め建てられている。人々が当時どのようにホロコーストに向き合ったかが展示の中心だったが、ホロコースト経験者による証言を録画したビデオは特に印象に残った。

見学後、3つの分科会合同で議論を行った。連合軍の上陸を早めるか、もしくは上陸経路の変更、より早期にホロコーストへの対処ができたはずだ、との意見がアメデリから出たが、ナチスの下で苦しんでいたのはユダヤ人だけではなく、戦争の早期終結のため上陸経路・時期が合理的だったならば仕方がない、とあるジャパデリは主張した。また、人道的介入に積極的になるべきだとのアメデリの意見に対し、人道的介入の際に命を危険に晒すのは兵士であり自分たちでないという点ではそうした主張はきれいごとに過ぎないのでは、との疑問がジャパデリから出された。(藤川健太郎)

・憲法9条

最初に行った憲法9条に関する議論は、”mutual understanding（共通理解)”をめざし、一人ひとりが順番に意見を述べ、それに対して他の参加者が質問や疑問を述べるという形式で行った。9条そのもの、集団的自衛権、PKOが主な論点となった。9条に関して日本側からは今の形式を保つべき、アメリカ側からは改正すべきという意見が出た。この違いは、両国の文化的な差異－日本のお互い助け合う集団主義とアメリカの自分のことは自分で行うという個人主義－によるものではないかという結論に至った。

議論を通して考えが深まっただけでなく、お互いをより深く理解することができた。(鹿山ゆかり)



テキサス州ダラスにて

・日米安全保障条約

安保条約について議論を始めた際、日米の負担分担をどう捉えるかという問題に着目した。米国の主な負担としては、日本の有事の際に日本を防衛することがある。日本側の負担としては、思いやり予算として在日米軍への援助や基地提供が挙げられる。ここで、最も重要な問いが命とお金を比べられるのかという問題

が議論の対象となった。勿論、負担の一方で両国は利益を得ている。日本は米国に防衛してもらうことができ、米国としても地政学的に優位な沖縄に基地を置けることは、米国自身の安全保障政策にとってもプラスである。これら、負担と利益を総合的に考えた際、どちらの国がより多くの負担を負っているかという議論になると、憲法改正や沖縄問題にまで広がり議論はより深まった。（藤田耕己）

ウィスコンシン大学付近の湖畔にて

・沖縄

私たちは最後のトピックを「沖縄」に決めた。同盟関係が日米双方に膨大な利益をもたらすとしても、日本側の負担を一手に引き受ける沖縄にとっては利益があるか、という問題が残るからである。沖縄の人々にとって基地は受入れに値するか、また沖縄の犠牲は正当化できるか、という問いを私たちは設定した。前者については、基地による雇用機会増大などを重視し受入れは是認できるはずとの意見と、沖縄の人々が騒音や米兵による犯罪等から基地に反対する現状を重視して受入れには値しないとする意見がぶつかった。受入れには値しないとする側からは、現状では沖縄の犠牲は正当化しえないとして基地負担の軽減や経済援助の拡大を求める声があがった。（藤川健太郎）

シアトルにて

・ファイナルフォーラム

フィナルフォーラムでは日米における burden sharing 及び沖縄問題を扱うことにした。いずれの問題も分科会として一つの意見にはまとまらなかったが、それぞれにおいて対立する二つの考え方があることに気付いた。

Burden sharing では、自国は自国の力をもって守るべきだという個人主義に基づく考えと、互いに協力しあい負担も共有すべきとする集団主義に基づく考えの対立が見られた。沖縄問題では、極東アジアの平和を保つため、沖縄県の経済を支えるためにも米軍基地は必要だとする論理的理由と、国のために沖縄県が犠牲になっているという感情的理由が見られた。

両国の主張を真に理解するためには十分な時間を要すこと、しかしその過程こそが日米同盟をより強固なものにする、という言葉で締めくくった。（川野さりあ）

■日本側参加者感想文

・鹿山ゆかり

約 3 週間にわたる分科会活動で分かったのは、お互いを理解することの難しさ、面白さ、大切さである。「何を議論するか」を決めることから始まり、9 条について、沖縄について、アメリカ側の参加者の意見を聞くことは、ここまで違うのかという驚きとこのような考え方もあるのかという新たな発見の連続であった。

分科会の議論で最も心地よいと思ったのは質問・疑問・意見がポジティブに受け取られること。日本ではそれらは時として失礼に受け取られたり、きつい印象を与えてしまったりするが、この分科会ではそのようなことは全くなかった。むしろ、内容を確認するための重要なもの、意見を深めるために大切なものと考え

られていた。お互いの違いから時には議論が白熱することもあったが、常に相手に対するリスペクトを忘れないメンバーとの時間は大変心地よいものであった。この 3 週間で互いの違いを認識しただけでなく、その理由「たとえば、憲法 9 条に関しては立場だけでなく文化的な背景も原因であること」まで理解することができ、「安全保障と日米」という分科会のテーマ、また「共通理解」は達成することができたように思う。最後に、分科会活動をサポートして下さった全ての人に感謝申し上げます。ありがとうございました。

・川野さりあ

思えば「安全保障と日米」分科会への所属が決まってから、私にとって JASC での活動は毎回戦いだった。7 つの分科会の中でも最も馴染みのない分野。長らく自分が避けていた「安保」というテーマ。議論に参加すること自体が難しく、始めは自分の意見も持てないことが悔しかった。

活動を続けていくうちに、安全保障を他人事のように考えていた自分は愚かだったと思い始めた。国家間の安全保障は、国民 1 人 1 人の生活に影響を及ぼすのだということにようやく気付いたのだった。

本会議においては、米国の学生から見た日本を知ることができた。意見は人それぞれだが、日本の自立を求める声が多かったことが印象的だった。安全保障だけでなく、経済や科学技術などの分野においても、米国は日本がリーダーシップを発揮することを望んでいるようだった。これは国家レベルの問題だけではなく、個人レベルでも言えることではないだろうか。

安全保障 RT の一員として活動できたことは、そうでなければ決して読まなかった本、決して会えなかった有識者の方々、決して考えなかった社会問題との数々の出会いをもたらしてくれた。分科会の 10 名で安全保障を議論していく中で学んだ広い視野で物事を考えるということ、忍耐強く相手の主張に耳を傾けるということ、そしてその主張を尊重するということは、将来医師になる者として、1 人の人間として生涯心に留めておくべきことだと感じる。

・藤川健太郎

今後流動化する国際関係特に中国の台頭のなかで、米国の学生が日米の役割をどう考えているかに関心があり、また日本人個人としての意見を彼らに伝えたいと感じ、私は「安全保障と日米」分科会に参加した。私たちは学者ではなく学生であり、また 1 ヶ月弱生活を共にできる利点を活かそうと考え、学生会議が陥りがちな政策志向ではなく相互理解を分科会の中軸に据えた。

議論の中で個人的に特におもしろかったのは、日米同盟における負担の問題を論じた時である。極度に単純化していえば、アメデリは日米の対等な関係・負担を求めたのに対し、ジャパデリの一部は双方が同盟関係から膨大な利益を得ていることを理由に、平等な負担の必要性を否定していた。私はこの議論をしている際に、見解の相違の背景の一つに個人主義と集団主義という文化の違いを見た。個人主義であれば関係も負担も対等であるべきなのに対し、日本人的な集団主義からは負担の対等性は必ずしも要求されないからである（例えば一部の人の仕事負担が多くともそれが職場の仕事効率を高める限り肯定されるし、先輩が金銭的により多くの負担をする事は当然視される）。恐らくこうした発見は、何日もの間、延々と日米同盟の負担の非対称性について議論を戦わせなければ出てこなかったと思う。こうした例をはじめ、相互理解という観点からは限られた時間を最大限に活かして大きな成果を挙げることができたと感じている。

・藤田耕己

「安全保障と日米」―私にとって未知の領域であり、学ぶことすべてが挑戦であった。沖縄基地や領土問題についてこの時ほど真剣に考え、問題に対峙したことはなかったように思う。春合宿において、分科会で話し合った際、同じ世代の学生が自分とは全く異なる次元で社会を見ていることに気づき、危機感を感じた事を鮮明に思いだす。何を発言していいかも分からず、学びの姿勢で会議に参加し、その傍、安全保障に関する文献を読み進めた。そしてあっという間に本会議を迎え、実際にアメリカ側の参加者と議論をするに至った。その際、学生らしい議論とは何なのかという問題

意識に立ち返った。議論を深めていく中で感じたこと―それは国の利害に関わらず、これからの時代を生きる自分達の視点から何が重要なのか議論することである。一定の知識を得た上で、自分の中から湧き上がってくる意見をぶつけ合い、互いに理解するように努める。それを実現する環境が JASC にはあると思う。ただこの議論を分科会の中だけに留めるのではなく、日本全体で多くの人が考え自分の問題として捉えることで初めて多くの国民にとって最善な道を選ぶことができるのだと思う。私たちの報告が日本のどこかの議論に火をつけることを期待してやまない。

■分科会総括

日米間の議論の主題であり続ける「安全保障」の分科会は日米学生会議の伝統とも言える。今年の安全保障分科会では、日米間の安全保障の根幹をなす日米安全保障条約や沖縄問題、憲法 9 条を議題として選んだ。中国の台頭や北朝鮮の核問題、領土問題など今日注目されるトピックにも当然参加者から関心が寄せられたが、これら時事的な問題の議論においては必ず 9 条や安保条約が根本的な争点となると考え、根本的議題を深く議論することで限られた本会議の時間を最大限有意義に使おうと試みた。日本側だけの事前活動では、安全保障の基礎知識を高めることにより、個々の考えを深めることができた。また事前活動でのフィールドトリップでは多くの方々のご協力のもと、たくさんの新たな視点や刺激を得る機会に恵まれた。

本会議においては分科会の目標を相互理解の深化に集中させることにした。これは今年の安全保障分科会の最大の特徴になったと言えるだろう。理想の政策、安全保障を実現するためには、相手がどのような論理に基づきどのような考えを持っているかを相互に理解することが必須である。そして 1 ヵ月近く生活を共にし、毎日白熱した議論を交わせる日米学生会議ならではの特殊な環境を利点として生かすことにより達成できる目標でもある。このような考えから本会議における議論では、個々人の考えに焦点を当て、なぜ意見の相違や対立が生まれるのかに注目した。その結果、個人より集団に価値を置く、集団主義と集団より個人の権利と自由を尊重する個人主義という日米間の文化の差異が、安全保障の議論における意見の相違を生んでいる 1 つの要因ではないかという結論が導き出された。この新たな発見は日米両国間の課題解決に向けて根本的かつ確実な 1 歩となり、意見の衝突から相互理解へ進むために、大変有意義な成果であると考える。相手の意見に耳を傾け偏りなく理解しようと努め、同時に自分の意見も明確に伝え適切に把握してもらうこと。その難しさと重要さを肌で感じ悪戦苦闘しながら、相互理解という大きな目標を本分科会の参加者が成し遂げたと心から誇りに思う。(伊藤実梨)

グローバル化における文化芸術

Cultural Innovation and the Arts

■分科会メンバー
森田真弓*
大多和祐介
小田垣彩花
竹内正人
林真希チェルシー
Stephen Zellmer*
Matthew Bassett
Jessica Brooks
Akifumi Nagano
Takuya Naruse
（*は分科会コーディネーター）

■分科会概要

グローバル化が進む中、文化・芸術は他国を惹き付けるソフトパワーとなっている。ハリウッドは、アメリカが掲げる自由主義や民主主義を映像の形で世界中に発信した。日本のファッション、アニメ、食文化などがCOOL JAPANとして海外で注目を浴びている。例えば、漫画ONE PIECEは世界30カ国で翻訳され、28カ国で放映されている。また、茶道や華道、工芸品など日本の伝統文化も発信されている。伝統文化は、デジタル化や国際化により、今後どのように保存されていくのだろうか。風呂敷は、海外で使用された時、スカーフや壁飾りなどとしても利用されている。このように、文化は他地域に伝播すると、その地域文化の影響を受け、融合されることもあり、また、全く違う文化を生む可能性もある。これが人類の文化の発展や継承につながる。当分科会は、グローバル化やデジタル化が文化芸術にどのような影響を与えたのか考察し、今後どのように進化し、継承されていくのかを話し合った。

■事前活動

・春合宿

初分科会活動として、とても有意義な時間を過ごすことができたと思います。まだまだ知らない部分もたくさんあるけれど、分科会のメンバーがどういった理由でこの分科会を選んだのか、それぞれのバックグラウンドも含めて知ることができたし、夏の本会議に向けて何をすべきか、どんなことがしたいかという具体的なところまで話を進めることもできました。

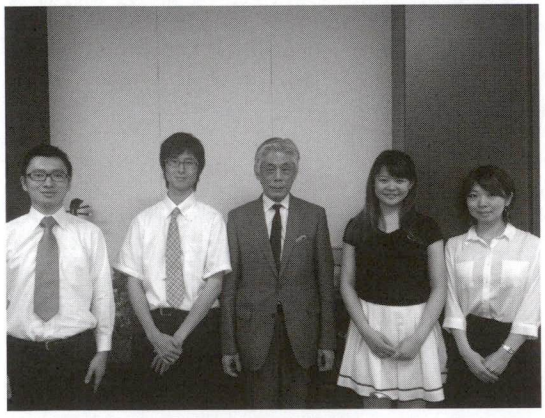
ただ、このJASCと分科会活動で学んだことを、夏の本会議のその後まで、どのように社会に還元していけるのかという点において、まだまだRTとしての方向性がはっきりすることができていないようにも感じました。

そしてその方向性が見えてこない1番の理由が、「アイデンティティ」って何だろう？という1番基本かつ1番大切な疑問に対しての、RTとしての答えが見つけられなかったことだと思います。これからの夏までの勉強と分科会でのミーティングを重ねていくことで、そのあたりをもっと明確にさせ、共通の目的意識を持っ

ていければ、さらに有意義な会議にしていくことができるのではないかなと思っています。（大多和祐介）

・文化庁長官 近藤誠一氏 フィールドトリップ
日時：7 月 19 日（木）
場所：文化庁長官室
参加者：大多和、竹内、森田、林

文化庁でのフィールドトリップは、私に「行動」の重要性について再度確認できる場となった。分科会が決まった 4 月から今に至るまで、文化という定義化の難しさ、文化と芸術という二つの視点からのディスカッションと難題がたくさんあった。時には、他の分科会を見て焦り、自分たちがやってきたことに対して疑問を抱くこともあった。しかし、今回の訪問を通して、立ち止まってしまった時こそ考える前に行動をしてみることは非常に重要であったと考える。文化と芸術という 2 つの側面に対する近藤さんの意見は、自分たちの分科会の方向性の再確認に繋がった。1 人の人間が文化圏の異なる人に与える影響は微々たるものであるが、その繰り返しこそが互いの文化に対する偏見を取り除いてくれる。今、私たちはきっとその宿命を与えられているのではないだろうか。（小田垣彩花）



近藤誠一長官と

・直前合宿

直前合宿ではアラムナイの方々から激励をいただき、日本側の代表として会議に参加するのだという気持ちを新たにしました。その後、本会議で披露するためのスキットを練習しました。演技あり、踊りありの盛りだくさんの内容で、各自の隠れた才能やアイデアが光りました。

RT タイムは、久しぶりにメンバー全員が一堂に会し、和気あいあいとした雰囲気で始まりました。私達の RT は「国籍や民族に基づく偏見や先入観を取り払い、互いを国際人として見られるようになる」ということを最終目標として設定しました。そのために日本人参加者として日本の文化を理解し、相手に説明することを最初のステップとして考え、各自の RT ペーパーで実践してきました。文化庁へのフィールドトリップを含めたその流れを、直前合宿のプレゼンテーションで発表し、本会議に向かいました。（小田垣彩花）

直前合宿にて

■本会議中の活動

・本会議議論内容

ダラスサイト。分科会（以下 RT）のメンバー全員が初めて顔を合わせた。これからの方針やそれぞれの RT に対する考えを共有するため、各自が作ってきた RT ペーパーの内容を 3 日間利用してプレゼンを行った。その後、フラッシュカードを利用したブレーンストーミングを行った。自分たちが文化と芸術という 2 つのことに対して考えられることをカードに書きグループ分けを行った。そのグループは 7 つあり、“understanding”, “education”, “culture”, “art”, “global/local”, “exchange”, “technology” であった。

マディソンサイト。このRTのテーマは、かなり広いので主に文化と芸術というものを自分達の身の周りのものに置き換えて考えることにした。ダラスサイトと同様にカードを用いてブレーンストーミングをして自分たちが情熱を注いでいることについて考えを共有し合った。そこで、キーワードとして、”Express” “Curiosity” “Connecting”という３つが挙げられた。

カリフォルニアサイト。ダラスとマディソンで作りあげてきた全体としてのRTの大枠から、議論を重ねることを集中的に行った。「世の中にある全てのものは芸術なのか」、「プロとアマチュアとの芸術の違い」など芸術にフォーカスした内容を日米で議論しあった。

シアトルサイト。カリフォルニアでは芸術よりの話がメインだった為、シアトルでは主に日本人参加者が議論のファシリテーターを行い、本会議前に話し合ってきた文化という側面から様々なトピックを挙げ議論を行った。「文化と芸術どちらが土台となっているのか」、「個人の文化と大衆文化について」、「メディアは文化のグローバル化にどれだけ影響を与えているのか」などについて話し合った。そして、ファイナルフォーラムでは大きく分けて８つのトピック、“The Relation between Culture and Art”, “Globalization and Tradition”, “About Globalization”, “Similarity and Diversity in Globalization”, “Media and Technology”, “Cultural Innovation and Arts SNS”, “Identity & Cultural Preservation”, “About Global Citizen and the Meanings of Art”に分けて発表を行った。（竹内正人）

・JAZZコンサート フィールドトリップ
日時：８月９日(木)
場所：The Freight and Salvage Coffeehouse in Berkeley, CA

RTのフィールドトリップとして行ったジャズコンサートには、JASCのアラムナイである日系アメリカ人の「タナさん」が出演されていました。ジャズコンサートに行くのは初めてでどんなものかとドキドキしていましたが、誰もが知っている映画「007」のテーマソングが特集されており、さらにボーカルの方も入り、非常に親しみやすく感じました。初めて聴く生演奏は臨場感に溢れ、会場全体が不思議な空気に包まれました。演奏のあとにはタナさんと、他にも一名いらした日本人の演奏者の方を交えて写真を撮り、タナさんとお話することが出来ました。JASCの思い出話を聞き、思わず笑いがもれました。アラムナイの方がこのように多分野で活躍されている姿を拝見するのはたいへん感慨深いものでした。素晴らしい時間を過ごさせていただき、ありがとうございました。（小田垣彩花）

サンフランシスコに移動した日の夜、他のデリゲート達が広島の原爆投下についての議論をしている中、CIA(Cultural Innovation and Arts)だけ早くに抜けて、Japanese-Americansが数人所属しているバンドのジャズコンサートを鑑賞しに行きました。クラシックのコンサートはよく行きますが、ジャズは数回しか行った事がないので勉強不足のまま行く事になってしまいましたが、素人の私にも感じられるくらい、全部の即興パートが心を打つ程美しくて、少しもしんどくない、聴いている人を癒してくれるような音楽でした。ちょうどJASCの日程的にも中盤にさしかかったときにこの音楽を聴けて、ものすごく癒されながら、今まで過ぎ去ったJASCでの日々を思い出して、良いSelf-Reflectionの時間となりました。事前フィールドトリップ先でお会いした文化庁長官の近藤さんの言っていた「芸術は心と心を繋いで、お互いを癒し、強くする」という言葉の意味が実感を持って理解できた気がしたフィールドトリップでした。（林真希チェルシー）

Akira Tana氏と

・ファイナルフォーラム

与えられた時間は分科会ごとに15分。3週間議論してきたことの中で15分という制限の中何をどう伝えるのかというのは工夫のいるところであった。私たちの分科会は“Cultural Innovation and the Arts”ということで他の分科会とは違う何か“Creative”なコンテンツにすることとなった。その結果 Introduction Video を最初に入れることにした。しかし、15分で伝えられる情報は予想以上に少なく、時間との戦いという印象であった。

このファイナルフォーラムにおいて、私たちが議論してきたことを他の分科会のJASCerのみならずネットのライブ中継によりさらに多くの方にシェア出来たことに大変意味があったように感じた。3週間ともに議論を重ねてきた仲間たちとファイナルフォーラムで最後に1つの成果として形に残せたことは嬉しく思う。(大多和祐介)

■日本側参加者感想文

・大多和祐介

私は分科会全体を通して、最終的に所属していた”グローバル化における文化芸術”という分科会でよかったと感じることが出来た。分科会のテーマの通り、非常に内容の範囲が広く、本会議の前半では議論をしていく方向性がなかなかまとまらず、分科会全体としてもあまり順調であったとは言えなかった。私自身は英語を活用して議論をしていくという経験は以前には皆無であり、思うことがあっても100%伝えきることが出来ず、また伝えることが出来ても流れをうまく動かすにはいたらないことがあり、フラストレーションがたまることもしばしばあった。しかし、RT内でのリフレクションを行い、各々がそのとき考えていることを全員にシェアし、その現状を見つめ直す機会を持ったおかげでなんとか方向性を見いだし、ファイナルフォーラムに繋げられたように思う。私は、分科会を通りして、英語での議論の難しさを痛感することとなった。しかし、同時に、言語的側面以外にも議論するにあたって考えなければならないことがあり、むしろそちらの方が重要であると考えたことは大きな変化であったように思う。私にとって考えていた以上のものを感じられたコンテンツの一つであるように感じる。

・小田垣彩花

もともと「文化と芸術」という漠然としたテーマのRTで、本会議前の日本側だけの話し合いの時からなかなかまとまらなかったのですが、アメリカ側と合同になった本会議でもやはりそうで、最初の走り出しに苦労しました。枠組みを決めるための話し合いが長引き、気づけばまともな討論をせぬまま2週間が過ぎていました。そこでRTメンバーのリフレクションという時間を設け、今までの反省や今後のことを真剣に話し合い、そこからファイナルフォーラムまでの1週間は、どんどんRTの時間が良くなっていき、議論もできるようになってきました。また、英語に関しても、私は英語で苦労をした方なのですが、メンバーが互いに歩み寄り、全員が理解できるような英語が話されるようになってきました。最初は他のRTに比べてうまくいかなかったかもしれませんが、どんどん良くなっていき最後を良い形で迎えられたこと、本当に良かったと思っています。分科会の時間だけでなく様々な場面で共に行動したRTメンバーの皆にはとても感謝しています。芸術分科会だけあって、クリエイティブな才能を持つ人も多く、皆の才能や生き方にたいへん刺激を受けました。ありがとうございました。

・竹内正人

大学では、建築とメディアアートを専攻している私にとって、「文化と芸術」は一見考えやすいと思ったのだが、日本側参加者同士やアメリカ人を含めた議論を重ねる度に難しさが増していった気がした。それは、自分たちを含め自分たちの周りを構成しているものには、全て文化があるからであった。その文化に対して芸術はどのように存在しているのかという定義付けの難しさ。しかし、それ以上に今回の分科会を通じて日本とアメリカという大きな文化に対して、1人1人を構成している文化には大きな力があるなと感じた。その集合体が国の文化を作っているのかなと考えた。そして、芸術は最後まで定義付けが難しかったものの人間が表現するためには、なくてはならない存在であることは理解することができた。

最後に、私はこの分科会に出会えた事、異なる文化的な価値観を議論した１ヶ月間に感謝をしている。将来の像が漠然としていた私に、文化と芸術という異なるフィールドをテーマとした夢ができた。この先、地域文化が芸術で表現され活性化に繋がる仕事をしていきたいなと思わせてくれる熱い夏であった。

・林真希チェルシー

本会議が始まる前から随分頻繁にジャパデリ達と連絡を取り合い、日本文化や日本の伝統芸術、そして国を超えた差別・偏見意識についての議論を積み重ねて迎えたアメリカでの本会議。日本側が事前に勉強してきた内容と、アメリカ側参加者がそれぞれ興味に基づいて勉強してきた内容がかなりずれていて、お互いのRT レポートを紹介し合った後は、これから３週間何を議論していくか、何を目的としてどこをめざすのかという事で煮詰まってしまい、実際にテーマにそって議論を展開していくのではなく議論についての議論をひたすらする事になってしまいました。英語に対してのハンデがあるデリゲートや、強い意志があるデリゲート、どうにかして議論に進みたいデリゲート、議論についての議論に飽き飽きしてきてしまったデリゲート、何も言ってはいけない立場なのか干渉してこないコーディネーター。この煮詰まった状態が２週間余りも続いてきて、RT 全体の雰囲気はとても良いとは言えない状況にまで陥りました。皆がRT タイムがくるのが嫌になり、他のRT はかなり進んでいるのに、CIA だけ何もまだ始めていなくて、ファイナルフォーラムまで一週間を切った頃から全員の中で焦燥感が生まれだしたと思います。もうこの議論についての議論は強制的に中断しよう、という結果になって、何でもいいから議論し始めようよと皆が言うようになってから、やっとRT が進みだした気がします。最後の一週間は、それぞれ話し合いたいトピックを持ち寄って議論し合う事ができ、なんとかファイナルフォーラムまでに間に合わせる事ができました。あまり良くなかった雰囲気も、最終週には全員 CIA メンバーが大好きになって、Final Forum では調子に乗って CIA のビデオを作って流したりする程に。ものすごく幅広いテーマな分科会で沢山寄り道はしましたが、最終的には全員が楽しめたのではないかなと思います。

■分科会総括

文化と言っても多種多様である。音楽、文学、はたまた宗教など様々なものが含まれる。私達は文化に囲まれて生活している。芸術をとっても美術館やコンサートなど、多くの場所で触れている。しかし、文化については安全保障問題や環境問題のように真面目に人と話す機会はなかなかない。それ故、この分科会では現代を生きる私達にとって文化とはどのようなものかを真剣に話す、参加者にとって珍しい場とすることができれば、と思いこのテーマに取り組んだ。

文化の定義の仕方、考え方、それは文化と同様に多種多様である。だからこそ、ひとつの考え方を答えとして求めるのではなく、分科会としてさまざまな考え方を共有し、理解することからはじめた。テーマのカバーする範囲が広く、何がしかの問題解決について話し合うわけでもなかったので、自由度がとても高かった。だからこそ、RT コーディネーターのパートナーであるスティーブとは、参加者８人に議論の道筋を作ってもらいたい思いから、彼らに任せていった。テーマが広く、議論しづらい上に、放任主義のせいで、参加者たちは苦労したと思う。そんな中、めげずに最後までしっかりと議論をつくし、ファイナルフォーラムを迎えてくれた参加者にはとても感謝している。この分科会に参加したことで、なにかひとつでも得るものがあれば幸いである。この分科会に参加してくれた皆さん、本当にありがとう。

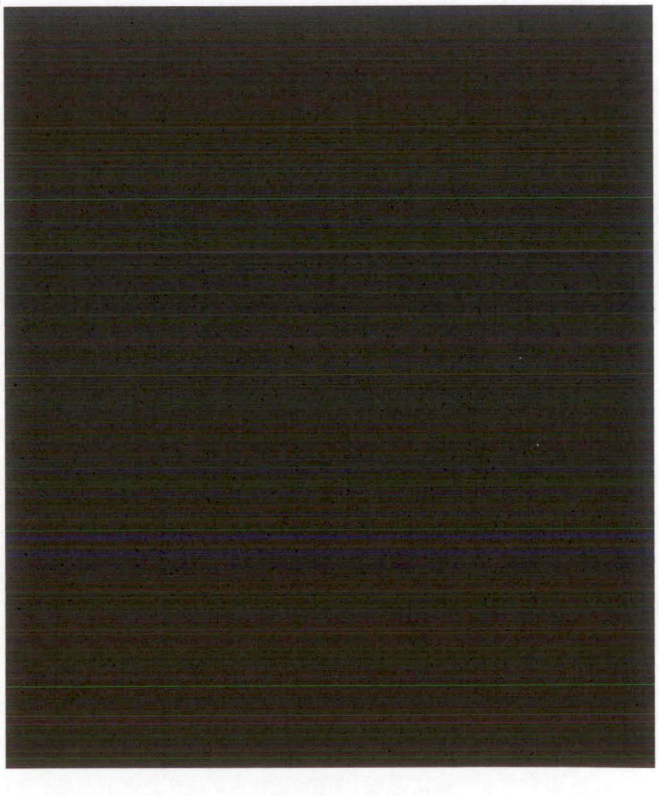
最後になりましたが、フィールドワーク、ディスカッション等の分科会活動にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

（森田真弓）

シアトルにて

第5章

参加者の声



浅原光貴

本会議が終了して一週間程が経ってこの報告書を書いているのだが、未だ消化しきれていない自分がいる。それほどこの数カ月、特に本会議の３週間は自分にとって大きなものであった。初めてのアメリカで体験する気候の変動や食事、言語の違いなどはわくわくすると同時に時に自分にとってストレスとなることもあったが、そのような異文化の中で生活することで得たものはたくさんあった。特に自分と異なる文化、背景を持つ人々との交流は他者との相互理解だけでなく、これまでにないほど自分と見つめ合う機会となった。

自分の役割は何なのか、自分はどのような形で貢献できるのか。JASC に参加する中で常に自分に問いかけていた疑問である。この疑問に答えようとする過程で自分に足りないものがたくさん見出すことができた。議論の時になると、自分は周りの意見に流されたり議論を先に進めようとするあまり妥協してしまう傾向があったりすることや、自分の意見に対する自信を持てていないことを改めて理解した。議論の中で自分の意見を強く押し出していく友人たちの姿を見て尊敬の念を抱き、彼らから学ぼうとしたと同時にそれができていない自分を歯がゆく思う自分がいた。しかしこうした悔しさの一方で自分にできることも模索するようになった。それが役割の模索にもつながり、その過程で自分の強みではないかと思えるようなものを見出すことができたと思う。

相互理解の機会は自己理解にもつながる。この会議を通じて強く感じたことだ。自分とは考え方や生き方が異なる存在と交わることで自分にはないものや足りないもの、強みなどを見出すことができた。

今回学んだこと、感じたことは間違いなく今後の自分の生き方に影響してくるだろう。たくさんの気づきを与えくれた全ての JASCer に心から感謝したいと同時に今後ともお互いに切磋琢磨していければと思う。

飯島千咲

私が JASC の存在を知ったのは、１年間のアメリカ高校留学から帰ってきた１８歳の夏です。カウンターカルチャーショックの最中にあった私には、日米両国の学生と一緒に過ごし議論交わすプログラムがとても魅力的で、大学生になったら絶対に参加したいと思っていました。しかし今思い返せば、その想いは、JASC のもつ長い歴史に対する漠然とした憧れ、あるいは、虚無感から少しでも抜け出すために必要な目標だったのかもしれません。

プログラムを終え、私にとって JASC とは、JASC に参加した意義とは、と考えることがありますが、なかなか一言で言い表せることができません。今心の内にあるこの言語化できない感情がその複雑さを物語っていますが、一番の理由は、JASC に参加した意義は、きっとこれから先どんどん広がっていくものだと思うからです。意義は１つでなくていい。帰国して１週間経って改めて気がつくことがありますが、きっと同じように、１年、５年経って初めて気がつくことが待っているのだろうなと、とてもわくわくしています。

２３日間を共に過ごし、議論を交わした友人たちですが、限られた期間で知ることができたのは、彼らのほんの一面にすぎないでしょう。これから長い時間をかけて、彼らの新しい一面を知って行くことや彼らの将来も本当に楽しみです。

JASC はよく” Life Changing experience” と言われますが、私は、ここでいう Change は、あの２３日間のうちに完了する変化ではないと信じています。JASC に参加しただけで、人生が変わるのではありません。そこで人生が変わるのではなくて、これから先何年も何十年もかけて人生が変化するようなきっかけとなる経験こそが、JASC だと思います。

JASC に参加したからこそ、出会えた人、できた経験はきっとこれからも増えていきます。その一人ひとり、一つ一つを大切にして、新しい意義を見つけていくことで、私にとっての JASC はずっと続いていくと思っています

市毛裕史

「JASC とは何だったのだろう。」この言葉だけは言うまい、感想文には書くまいと、私は本会議前に心に誓いました。あれから一ヶ月、なぜかその言葉を心に浮かべている自分がいます。「JASC とは何だったのだろう。」この言葉が表す意味は、一言では JASC を言い表す事は出来ない、という事だと思います。思い返せ

ば、JASC では悔しさの連続でした。英語を通じたコミュニケーションで感じる不甲斐なさはもちろんですが、あらゆる事に対して自分の力不足を感じました。威勢を張り、「今までで史上最高の JASC にします。」と大声で誓った春合宿のレセプションから、本会議中も、そして本会議が終わった今も、「最高の JASC とは何だろう。」という問いを自分の中で持ち続けています。その答えを必死に模索し続けた為か、JASC に対してある種の失望感を感じた時期もありました。「これが本当に JASC なのか。」「これが本当に life-changing summer なのか。」自分の中で深く悩み抜いた後、出た答えは「もし不満があるなら、自分で改善して行けば良いだけじゃないか。」でした。もっと熱い議論がしたいのなら、自分で企画してやればいいだけだ、こんな単純に見える答えでも、自分の中では大きな進歩でした。しかしながら、もっとできたのではないかという思いも確実に残っています。もっと英語が出来れば、もっと深く英語で議論が出来たのではないか。もっと○○できれば、、、この思いは尽きません。このような後悔が残った JASC でも、やはり多くの宝物を自分に授けてくれました。世界中のどこに居ても会いに行きたくなる、友人を超えた JASCer という仲間たちです。自分の意見をぶつける事が出来、自分の素をさらけ出せる人達と出会えたのは、この上なく幸せでした。様々な刺激を与えてくれた JASCer 達に対して、これからは自分が影響を与えて行けるようになりたいです。一つの事に集中した不思議な一ヶ月間でしたが、自分の人生を変える糧になりました。

伊藤実梨

日米の学生 16 人の実行委員会でゼロベースから試行錯誤を繰り返し、第 64 回会議を創り上げてきたこの一年間。様々な経験が凝縮された過去最高に濃い時間であり、折々感じた感情が鮮明に記憶に残っている。実行委員会としての日々は多くの新たな挑戦の機会を私に与えてくれた。殊に大きな挑戦となったのは、実行委員 16 名が一つの組織として団結し日々最善を重ねていけるよう、自分自身の適切な役割を見出だし、それを果たすことである。日本側とアメリカ側実行委員の文化的背景の差異から生じる認識や理解のずれは、各局面で必ず生じた。時には実行委員間に緊張状態をもたらすこともあった。そこで自分の考えを明確に伝え相手に理解してもらうと同時に、相手の意見もはっきり正しく理解するよう努めること。そして実行委員の間でも相互の誤解が生じないよう、適切に努力をすること。これらを私は自分の役割として見出だし、意見が対立する際には仲介役となり相互理解を助け妥協点に導くことに力を注いだ。衝突をそこからいかに理解へと導き、事全体を良い方向へ運んでいくことができるか。これが私個人の本年度会議における大きな目標であり、非常に意義深い達成の一つでもあったと言える。文化的背景の異なる人と相互に理解し合う困難さと重要さを肌で学び、組織全体そして他者のために自分は何ができるのかを熟考し実践する貴重な機会に恵まれたことに、心から感謝している。そしてこの経験は、本会議終了後の日常でこそ生かされるべきであることを心に留めたい。多くのアラムナイや協力者の皆様に支えられ励まされながら、今年の本会議を参加者全員にとって学びの多い貴重な経験とすることができたこと、そして例え小規模でも日米間にかけがえのない絆を築けたことを、心から嬉しく誇りに思う。第 64 回実行委員として得た、人生で一度きりの貴重な経験を糧に、今後も力一杯精進していきたい。

大多和祐介

第 64 回日米学生会議を通して、自分の未熟さを実感させられ、またこれから自分には何が必要なのかを知ることが出来たと思う。

私は、幸運にも大学 1 年の夏にこの第 64 回日米学生会議に参加することが出来た。私は専門分野というものも具体的には持てておらず、ひたすらに吸収することが多かった本会議であったように思う。しかし、私に取ってこのことが大きな意味を持っていたと考える。なぜなら、ここで吸収した知識、価値観をこれからの大学生活に繋げられると考えたからである。私は、本会議中、RT の議論や夜中のディスカッション、食事中の会話、また自由時間の遊びを通して、個々人の考え方や姿勢、知識の豊富さ、そして優しさを感じた。そこから自分に何が足りないのか、何が必要なのかを考えさせられた。そして今、自分がこれから何をしてい

くのか方向をしっかりと見据えることが出来つつあるように感じる。

本会議中のレクチャーなどから学んだことも大きいが、得たものの中で最も大切なものはやはりここで得た仲間である。このように私を刺激してくれる、そして自分も刺激出来るように努力しなければと感じさせてくれる日米にいる 71 人の仲間たち。これから世界のどこかで活躍していくであろう仲間たちと共に歩んでいける、住んでいる場所やしていることは異なっていても、どこかで繋がっていると思える友を持てたことがこの夏最大の喜びであると感じている。 抽象的ではあるが、自分の中で大きな変革、未来に繋がる変化の起きた BEST SUMMER EVER であったように思う。

小田垣彩花

大学の期末試験を終え、その翌日が直前合宿、そしてアメリカへの渡航と慌ただしく始まった私の JASC は、まるで長い修学旅行に出かけたような夏でした。アメリカ、日本から多様なバックグラウンドを持つ 72 人の学生が集まって過ごした時間は、どの瞬間も刺激的で忘れがたいです。RT タイムの議論、レクチャー、フリーディスカッションなど頭脳系のことだけでなく、会社やミュージアムの見学、観光、レセプションなど、朝から晩までスケジュールがぎっしりで、それに加えて、貴重なフリータイムは休むのももったいなく、外出したり友人と語り明かしたりと貪欲に過ごした 1 カ月でした。英語が苦手だったので不自由や悔しい思いをすることもありましたが、言語に関しては日が経つに連れて、ネイティブの人も苦手な人も互いが歩み寄り、どんどんコミュニケーションが取りやすくなってきたと感じました。

海外で暮らした経験がない私にとって、アメリカの大学の寮に滞在できるだけでも貴重な経験でしたが、JASC を JASC たらしめているのはやはり場所だけではなく、EC の学生や皆様が綿密に考えてくださったスケジュール、そして何よりも志の高い参加者達なのだと実感しました。朝から晩まで一緒にいるので驚くほど速く全員の名前を覚えることができ、出会って数日しか経っていないとは思えないほど、まるで同級生のように全員を近くに感じることができました。普段の学生生活ではなかなか出会えないような優秀で才能ある多くの学生と一緒に過ごし、たいへん刺激を受けました。良かったことだけではなくもちろん後悔もありますが、得た経験と友人を、今後の人生の糧にしていきたいと思います。この会議を支えてくださった全ての方に感謝しています。ありがとうございました。

片山恵理

JASC の一番の魅力、それは‘自分’を知る絶好の機会を得ることが出来る点であると思う。私はそれを主に 2 つの点から感じた。

1 つ目は英語でのディスカッションである。私は非常に英語で苦労をした。アメデリの英語が分からず最初は途方に暮れていたが恥ずかしくなかなか分からないと言い出すことが出来なかった。英語力の不足は十分自覚していたが、自分がこれ程までに無駄に高いプライドを持った人間であることに気付き驚いた。しかし、分かったふりをしていても内容が掴めず議論に参加できないため、3 週間恥ずかしさを押し殺し、分からない事は分からないと言い続けた。その事で自分は他のデリと比べ何に劣るか、何に秀でているかを自覚できたと思う。

2 つ目は高いモチベーションを持つエネルギッシュなメンバーとの対話である。普段の生活の中で友達に自分の将来の夢を語り、それに向けた努力を見せることは恥ずかしくなかなか出来ない。しかし、JASC では毎晩のように自分がどう社会に貢献したいか、そのために今何を目標に頑張っているのか、今何をすべきなのかということを語り合う。相手のモチベーションの高さに刺激を受け、自分の考えの甘さ、専門分野における力不足、自信の無さを認識する。将来を真剣に考え、自分の強みはなんだろう、自分はどの役割で役に立てるのだろうと日々真剣に考える。

こうした経験を通し、自分と日々向き合い‘自分’を知ることが出来た。英語の上達や社会問題への見識を深めることが出来た点ももちろん大きな収穫ではあったが、このような相互に高めあうことが出来る仲間に出会えたことは JASC ならではのかけがえの無い経験であったと思う。これらの仲間とは JASC 後も時々集まり近況報告をする。その時に自分が胸を張って頑張

っている姿を見せられるよう、そして仲間に刺激を与えられるよう日々努力していきたい。

鹿山ゆかり

8月19日の朝、バスで去っていくアメリカの参加者を見送ったときのことは今でも忘れられない。本当に会議が終わるのだという実感と共に、もうこのメンバー全員で集まることはないのかもしれないという寂しさで胸がいっぱいになった。総勢約70人で過ごしたこの3週間は毎日が濃く、あっという間に過ぎて行った。昼間は分科会での活動やレクチャー、様々な場所の訪問をし、夜は友人とのお喋りに花を咲かせた。

JASCを通して私は多くのものを得た。分科会のディスカッションではアメリカ側からの参加者からの意見を聞き、自分の考えを別の視点から見るきっかけをもらった。また、各サイトで様々な場所を訪れたことでアメリカという国を少しではあるが知り、理解することができた。一番の収穫はかけがえのない友人ができたことである。3週間という短い期間だったにも関わらず、JASCの仲間の間には強い絆ができた。ファイナルフォーラムに向けて一つのものを作ったこと、朝から晩まで会議のことから学校のこと、さらには将来のことまで色々な話をしたことによるのだと思う。

JASC spiritという言葉がある。自分の限界を作らず、新しいことにどんどんチャレンジしていく精神のことだ。私たち一人ひとりがJASC spiritを持って自分の道を精いっぱい歩んでいく限り、第64回日米学生会議は永遠に続いていくと私は思う。

最後にJASCに関わって下さった方、JASCをサポートして下さった全ての人に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

川野さりあ

日米学生会議（JASC）との出会いはインターネットの新聞に掲載されていた、JASCのOBが書かれた記事がきっかけだった。現在は医師として活躍されているそのOBの方は学生時代、JASCの活動に明け暮れていたとのことだった。医学生にこの学生会議において居場所はあるのだろうかと不安をもちながらも、期待に胸を膨らませて応募したことを覚えている。

本会議が終わった今、あの記事に出会えて本当によかったと改めて思う。

JASCは、それまでの環境だけでは出会えなかったであろう様々なバックグラウンドをもつDelegatesやアラムナイ、有識者との交流の機会を与えてくれた。特に、アメリカでの1カ月を共に過ごした70人の64thJASCersとは、短期間でこれほど親しくなれるとは思いもしなかった。

JASCで最も印象に残っているのは、誰もがどのような場面であっても一生懸命であること、そして誰もがお互いを尊敬していることだ。何気ない会話から始まる熱い議論、それぞれの夢を語り合った長い夜、自由時間でのくだらない遊び。会議のコンテンツ中でも、オフの時間でも、常に自分の意見を真剣に聞いてくれる仲間がいる安心感があったように思う。仲間といたから、ディスカッション中の衝突や、議論で発言ができない悔しさまでもが今となっては良い思い出として美化される。

本会議が終わると、64回JASCの参加者全員が一斉に集まることはおそらくないだろう。私達は皆、未来に向けてそれぞれの道を歩んでいくわけだが、どの分野で活躍しようと、JASCでの経験や得た絆はどこかで活かされていくのだと感じる。そしてそれはまた、私達の使命でもあると考える。

川邊拓也

本会議が終了し、1ヵ月が経過した。毎日のようにSkypeで議論をし、プログラムを考えていた日々が遠い昔のように感じる。何をしていても心に何かしらの虚無感を覚えるのは、いつの間にかJASCが自分の生活の一部となっていたからであろう。

学生生活の集大成であり、最大の挑戦であったこの1年は、間違いなく自らの力だけでは乗り切ることができなかったであろう。よって感謝の言葉を記していこうと思う。15人の実行委員の皆。一番身近なところで喜びを分かち合い、共に悩み、考え抜き、苦しい時に支えてくれて有難う。このメンバーで、会議を創り上げることができて本当に良かったよ。64回会議参加者の皆。会議を最高のものにするべく、精一杯努力をし続けてくれて本当に有難う。一生懸命に考え抜く表情

に幾度となく刺激を受け、何かを達成した時の笑顔を原動力に最後まで走り抜くことができたよ。63回会議実行委員、参加者の皆。それぞれに夢に向かって挑戦をしている中で、いつも温かい気遣いをしてくれて本当に有難う。“We trust you”というメッセージに、何度も勇気づけられていました。

「先を見て点を繋げることはできない。できるのは過去を振り返って、点を繋げるだけだ。」2005年、スティーブ・ジョブス氏がスタンフォード大学にて残した言葉である。“Life Changing Experience”と称されるJASCが、どのように自分を成長させ、自分の人生を変えたのか現在のところ明確な答えは出ていない。しかし、JASCでの経験や出逢いは1つの点として、やがて1本の線へと結びつき、自らの未来へ繋がると確信している。“Once a JASCer, Always a JASCer”来年からいよいよ私も社会人となるが、JASCerであることの誇りと、JASCでの出逢いを糧にし、一層飛躍していきたいと思う。

最後になりましたが、日米会話学院の皆様、アラムナイの方々をはじめ、第64回日米学生会議の実現のために、多大なるご支援とご指導を賜った全ての皆さまへ感謝の意を示し、参加者の声とさせて頂きます。

キム・ヘジン

「JASC is life changing experience!」と聞いたとき、私はそれを信じなかった。しかしJASCがあっという間で終わってしまった今、JASCがこれからの私の人生にどのような影響を与えるかは言えないものの、JASCでの経験、JASCで出会った素敵な仲間は私の一部になり、これからもそうだろうと信じている。

三週間での活動はどれも大切な思い出だが、私にとって最も大切な時間はバークレーで何人かで集まり「Passion RT」と名付け、色々な話をした夜である。Passion RTでは自分の将来や恋愛観、家族、好きな引用文などを語り合った。参加者一人ひとりのバックグラウンドや考えていることが知りたかったものの、忙しい日程の中、深い話をする時間はなかなかとれなかったため、ここで何人かででも自分の人生の話を共有できたことが私には嬉しかった。

そして不思議なことに、私はそこで誰とも共有していない話をした。知り合って2週間くらいしか経っていなかったがなぜか共有したかった。ありのままの私を受け入れてくれる仲間には知ってもらいたかった。あの夜、自分の話をした勇気がどこから出たのかはわからないが、自分がどのような人生を生きてきてこれからはどのように生きていきたいかを素直に共有したあの仲間たちには心から感謝している。

また、自分のRTを含め様々な議論を一緒に行った仲間にも心から感謝したい。論理をたてて議論を進めながらも、情熱を忘れていない彼らには感動せざるを得なかった。知識が増えてくると感情的に冷たくなりやすい。少なくとも私はそうだった。そんな私に彼らは情熱を与え、熱い人間だからこそできることに気づかせてくれた。

JASCを特別な経験にするのは熱意を持って参加している一人ひとりの参加者だと思う。表面で見える自分ではなく、皮を剥いた自分、本当の自分を理解しようとする素敵な仲間たちに恵まれていた三週間を一生大事にしたい。そして、この大切な絆はこの先もずっとずっと続くだろう。

一期一会。Once a JASCer, Always a JASCer.

木村光太郎

自分にはJASCに参加する上でひとつの目標があった。それは自分にはない素晴らしいものを持っている人間と友達になることであった。人生において全ての人生の起点は素晴らしい人との出会いであると信じているからである。自分をその環境に置くことで、今までとは違った観点で物事を考えることができ、今までの自分になかった革新的な自分を見つけることができ、また尊敬できる人に出会うことで自分を常に高められる考えを持つことができると思っているからである。大事な大事な大学生活の夏休みの3週間を25万も使ってまで参加する奴らの中にはクレイジーで素晴らしい人は絶対いるに決まってると思った。そしてその予想は的中した。JASCerの中にはとても個性的な人が多く、尊敬でき、クレイジーな奴らもたくさんいた。その中で過ごした一ヶ月間は自分の人生に於いてまた新たな起点になったことは間違いのない事実である。自分はこの人間関係をいつまでも絶やすことなく、常に

刺激し合い、JASC が終わったと同時にまた普通の世界へと旅立っていくみんなの成長と成果を楽しみに期待している。今までの JASC の OB・OG の方々がしてきて下ったように、この仲間達なら未来の世界を良い方向へと導いてくれると信じている。そんな仲間を作れた3週間であった。

自分自身を見てみれば、中には自分が刺激を与えられた人もいるかもしれないが、周りの人との知識力と英語力の差が顕著に見え、自分の成長点かつ改善点を重々と感じる夏であった。少しでも早くこの問題を解決し、自分も自分がみんなに期待するような人間になりたいと思った。

涙も笑いも色んな感情が沢山あった 3 週間だったが、やはりそんな素晴らしい場を提供して頂いた、JASC の OB・OG の方々、企業や講師の方々、そして何より実行委員に心から感謝をしたいと思います。自分の人生を変える機械を作って頂き本当にありがとうございました。

櫻井千浪

昨年4月に第63回会議の合格通知を受け取ってから、一年半が経とうとしている。63 回参加者として、64 回実行委員としての自分を振り返って、自分は確かに変わったと感じる。その変化は何か。私が JASC を通して得たものは何だろう。第64回本会議が終わって2週間、まだ頭の中がぐちゃぐちゃで、その問いに明確に答えられるわけではもちろんないけれど、感じたことを書こうと思う。

まず、自分は将来何がしたいのかよく分からなくなった。これはマイナスに聞こえるかもしれないが、私にとってはそうではない。確かに焦りや、今まで深く考えてこなかった自分へのいら立ちは感じるけれど。JASC で沢山の人と出会い、いろいろな考え方、将来の道があることを知った。大多数の人が選ぶ道を必ずしも自分が通る必要はなく、自分がやりたいことに向かって新しい道を作っていけることも知った。大学卒業後に自分が進みたい道は何か、そのために今何をすべきか、もう一度時間をかけて考えてみようと思った。そして、今この悩みにぶつかったことは必ず自分にプラスになると信じている。

つい先日、JASCer と話す機会があった。そこで自分と同じ学年の友人たちはもうすぐ社会に出るのだと実感した。大学を出てからは学校というレールはない。すべて自分で考え行動しなければならないのだろう。まだまだ自分は学生と思っていたら、今その境界近くまで来ていることに気づいた。と同時に、私はこの時期に JASC をやったことで、自分の将来に真剣に向き合うパワーを得たと思った。そのパワーとは尊敬する JASCer の存在であり、彼らが真剣に悩み考える姿である。このような自分の変化のきっかけを与えてくれた仲間に、心から感謝します。

本会議の一ヵ月を「夢みたいな素敵な思い出」に終わらせず、一年半を通して得た自分の成長をこれからの人生に活かしていきたいと思う。

山東典晃

選考試験受験後に毎日郵便受けとメールをチェックしていた私は、日米学生会議の選考合格の知らせを受け取り、文字通り部屋を飛び回って大喜びしました。しかしそこに書いてあった "life-changing experience" という言葉にふと目が留まりその時は「なんだなんだ、随分と大げさだな」とやや穿った見方をしていました。

ですが、1 ヵ月近くのプログラムを終え今は断言できます。日米学生会議は確かに "life-changing experience" でした。様々な方々から援助していただき実現したプログラムは、「素晴らしい」の一言に尽きるものでしたが、それ以上に、そこで出会った人々に本当に大きな刺激を受けました。参加者全員が私にはないものを持っており、彼らと過ごした 1 ヶ月間は自分の 23 年間の人生に数々の新たな視点をもたらしました。

その中でも特に日本側アメリカ側に一人ずつ私の今後の人生を大きく変えるであろう出会いがありました。日米学生会議に参加するまでは一般的な医学生として既定の路線に乗っかり、惰性で生きていたとまでは言わないものの、無意識に設定した限界に縛られる人生を送っていました。しかし、彼らのバックグラウンド、考え方に触れることでようやく自分も「高み」を目指

す決心をすることができました。今後は日米学生会議での経験を生かし国際社会、そしてとりわけ日本に貢献できるような人材になるべく日々邁進する所存です。

杉岡昌太

実行委員として参加した第 64 回日米学生会議を通して学んだことは社会に蔓延る様々な問題は単純なものではなく、実際に当事者の声を聞き、そして現場を見ることにより真に理解に近付けるということでした。初めての渡米ということもあり、今年の会議は去年とはまた違った経験をすることができたと思います。アメリカの広大さと経済力、人種の多様性など日々毎日が大変貴重な体験でした。

そして議論においてはアメリカ側と日本側の観点を総合することによって、日本の学生だけでは決して生まれないような発想や、議論構築が生まれ、世界観がたった約一カ月という限られた期間の中で広がることを改めて感じさせてくれました。学生という位置づけを超え、社会、世界の一員だという意識の下集まった参加者全員が会議においての自分の役割を実行し、お互いを感化していたと思います。こういった経験に依り、これからの未来を見据える大きな先見性を得られたのではないかと自負しています。また、会議の本質として、

また、参加者の絆という側面では未来永劫に繋がる友情を作り上げることに成功したと心の奥底から信じることができます。この絆が今後の将来に最良の影響を大いに与えてくれると確信しており、そして私自身も彼等に良い影響を与えることとなると感じています。最後に私を含めまして、それぞれの参加者が今後の課題を見つける機会を得ることができたと思います。この会議運営に協力して下さいました関係各位にこの場を御借りして感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。これからも精進して参ります。

杉山和

ダラス、マディソン、バークレー／サンフランシスコ、シアトル。JASC の本会議のサイトが４つであるということから、物語の「起承転結」を連想した。

「起」ダラス

SMU に到着したとき、アメデリから熱烈な歓迎を受け、いっぺんに多くの出会いがあった。実行委員としての責任、アメリカでの生活の経験がなかったこともあり、緊張していた。去年も参加したとはいえ、毎日がとても刺激的に感じた。分科会の活動も始動し、スカイプでしか話したことがなかったメンバーと話すことができて、感激した。

「承」マディソン

マディソンでは、とにかく自由時間が多く、参加者と一緒に美しい UW マディソンのキャンパスで息抜きすることもできた。タレントショーも開催され、参加者のことがだんだん分かってきた。

「転」バークレー／サンフランシスコ

第 3 サイトまでくると、分科会ではファイナルフォーラムを意識し始める。議論の目的の違いなどから、うまくコミュニケーションがとれなくなるなどの問題が出てきた。分科会コーディネーターとして問題の解決どころか何が問題なのかも把握できていなかったことが悔しかった。

「結」シアトル

ファイナルフォーラムを前にして、分科会では成果をまとめる必要があったこと、人間関係の問題も見て見ぬ振りをしていられなくなったことから、議論の途中で時間をとり、腹を割って話し合った。結果的に、会議終了前にわだかまりをなくし、全員が前向きな姿勢で発表に臨めたと思う。

実行委員としての仕事を教えてくれた 63 回実行委員、一年間を共にした実行委員のみんな、応援してくださったアラムナイの皆様、たくさんの思い出をくれた 64JASCer のみんな。本当に多くの方々に支えられました。本当にありがとうございました。

竹内正人

「衝突と理解」今回の理念としても掲げられていたこの言葉が、JASC の全てを物語っていると言っても過言ではない。人間関係、異なる意見など様々な衝突が本会議ではあった。しかし、そこから生まれた理解は何にも代え難いものになったことは事実である。衝突は、きっと相手の考えを知りたいという素直な気持

ちがあったからこそ生まれたもので、それが異文化理解には必要なことであると感じた。

第一次選考の際、偏見がこの世の中の問題を引き起こしている基本的なものであると述べた。文化的な相互理解をする為には、前提に自分が抱えている相手に対しての偏見を取り除く必要がある。そう考えてきた私であったが、本会議中の議論を通して互いのことを知ることによって偏見というものはなくなっていくのだなと改めて感じた。そして、互いを尊敬する心こそが最も相互理解には必要であった。

最後に、私が好きな現象を紹介して終わりたい。百匹目の猿現象という言葉がある。宮崎県串間詩の幸島に棲息している猿のある一頭が芋を川で洗って食べるようになり、その行動をする猿がある一定の数を超えると群れ全体に伝わり、さらに広い範囲で同じ行動をする猿が見られた。つまり、「ある一頭の考えや行動が広がり、ある一定の数に達した瞬間に浸透しさらに広く伝わっていく」ということである。この事象はきっと人間にも置き換えることが出来ると信じている。１人の小さな人間がこの世の中に影響を与える力は微々たるものである。しかし、この現象のように人間も自分が経験したこと感じたことを身の周りの人から伝えていくことによって、より大きなコミュニティに広がり、人々の意識さえも変えることもできるかもしれない。私は、最初の一頭の猿になりたい。それが第64回日米学生会議の使命であり、これからの人生においての自分の指針であると思う。ここで得た経験を無駄にせず、そして後ろを振り返らず、ハングリー精神を忘れず次のステージに挑戦していきたい。

中野舜一郎

JASC では様々な経験をすることができましたが、大きくわけて３つの気づきがありました。

１つめは、英語の能力についてです。私は英語を使って意思疎通をした経験はJASC が初めてでは全くないのですが、JASC で講演を聞き、ディスカッションをすることに当初は予想以上に困難を感じました。終わってみてもまだ十分なレベルではないと感じているので、プログラムは終わってしまいましたが、今後も精力的に取り組んでいきたいと思っています。

２つめは、海外で活躍する同年代の日本人についてです。初めはアメデリに日本人が多く驚きましたが、最終的には彼らから多くの刺激をもらうことができました。当然ですが、日本にいると海外にいる日本人と会う機会がないために、日本の中で価値観が閉じてしまっていたところがあったと思います。彼らの言語能力・問題解決能力や、世界観の違いに驚嘆すると同時に、自分も自分の道でもっと能力を高めなければと思わずにはいられませんでした。

３つめは、アメリカ人との考え方の違いです。分科会全体感想文にも書きましたが、分科会で議論をしていると、日米で考え方が違うと感じる場面が少なからずあり、面白かったです。分科会の他にも、移民裁判所のフィールドトリップでは、日本人は移民という存在自体が身近でないために、移民の受け入れに対して消極的な態度を取る人が多かった一方で、アメリカ人は積極的な態度の人が多かったように感じられ、時には仲が悪くなってしまいそうなくらい意見が対立することもありました。このように意見が食い違う場面では、議論一般に言えることですが、単に水掛け論の応酬にするのではなく、相手の意見がどのような背景から発言されたものかを思い遣り、理解することが大切だと感じました。

私は来年就職が決まっているのですが、JASC で得たものを活かせるよう、世界に対して広い視野を持てる人間になることを目指して努力していきたいと思います。

中道洋司

「JASC で何が印象に残っている？」アメリカから帰国後、ある友人が私に尋ねた。私は真っ先に以下の経験を話した。

第一サイトダラス。当初私たちの RT では、議論がかみ合ってなかった。ただ個々に述べる意見であったようにも感じた。これからどうなるのか、不安がこみ上げてきた。あるとき、同じ RT のジャパデリに伝えたところ、その不安感を同じように抱いていた。そこで、ある日の夜、RT でどのように議論を進めるのかアメデリとともにメンバーで話し合った。ひとりひとりが、いまの抱えるさまざまな課題を言い合った。私も、

議題をもっと詰めたうえで議論をすべきであることを率直に伝えた。それぞれが抱えていた問題点や不安感が共有され、解決策を考え抜いた。気づくとすでに、日付が変わろうとしていた。それ以後１０人がひとつの RT として、チームとして活動ができた。だからこそ、最終サイトにいたっては、自らの価値観や考えを迷うことなく発言し、理解できなかった点は確認する作業を遠慮することなくできた。さらにファイナルフォーラムでは、自信を持って私たちのグループとしていたった成果を伝えることができたと確信している。

「じゃあ、JASC ってどんなところ？」次にこう尋ねられ、私は答えに窮してしまった。あまりにも多くの経験があり、まとめることは困難であったからだ。しかし、いまならこう言うだろう。

JASC とは、お互いを無意識に高めるかけがえのない非日常的な空間、であると日常に戻ったいま考えている。その空間とは、上述した RT に限らない。７１の魅力的な濃い個性によるものである。私は、そんな彼らと思いっきり議論する機会に恵まれた。将来の夢からとるに足らない事柄まで、熱中して話したことが今も浮かんでくる。だからこそ、そんな刺激的な環境を共につくった７１人の仲間、そしてかげながら支えて頂いた数多くの支援者の方々には、感謝感謝である。

西村優希

私は JASC から帰ってきて久々に友達や家族に会い、「アメリカでの会議はどうだった？」と聞かれたら、まず「良い経験だった」と答える。

多才で個性の強いデリが集まっており、本当に「凄い」の一言しか出てこないような沢山の人に出会い、刺激を受けたということが私にとって JASC で一番意味のあったことである。夜遅くまで話したり大学の中を散歩したり、近くのお店に遊びに行ったことは、一生忘れられない思い出だ。面白くて優しいバディ、ルームメイト、何でも話せるデリ、アドバイスをくれたり励ましたりしてくれた EC、会議を支援してくれている方々には、感謝してもしきれない。

また、第 64 回日米学生会議の開催地がアメリカであったこと、そしてアメリカ渡航が私にとって初めてであったということから、アメリカの多様性について感じることも出来た。アメリカが人種のるつぼと呼ばれるように人の多様性に富むことは全く周知の事実であるが、実際にアメリカに行き、様々な人種の人々が共生し、アメリカ人としてのアイデンティティを共有しているところが非常に印象的で、アメリカから学ぶべきことは多いと感じた。

初めて春合宿で他のデリに会ったとき、すごくショックを受けたのを今でも覚えている。自分はここにいるのに十分な何かを持っていないと感じることも多かった。そのことに対し、具体的に行動を起こせない自分自身にもどかしさや苛立ちを感じたこともある。英語能力に関する自信は JASC に参加してから、アメリカに行ってから完全になくなった。しかし、だからこそむしろ JASC がこれからの私を変える出発点となったことは間違いない。

野口ゆかり

私は日米学生会議で大きく 2 つのことを得たと思っている。1 つは、自分のことを自分で見つめ直すきっかけ。2 つ目は素敵な仲間たちとの友情である。

高校まで、四六時中テニスに打ち込んでいた私は、高校 3 年で部活を引退した後、大学に入ってから必死になれるものが見つかられず、なんとなく過ごしていた。「変わるために何かしなければ」と思っているところに姉が日米学生会議の存在を教えてくれ、挑戦してみようと思った。しかし、応募しようと思った直後、これは自分にはとんでもないことだと気づいた。エッセイのために何時間もパソコンとにらめっこしたり、姉に付き合ってもらい家で面接の練習をしていたら、ボロボロで、半泣き状態になったりした。合格通知を見たときは、こんな自分でいいのかと恐れ多く思うと同時に、とても嬉しかったのを覚えている。

また、実際に日米学生会議の活動が始まってからも私は自分の無知さ、心の狭さ、弱さなどを痛感させられることが多かった。特に、所属していた「災害復興と社会の再構築」分科会では、本会議中多くの問題に直面した。分科会で唯一の帰国子女であったのに、英語で苦しんでいる仲間に上手く簡潔に訳してあげられないフラストレーションやプレッシャーを感じたり、分科会の仲間との議論へ臨む姿勢について衝突があっ

たりと、とにかく色々あった。

しかしJASCの活動中に落ち込んでいたり、本会議中にフラストレーションを溜めてしまったりしたときにも頑張れたのは、仲間の存在のお陰だとも思った。JASC メール(参加者同士で手紙を交換する制度)で励ましの言葉をくれる仲間もいれば、どうしたらいいのか夜遅くまで一緒に考えてくれる仲間もいて、本当に支えられっぱなしの一ヵ月だった。好奇心旺盛で楽しいことも真面目なことも全力でできる仲間と過ごせた一ヵ月は最高だった。JASCer との友情は私にとって一生の宝だ。ありがとうございました。

野地洋平

私にとって第 64 回日米学生会議を一言で表すとすれば、色々な意味で自分の Reconstruction であった。とにかく自信をなくしたり、一喜一憂したりすることが多かった。もちろんレクチャーやディスカッションで英語が聞けない、話せないという事実は、自分のアイルランド留学が正当性を失うことを意味していた。しかし、それでもなおアメリカで得たものは計り知れない程大きいと思う。分科会活動を別にすれば、最も有意義な時間は間違いなく JASCer と話す時間だった。寝る時間を削ってでも話したかったし、ここまで心を開いて、正直にディスカッションできたことは、素晴らしい体験だった。

修士課程ではとかく自分の専門分野に特化することを求められる。JASC の良い点は、医学、物理学、政治学など自分と違う様々な専攻の学生と、様々なテーマについて、外国で議論をできることにあった。というか、それに尽きるかもしれない。気が付けば71名の間に壁がなく、ただただ率直さと情熱が残っていたと思う。

自分が限界までJASCに貢献できたかと言えば、それはノーとなるだろう。至らない点も沢山あった。また正直、JASC が私にとってどれほど重要なものとなるかは、これからの自分の「振る舞い方」に依存していると思う。JASC での体験を意味のない研修旅行にしたくないし、そうするつもりは毛頭ない。

これからも学生生活は 1 年半続く。JASC を終えた今、私の目標は地元福島を変えることである。変えるきっかけを作ると言うべきかもしれない。いずれにしても、経済学を修める者として恥ずかしくないよう、社会に貢献したい。

Hey, JASCers!! Cheers from the future Mayor of Fukushima.

廣野允威

「JASC は Life-changing event だよ。」言うのは簡単ですが、どのような人間にも最低 3 回は訪れると言われる人生の転機がそう簡単に起こりうるものなのか。正直に言うと JASC に参加する前の私は英語を話す機会がほしいという至極単純な理由で応募をしました。ですが 24 日間に及ぶアメリカでの生活を終えて自分の中に大きな変化が訪れていることを自覚することができます。大学に入学してから特に、私という人間は表面上体裁よく取り繕っていますが、その一方で、多くのことに失望しあきらめる傾向のある人間でした。例えばそれは自分が今いる環境であったり、周りの人との人間関係であったり様々です。一見人あたりがよさそうに見えても、深い失望に沈む私の心の底からは何も魅力的な感情が生まれてこず実に薄っぺらい人間でした。そのような私に変えるきっかけをもたらしてくれたのが 70 人の JASCer 達でした。多様なバックグラウンドを持つ彼ら、彼女らに共通していたのが、様々な問題や人々に真摯に向き合おうと努力する姿勢でした。彼ら、彼女らと接するうちに自分の中で確実に変化が訪れました。「自分の意見や感情をもっと表に出してもいいんだ。この人たちだったらそれを受け止めてくれるかもしれない」と。ですから私は本会議を含めて拙いながらも自分の率直な意見や思いを表に出してきたつもりでした。それが時には激しい怒りからくる感情の吐露であったり、人を困惑させる支離滅裂な意見であったりしましたが、久しく忘れていた自分の情緒の躍動をひしひしと感じました。JASC に出会えたおかげで自分が何に喜び、何に怒り、そして何に涙するのかを再認識することが出来ました。厳密にこの変化を Life-changing event と言ってよいのかはもう少し時間が経ってみなければわかりませんが、私の中で起きたこの大きな変化を通して、自信を持ってこう言うことができます。「JASC は Life-changing event

の“きっかけ”をもたらしてくれるよ。あとは君次第だよ」と。

ヴー・ホアン・ミン

日米学生会議は私にとって非常にインパクトの大きいプログラムでした。参加する前から過去の参加者などの話で「Life-changing Experience」と言われていましたが正直なところ参加するまでは少し疑わしいものでした。しかし、会議が終わり、私個人が一番得たものは「自分でいる自信」と「信頼できる仲間」、そしてそれは、これからの人生でとても大事な物でした。お互いの意見を尊重する場である日米学生会議の議論で周りを気にせずに積極的に自分の考えを言える3週間は、私に自分でいる自信を与えてくれました。個性豊かな人たちがいつも周りにいる環境で、どうやって他人を尊重し、その集団に貢献できるかという課題に向き合ううちに、今までにわからなかった人に対する自分のインパクトがかすかに見えて来、今後の自分はどうやって成長して行くべきかという問題に対してヒントをもらうことができました。そして3週間毎日70人と共同生活し、みんなといい友情を築け、その中でも特に心から信頼できる仲間ができました。色々な議論の中でお互いの正直な気持ちでぶつかり合い、一緒に生活する中で、壁のない関係を作っていくことができました。知り合って3週間だったが、今までいた長年の友達よりも仲良くなった人もいて、これからもずっといい友達でいれる仲です。日米学生会議に参加して人生が変わったかはまだわからないが、これからの自分の人生を形成して行くうえで、とても価値のある「材料」を手に入れたことは間違いないです。

藤川健太郎

私がJASCに参加したのは、アメリカの文化やアメリカ人の考え方を知るとともに、アメリカ人に日本人としての考えを伝えたかったからである。そうした私の希望は十分に叶えることができたと思っている。
まず、アメデリとの日常的な接触や議論、またアメリカ開催だったこともあいまって、アメリカの文化に触れることができた。それはまず大量消費文化でありファスト・フードの文化であり（サブウェイにポテトチップスが付いてきたときには驚いた）、個人主義的な文化だった。こうした文化的側面に加え、人種問題や、自らの家族の問題や過去を打ち明けるアメデリもおり、日本との違いを感じさせられた。

アメデリとは、AKB48や恋愛などのくだけた話も多く楽しんだが、会議中のスペシャルトピックの時間やレクチャーの前後の時間などには真剣な討論も盛り上がった。後者の例としては、日本人の強制収容所やホロコースト、政教分離などについて話し合った。アメデリが一方的に議論を主導するわけではなく、ジャパデリも対等に議論を戦わせることができていたと思う。私自身も、（場合によっては過度なほどに）議論において積極的に発言できたと感じている。

そして忘れてはならないのが多くの友達を得たということである。ファイナルフォーラムの前日、分科会発表の準備をしているときのアメデリとの会話が私たちの共通認識を示している。彼女は言った。「私たちの分科会はとてもうまくいったと思う。でも私はね、JASCのなかで一番大切なものはファイナルフォーラムじゃないと思うんだよね」。JASCで得られた最大のものはなにか、と聞いた私への返答はこうだった。「仲間、かな」。

藤田耕己

JASC用のメモ帳の最初のページに書いた初心。人とふれあい、貪欲に学び、自分の世界を広げる。行きの飛行機の中で、JASCに応募した時からの思いを書き留めておいた。今この言葉を見ると、私が思っていた以上に自分の頭の中で考えが広がっていることに気づいた。本会議が始まり、いきなり言葉の壁にぶつかったと感じた。第一サイトのダラスでのこと。移民裁判所で話し続ける講演者を前に、隣の参加者に要点を聞きながらメモを取ることしかできなかった。講演後、頭の中に何も浮かんでこないことにただただ悔しかった。私はこの会議にどのように貢献することができるのか―そんなことを考えているとき私の会議中の行動が私の気づかないところで周囲に影響を与えていたことに驚いた。参加者間で手紙のやり取りをするJASC mailの中でアメデリの一人が、私の講義への姿勢を見て自分も勇気付けられたと書いて送ってくれた。独創

的な意見、リーダーシップ、場を盛り上げる…いろいろな貢献の仕方がある中で、全世界共通で人に影響を与えることができる事の1つに情熱(passion)があるのだと思う。生きがいを見つけ、貪欲に学び、皆と刺激し合いながら歩んでいく。このプロセスを1ヶ月弱の期間で学ぶことができたことは私にとっての宝である。Passion の支える努力と協力もまた不可欠である。世界中の人とつながり、彼らと話をするために教養と語学を学ぶ。これを達成するための確固たるモチベーションとなんでも語り合える友人をJASC に参加することで得ることができた。ここで得たこと、学んだことはこれからの生活の中で何にも代え難いものになるであろう。この夏の記憶と体に染み付いた経験、思い出をこれからの生活に精一杯反映させていく。

松浦理咲子

私の学生最後の夏休みは、決して忘れることのできない、最も印象深いものとなりました。本会議は3週間という短い期間ではありましたが、素晴らしい70人の仲間と共に英語を公用語とする場で生活し、濃密な時間を過ごしました。第64回日米学生会議の設営に尽力し、貴重な体験をさせてくださったECやアラムナイの皆さんに感謝しています。

実は当初、私はこの日米学生会議に申し込むのを少しためらっていました。選考時期に就職活動が重なっていたためです。就職活動が長引けば本会議にまでもつれ込む可能性もありましたが、幸い早期に内定が出たためJASC の活動に打ち込むことができました。

来年は社会人なので私自身がECになれないのは残念ですが、4年生として行ったということに大変意義があったように感じます。私は大学で安全保障の授業を英語で受けており、申し込み当時は「安全保障と日米」の分科会を希望していました。しかし就職活動を経た後に「現代社会における企業活動と倫理」の分科会に参加できたことで、より広い視野と実感を持って本会議を過ごすことができました。

海外で活躍している企業に興味があったので、実際にアメリカの企業を見ることができて本当に勉強になりました。フィールドトリップで様々な企業、工場を訪れることができたのも日米学生会議ならではの体験でした。実際にお話を伺い、質問をさせていただくことで、机上とは違った理解を広げられました。訪問後にデリ同士でディスカッションをすると日米間で感覚や常識の違いがわかり、身を持って文化交流の必要性を感じました。

このように意識の高まる貴重な体験ができたことはすべて賛助いただいた企業、財団、アラムナイの方々の協力あってのことであり、大変感謝しております。自分も今後はこの日米学生会議という伝統ある組織を支える側になれるよう成長していきたいと思っております。

三浦愛

JASC が終わり、いつも通りの日本の生活に戻った時、「JASC での1ヵ月は夢だったのかな？」とふと思った。日中には熱く友人と議論し、夜は皆と過ごすために夜更しをしてまでパーティーをしたり、寮の共有スペースに集まってゆっくりお話をしたり。70人の友達と寝食を共にし、共に学び共に遊び、時にはぶつかりながらもお互いの事を自然と理解しするようになったこの環境が居心地良かった。分科会の時間で必死に自分達の意見を伝え合った事も、朝の4時まで将来の話をしたことも、Wisconsin で友人と急に思い立って、夜中に大学のそばの湖に飛び込みに行った事も、どれも愛おしい経験だった。だからこそ、一人の生活に戻った時、どこか空虚な気持ちになった。しかし、私にとって、JASC はただ友人と仲良く交流する場ではなかった。JASC は振り返れば振り返る程、自分自身をより良く知る材料、そして将来への方向性が見えてくる材料である。小学校時代を全部アメリカで過ごした身として、自分の帰国子女としてのアイデンティティや自分の今後を様々な視点から考え直すきっかけとなった。また、「憧れ」「英語」「普天間基地問題」「TPP」など、一種の対米ステレオタイプがある日本社会だが、私にとっての「アメリカ」は何なのか、今後どう向き合いたいか、という事についても多いに考えさせられた。JASC の終わり際に「JASC を Life-Changing Experience にしたい！」という周りの熱い思いを何度も耳にした。私はJASC が Life-Changing Experience になるかどうかは今後の私次第だと思っている。数え

切れない程貴重な材料をこの1ヶ月間で享受したが、それを振り返って消化して自分のものにするには今後何年も何十年もかけていきたいと思う。私にとってJASCはそんなLong-Lasting Experienceになって欲しいと思っているし、なると確信している。71人がJASCとして集まる事がもうないであろう事には多少の空虚感はやはり感じる。けれど、次会う時までに自分自身前進していこうという気持ちが今では勝っている。JASCは夢ではなかった。次会う日を楽しみにしている。

森田修弘

JASCでの1か月はあっという間に終わってしまった。しかし、今振り返ってみると第1サイトのダラスでの出来事は遥か昔のことに思える。それは何故か、それだけJASCでの毎日が濃かったということである。A Life-Changing Experience. JASCの宣伝にはこのように書いてある。果たしてJASCに参加して自分は変わることができたのか、逆に自分は人が変わるようなものをJASCに提供できたのか、その答えはまだ出ていない。JASCをきっかけにこれから自分は変わることが出来るか、そう聞かれれば即答できる、YES.

JASCでは数多くの魅力的な同年代の学生に出会うことができた。十人十色とはよく言われることだが、JASCの参加者は皆個性豊かで、彼らと日々を過ごすことは最高の喜びであった。この出会いこそがJASCの魅力であり、人生の財産になるものである。毎日刺激を受け、新しいことを学ぶ。このような日々を過ごすことは簡単なようで難しい。しかし、JASCでは分科会の時間以外にも移動中、食事中、フリータイムと時を選ばずに、時間さえあれば社会問題や哲学的な内容について真剣に議論を交わすことができる。自分の専門外の内容でもJASC特有のハンドサイン“C”（clarification）や“T”（translation）を使うことで周りに助けてもらうことができる。JASCとはそのように恵まれた環境であった。

JASCを通して得たものは非常に大きい。それをしっかりと吸収し、自分のものにし、周りに広げていく。そして、将来社会に貢献をできるような人間になる。これはJASCerに課された義務であるように思える。

“Try not to become a man of success but rather try to become a man of value.”
これはアインシュタインの言葉であるが、JASCerであったことを誇りに思い、“価値ある人間”になれるよう努力を重ねていきたい。

森田真弓

私の人生において日米学生会議とは、どのような存在であったのだろうか。第62回日米学生会議にデリの一人として参加したとき、その問いに対する明確な答えは出なかった。実行委員の一人として参加した第64回日米学生会議本会議を終えても、その答えは未だ出ていない。本会議自体は1ヵ月で終わってしまうが、日米学生会議は長きに渡って人生に影響するからこそ、きっとこの問いに対する答えが明確になるにはもっと時間がかかるのだろうと思う。

参加者として参加すること、実行委員として会議を運営していくこと、そのふたつは大きく違った。ただ、楽しく、素晴らしい経験を積ませていただいた参加者の時と違い、日米学生会議の運営を担い、日米学生会議という場を提供する実行委員としての参加は辛い時もあった。それでも最後までやり遂げることができたのは第64回参加者のみんながいてくれたことと、陰ながらサポートしてくださるアラムナイの方々、その他協力者の方々のおかげである。実行委員として参加することで、日米学生会議がいかにたくさんの方の支援によって成り立っているのかを知った。

デリ全員が満足できていなかったとしても、一人ひとりが第64回日米学生会議を通じてなにかひとつでも学んだことがあったら嬉しいと思う。

私は実行委員として参加することで、ここには書ききれない程の多くのことを学び、とても貴重な経験をした。皆様、本当にありがとうございました。

八木澤龍大

例えるなら花火。たくさんの人々に支えられ、じっくり精魂込めて作り上げた第64回日米学生会議本会議は、一瞬の閃きの後、鮮やかに幕を閉じた。決して消えることない光を心に焼き付けて。今思えば、日米学生会議は私にとって「再生」であり「挑戦」、そして

「夢」への道のりであった。

私は社会人経験者である。就職先が不況の中で破綻の後、縁と周囲の助力を得て再び大学で勉強できることになった。だが、私は素直に喜べずにいた。同い年の友人は社会で活躍する中、自分は大学に逆戻り。そんな中で周囲の厚意に甘える自分をふがいないと感じ、不安と焦りから私の心には大きなヒビが入っていたのだ。私は何とか 2 度目の大学生活を意味のあるものにしようと必死だった。そんな中、私は日米学生会議に出会った。2011 年開催の第 63 回会議では参加者として、様々な知識を吸収しつつ、自分の限界と闘い「挑戦」し続ける姿勢を獲得した。さらに、将来は日米学生会議のような意義のある教育プログラムを企画・運営し、学生の学びに寄与したいという「夢」が明確になった。そして第 64 回会議の実行委員を務めることができ、私の「夢」につながる道を歩む機会をいただいた。夢中になって第 64 回会議の準備を進め、自分の「夢」に直結するノウハウを吸収する過程で、私の心は以前よりも強靭になり、ヒビもきれいに治りつつあることに気づいた。本当に意義のあることを学んでいる実感、人のためになることを作り出している実感が、私を「再生」してくれたのだ。日米学生会議を経て、私はまた自分の未来を信じて歩いていくことができる。本当にありがとう。

最後になりますが、日米学生会議で出会った全ての方々に心より御礼申し上げます。Alumni の皆様、IEC の皆様、日米学生会議後援者の皆様、本当にありがとうございました。そして 64th JASCers、これからもお互いに切磋琢磨し合える仲間でいてください。これからもどうぞよろしくお願いします。

山下祐里奈

JASC と関わり、約 1 年半が経つ。昨年の 2 月に JASC に応募し、その年の本会議に参加者として参加した。「JASC を次の世代に引き継ぐ架け橋となる」…そう志して、ちょうど 1 年前、私は第 64 回日米学生会議実行委員長となった。

それから 1 年間、実行委員長として、JASC の事を考えない日など 1 日もなかった。人生で初めての経験ばかりで、悩み、戸惑い、自分の限界に幾度となく直面した。そのような中だからこそ、背中を押してくれる 63 回会議の仲間や助言を下さる JASC の先輩方のありがたみを強く噛み締め、その 1 つ 1 つの言葉に救われていたと思う。また、実行委員会として、様々な外部の支援者の方々と触れ合う機会があった。参加者としては決して気付く事のなかった、JASC を影で支えてくださる多くの方の存在を知り、改めて JASC を創り上げる責任感、JASC に関われるありがたみを感じた。

そして迎えた本会議。実行委員、参加者の 1 人 1 人がそれぞれの全力を尽くし、「第 64 回日米学生会議」に貢献し、創り上げていた。課題に直面し悩む者、他の参加者を鼓舞する者、イベントや議論をリードする者、全体を俯瞰的に観察しまとめる者等、各々がその役割を果たしていた。やがて会議が終盤に近づくにつれ、全体がまとまり始め、1 つの大きな家族のような、独特な居心地の良い空間が形成されていくのを感じた。まさにそれは「非日常」であった。本会議が終わった今でもその余韻が消えず、毎日仲間を想う日々が続いている。

第 64 回日米学生会議は終わったが、私の中での JASC はいつまでも終わらないだろう。JASC で出会った仲間たちは永遠に、尊敬できる親友でありライバルである。そして、JASC の先輩方の背中を見つめ、追いかけ、自分も未来の JASCer たちに何かを与えられるよう日々努力を怠らず、いつまでも JASC に関わり続けたい。

何より、JASC に関わってくださった全ての方々、そして私の周りの全ての人々に、心より感謝している。JASC に出会えて、本当に良かった。ありがとうございました。

横田真彩

高校 3 年の冬に出会い、何か強い魅力を感じ、憧れてきた舞台。私にとって JASC はそうした夢舞台だったから余計に、貢献したい思いは強かった。だが活動開始から常に頭の中にあったのは「自信がない」という言葉。特に本会議以降は、予想外に大きかった言語の壁も含め、何度も悔しさを味わい、自分に失望した。だが、JASC はそんな私にもしつこく、沢山の励まし

や挑戦するチャンスを与え続けてくれたと思う。それは“JASC mail”での仲間からの温かいメッセージであったり、真夜中頭が回らなくなるまでJASCのハンドサインを駆使して追いつこうと必死だった英語での議論であったり、様々だった。それらがすべての失望を自信に変えたと言えば嘘になるが、自分と周りを少しずつ知り、小学校で学んだはずの、どれだけ人は多様なのか、そして、多様だからこそ良いのだということを、19歳の夏に初めて心から理解させてくれた。そしてそれが徐々に自己をも認めていくことにつながったと思う。

新興国のプレゼンスが高まる中で、日米関係の在り方が今一度問われる時代。JASCの存在意義を疑う声も上がるかもしれない。だが、JASCの歴史が示している様に、「人」の多様性を知り、真の意味での理解を、歴史ある「日米間」で行えたその確かな事実こそが、社会に出ても私たちを幾度となく強く勇気づけ、将来への希望を見出させてくれるのだと心から思う。現実はそんなに甘くないと批判されるかもしれない。しかし、この夏を経て、外交もすべて「人」が関わるものならば、そこに不安よりむしろ大きな希望を感じる様になったのは、私だけではないはずだ。

関わって下さったすべての方に心から感謝し、次の目標の「JASCerになったことが人生の転換期だ」と言える自分を目指し動き始めたいと思う。まずは来年度の実行委員という頂いた機会をしっかりと全うし、貢献したい。大好きな家族の様な仲間ができたこの夏を、絶対に無駄にしない。

饒平名玲美

よく、JASCは“Life-changing experience”だと言われる。私にとってこれは、日米学生会議の1ヵ月間の経験だけではなく、その間築いた今後一生続くであろう日米を超えた学生の友情であった。今までは接点が全くなかった同世代の学生と、約1ヵ月間24時間寝食を共にし、様々なイベントを一緒にこなしながら、時には衝突や意見の食い違いを経験して深めた絆こそ、日米学生会議で得られた最も貴重でかけがえのないものだった。

私がJASCに応募した動機は大きく2つあった。まずは、大学で専門的に学んでいる気候変動問題に関して、日米の学生を交えて今後の展望について議論をしたいということ。そして、一生に残る友人を作りたいということであった。だが、人と深く関わることや自分の素を出すことを無意識に避けてしまう性格の私は、本会議直前は正直、大きな不安と緊張に苛まれていた。これから約1ヵ月間も団体行動をとる上で感じるだろうストレスや、自分が他の参加者から受け入れられないのではないかという不安を抱え、出発を躊躇する程であった。しかし本会議が始まり、予想していたような事態に追い込まれたかと言えば、答えは“NO”であった。もちろん、何の問題もなく1ヶ月を過ごした訳ではない。むしろ問題があったからこそ、友人と団結、相談し合って解決方法を探ったことで、無意識に本当の自分をさらけだしていた。こんなにも素の自分をさらけ出せるほど安心できる友人や心地のいい場所に巡り合えたのは、いつ以来であろうか。

こうやって深く関わることができ、お互い良い所、悪い所も素直に指摘し合えるかけがえのないJASCの友人たちとは、将来に渡っても交流を続け、お互い刺激し合い支えあっていくことができると確信している。彼らに今後も刺激を与えられる存在であるよう、背筋を正して、これからも意欲的に何事にもチャレンジしていきたい。

林真希チェルシー

去年出会った大学の友達に勧められて、何気なく応募したJASC。実を言うと、そこまで日米関係に純粋に興味があって惹かれたのではなくて、日本やアメリカにいる国際関係に関心を持っている学生と出会ってみたくて応募したと言う方が動機としては大きかったと思います。今までの人生でずっと、自分のアイデンティティに悩んできた私に、何か少しでも答えを探すにあたってのヒントが得られればいいな、そんな軽い気持ちで第1次選考の書類を送りました。今思えば、その瞬間から私のLife-Changing Summerはもう始まっていたのかもしれません。5月から事前勉強や議論を重ねに重ねて臨んだ本会議。帰国した今振り返ると不思議な程、ネガティブな思い出が1つたりとも思いつきません。楽しくて楽しくて楽しくって、刺激的で、

温かくて、面白かったアメリカでの日々。毎日が濃くて、有意義で、1秒1秒人生の楽しさを噛み締めるように過ごしていたのを覚えています。沢山笑って沢山泣いて、沢山熱く議論して、沢山くだらない事をして、沢山遊んで、沢山感じて、沢山感動させられて…こんなにも全力で過ごした日々は今までなかったという程、数えきれないものを吸収し続けた 1 ヵ月でした。受けた数々の講義や、RT での議論の時間、フィールドトリップ先でのツアー、夜皆と過ごした自由時間、観光の時間、どれもが貴重で刺激的で楽しくて、どれだけ毎日眠たくても結局朝四時を回らないと毎晩寝ていなかった程に、過ぎていく毎日が惜しかったです。ここで得た一生の大切な仲間と彼らとの思い出、そして旅先で会った人生の先輩からのエールが心にいつもあるので、この先の夢までの道がもう何も怖くありません。素敵すぎる JASCers の一員になれた事を誇りに思うと同時に、私にこの夏をくれた JASC に感謝です。

渡部寛史

私にとっての JASC は“人”という言葉に表されるように思います。

JASC との出会いは 5 年前の夏でした。当時高校 2 年生だった私は、第 59 回会議広島サイトで現地の高校生として、プログラムの一部に参加させていただきました。その時、会議で出会った“59 回 JASCer の皆様”に憧れを抱き、大学生になったら自分もこの会議に応募しようという思いを抱くようになりました。

そして、実際に自分が参加することになった第 64 回会議。春合宿から直前合宿までの準備期間で、多くのアラムナイの皆様や日米学生会議を支えてくださる多くの人々に出会い、多くのことを学ばせていただきました。

本会議中はいつも“自分”という存在と真剣に向き合いました。言いたいことをうまく伝えられない自分、わからないことを素直にわからないと言えない自分、周りのことを気にしすぎて一歩が踏み出せない自分。日本にいる自分とアメリカにいる自分とのズレにいつも苦しみ、何度も自分のことが嫌いになりました。

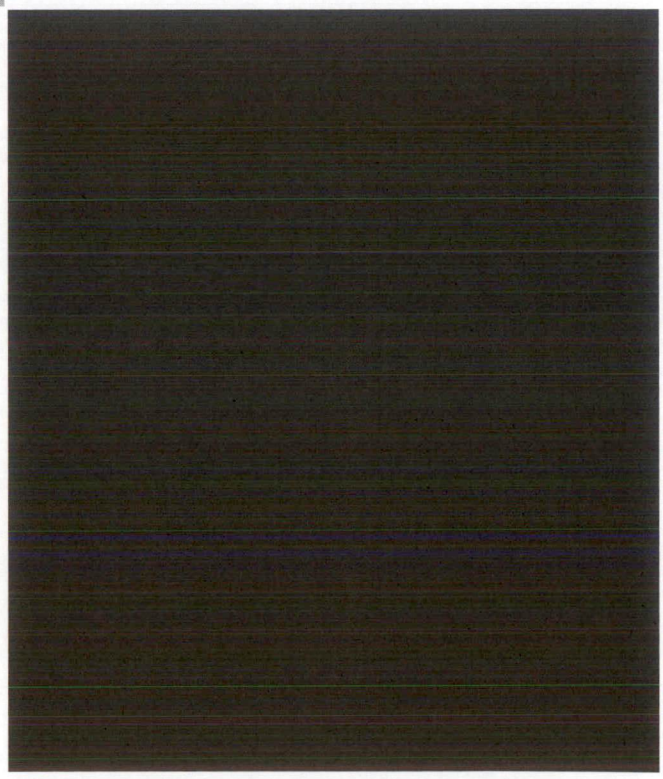
しかしそんな時、いつも私の周りには 70 人の 64th JASCer がいました。彼らの存在、それだけで何度も励まされました。もちろん、意見や考え方の違いで何度も対立し、時には嫌いになりそうでした。しかし、どんな時も逃げずに 70 人全員と向き合うことで、彼らと、彼らの中の“自分”という存在を確認し、嫌いになった自分をその倍以上好きになりました。

私の人生の中には、こんなにも多くの“人”と向き合った経験はありません。そして、こんなにも未来につながる“人”との出会いも経験したことがありません。これからはこの経験を活かして、大きく成長していきたいと思います。

最後に、ご支援をいただいた皆様、アラムナイの皆様、そして会議参加者など、この会議を作ってくださったすべての方々に感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

第6章

日米学生会議にご協力いただいた方々



第64回日米学生会議にご協力いただいた方々（敬称略・順不同）

【主催および後援団体協力者】

一般財団法人国際教育振興会
　理事長　　大井　孝
　参与　　稲田　脩
　事務局　　後藤　明子

国際教育振興会賛助会
　名誉会長　高円宮妃殿下
　会長　　南原　晃
　事務局長　伊部　正信
　事務局　　好中　由起恵

International Student Conferences, Inc
　理事長　　Stephen C. Moss
　事務理事　Sarah Thompson
　事務局　　Michelle Jones

外務省
　広報文化交流部長　　村田　直樹
　人物交流室長　川上　文博
　人事交流室　　首席事務官　伊田　俊雄
　人物交流室　　課長補佐　　伊藤　千恵子

文部科学省
　大臣官房　国際課　課長　　池原　充洋
　大臣官房　国際課　総務係長　植村　正樹

米国大使館
　広報・文化交流部　文化プログラム担当官
　　ウイリアム M. コールマン
　広報・文化交流部　レファレンス資料室　室長
　　笠　優子

一般社団法人　日米協会
　会長　　大河原　良雄
　専務理事　渡辺　隆

日米文化センター
　日本代表　伊部　正信

【広報活動】

竹本　秀人　国際ウェールズ環境総研　代表
森園　浩一　国際教養大学　国際教養学部　教授
鶴尾　寧　慶應義塾大学　学生部国際交流支援グループ
真下　恵実　慶應義塾大学　学生部国際交流支援グループ
若松　智明　早稲田大学 経営企画課
杉浦　絵里　明治大学　国際教育事務室
中村　真伊　東海大学　国際教育課
木ノ上　高章　東海大学　医学部
武田　興欣　青山学院大学 国際政治経済学部 准教授
同志社大学　アメリカ研究部
林田　雄三　大阪府立大学国際交流推進機構 国際交流課
藤田　清士　大阪大学　大阪大学大学院工学研究科
竹花　安子　立命館大学　国際部 衣笠国際教育課
橋本　一郎　京都大学　研究国際部　国際交流課

【選考活動】

同志社大学　アメリカ研究所
竹本　秀人　国際ウェールズ環境総研　代表
森田　正英　国際ビジネスコンサルティング事務所　代表
中村　信之・大阪大学大学院 国際公共政策研究科　博士課程
高橋　泰　国際医療福祉大学　教授
乗竹　亮治　特定非営利活動法人 日本医療政策機構　ディレクター

田辺　和子　日本女子大学　文学部日本文学科
教授
金井　隆　三菱UFJ銀行 企画部 主計室 調査役
市川　裕康　株式会社ソーシャルカンパニー
代表取締役

【春合宿】
綾部　功　東海大学　文学部英語文化
コミュニケーション学科　准教授
Ashley Hill　関西大学

【東北研修】
勝倉　彌司夫 宮城県南三陸町　元教育長
三浦　清隆　宮城県南三陸町　復興企画課　課長
佐々木　いくえ　東北福祉大学　看護学部
尾崎　由明　石巻専修大学　総務担当
熊谷　俊輔　気仙沼観光コンベンション協会
主事

【防衛大学校研修】
國分　良成　防衛大学校　学校長
山口　昇　防衛大学校　総合安全保障研究科
教授
武藤　茂樹　空将補　防衛大学校
教授兼教授防衛学教育学群長
市川　倫々恵　防衛大学校　人間文化学科
海上要員
広報専門官はじめその他防衛大学校の皆様

【自主勉強会】
篠原　初枝　早稲田大学大学院
アジア太平洋研究科　教授

【日米学生会議同窓会協力者】
秋間　修　天野　順一　飯島　智紀
伊丹　吉彦　今井　義典　岩崎　洋一郎
梅崎　渉　大高　巽　大塚　雄三
岡本　実　岸田　守　木ノ上　高章
小林　規威　竹内　幸美　竹本　秀人
辻　喜久子　冨川　秀二　富永　宏
中瀬　正一　中山　智夫　西田　尚弘
乗竹　亮治　橋本　徹　花田　愛
グレン・S・フクシマ　橘・フクシマ・咲江
福谷　尚久　降旗　健人　細野　恭平
宮崎　久　八木　健　山田　英二
山田　勝　山田　良子　山室　勇臣
山本　東生　和田　昭穂
第60、61、62、63回日米学生会議実行委員会/参加者
一同

【各分科会活動事前活動】
■安全保障と日米
長島　昭久　衆議院議員、内閣総理大臣補佐官
外交安全保障担当
内匠　豊　衆議院議員、
長島昭久事務所　事務局長
中込　清美　一般社団法人政経倶楽部連合会
コーディネーター
孫崎　享　元外務省国際情報局長、
元防衛大学校教授

■環境と科学技術
竹本　秀人　国際ウェールズ環境総研　代表
Andrew DeWit　立教大学　教授
Mark Z. Jacobson　Professor at Stanford
University

■グローバル化における文化芸術
近藤　誠一　文化庁　長官
Akira Tana　ジャズ・ミュージシャン

■現代社会における企業活動と倫理
天野　順一　日米学生会議同窓会　顧問
茂木　賢三郎　独立行政法人 日本芸術文化振興会
理事長
深澤　晴彦　キッコーマン株式会社　海外事業部
管理第2グループ長
三木　肇　伊藤忠商事株式会社　社長秘書

小野　博也　伊藤忠商事株式会社
広報部ＣＳＲ・地球環境室長
猪口　邦子　参議院議員
斎藤　久代　猪口邦子参議院議員　秘書
横山　悠里恵　厚生労働省　政策統括官(労働担当)付　労働政策担当参事官室
調整第一係
中川　敬介　厚生労働省　労働基準局　監督課
企画・法規係
金子　正　厚生労働省　政策統括官付
労政担当参事官室
関口　洸哉　厚生労働省　労働基準局　労災補償部労災補償課　職業病認定対策室
Kei Eriksen　米国NPO法人 iLEAP
the Program Coordinator
Kristina Hemstead　Organic Valley

■人権問題と我々の責務
福島　慎吾　難病のこども支援全国ネットワーク
金　賢喜　朝鮮大学校　指導員
李　秀香　早稲田大学大学院　社会科学研究科
博士後期課程

■パーソナル/ナショナルアイデンティティ
金　賢喜　朝鮮大学校　指導員
Julia Matsumura　Escola Aqualera（ブラジル人学校　神奈川県厚木市）　園長
李　秀香　早稲田大学大学院　社会科学研究科
博士後期課程
Connie So　University of Washington
Professor of Ethnic Studies

■災害復興と社会の再構築
北原　茂実　医療社団法人KNI　理事長
日野間　佳子　医療社団法人　経営企画室
大谷　晃司　福島県立医科大学　医療人育成・支援センター　副部門長、准教授
松井　史郎　放射線医学県民健康管理センター
広報部門長、特命教授
田嶋　要　衆議院議員
宮崎　貴司　小布施町役場　行政経営部門交流グループ　リーダー
佐藤　孝幸　小布施町役場　行政経営部門交流グループ
関　悦子　株式会社ア・ラ小布施　代表
内坂　徹　医療法人花と実　栗の木診療所
所長、小布施町新生病院　元院長
松尾　眞　NPO法人栄村ネットワーク　代表
大宮　透　小布施若者会議 学生実行委員
Kristine Barbier　Public Assistance, Program Specialist/Outreach, Federal Emergency Management Agency, Region V

【ユース・フォーラム・ジャパン】
山本　東生
柳井　俊二　元駐米大使
愛知　和夫　元国務大臣
古澤　昭子
川原田　有一　二松学者大学教授
木ノ上　高章
孫崎　亨
梯　久美子　ノンフィクション作家
渡部　恒雄　東京財団
仙波　憲一　青山学院大学学長

【賛助団体・企業、賛助者】
公益財団法人三菱UFJ国際財団
公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人平和中島財団
公益財団法人東芝国際交流財団
東燃ゼネラル石油株式会社
協和発酵キリン株式会社
住友商事株式会社
富士ゼロックス株式会社
オタフクソース株式会社
市川比呂也（第32回参加者）

アサヒグループホールディングス株式会社
伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
オリックス株式会社
キッコーマン株式会社
キャノン株式会社
株式会社三和
新日本製鐵株式会社
株式会社セブン＆アイ・ホールディングス
禅林寺
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
株式会社ニコン
日産自動車株式会社
日本アイ・ビー・エム株式会社
日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
日本電信電話株式会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
ベイビー・アセット・マネジメント株式会社
丸紅株式会社
三井不動産株式会社
三井物産株式会社
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
三菱UFJリース株式会社
メリックス株式会社

岡本　実
橘・フクシマ・咲江
堤　清二
冨川　秀二
南原　晃
西田　尚弘
橋本　徹
平竹　雅人
八木　健
山田　勝
和田　昭穂

第６４回日米学生会議　日本側報告書

発行日　2013年2月

編集者　伊藤　実梨　川邊　拓也
櫻井　千浪　杉岡　昌太
杉山　和　森田　真弓
八木澤　龍大　山下　祐里奈

発　行　日米学生会議報告書編集委員会
〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷 1-21
一般財団法人国際教育振興会内
日米学生会議事務局

印　刷　北新印刷㈱

Japan-America Student Conference
Since 1934

主　　催：　一般財団法人国際教育振興会

企画・運営：　第６４回日米学生会議実行委員会